

島本町文化財調査報告書

第49集

越谷遺跡 (KT22-1 バンド山) 発掘調査報告書

令和5年5月

島本町教育委員会



1. 東区 第1遺構面 完掘全景（南から）



1. 西区 舌状地形堆積物 東壁断面（北西から）



2. 西区 舌状地形堆積物 東壁断面（南西から）

序 文

本報告書は、令和4年度に実施した越谷遺跡の埋蔵文化財調査成果をまとめたものです。

越谷遺跡では、昭和35年の名神高速道路建設時に、古墳の副葬品と考えられる須恵器、鉄器が採集され、その後の平成3～5年度の名神高速道路拡張工事に伴う調査では、縄文時代から中世にかけての遺構や多数の土器が出土しています。

今回の調査は、島本町JR島本駅西土地区画整理事業に伴い、令和4年6月から10月にかけて現地調査を実施しました。この調査において、鎌倉時代から室町時代のものと推定される溝や柱穴、窯の遺構などが発見され、当時の生活を偲ばせる土器が多数出土しました。いずれも、当地域における人々の生活や、土地利用を明らかにするものであります。

このような成果を得られましたのも、事業主をはじめ、調査地近隣の地元関係者や関係諸機関の皆様のご理解とご協力の賜物です。ここに改めて、お礼を申し上げますとともに、引き続き本町の文化財行政に対し、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

本報告書が、歴史・考古学に携わる方々はもとより、町民の方々に広く活用され、島本町の歴史と文化への関心を深める一助となれば幸いです。

令和5年5月31日

島本町教育委員会
教育長 中村りか

例　　言

1. 本書は、島本町教育委員会が令和4年度に実施した、大阪府三島郡島本町桜井四丁目に所在する、越谷遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査名は、「KT22-1 バンド山」である。
2. 本調査は、島本町JR島本駅西土地区画整理組合の土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。現地調査及び整理調査は、島本町教育委員会の指揮監督の下に株式会社島田組が行った。

【委託事業名称】島本町JR島本駅西土地区画整理事業に伴う越谷遺跡発掘調査

【調査面積】372 m²

【委託契約期間】令和4年6月28日～令和5年5月31日

【現地調査期間】令和4年6月29日～令和4年7月4日
令和4年9月12日～令和4年10月24日

【整理調査期間】令和4年10月25日～令和5年5月31日
3. 現地調査及び整理調査の体制は、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下に、下記の体制（令和4年度役職名で記載）で実施した。

【島本町教育委員会】

島本町教育委員会 教育長 中村りか
島本町教育委員会事務局 教育こども部生涯学習課 課長 安藤謙吾
同担当者 主査 木村友紀、三井義勝、賀納章雄

【株式会社島田組】

代表取締役社長 岩立二郎
文化財事業本部長 利川昇、同 工事部長 足立英彦、同 調査室長 安川賢太
監理技術者 山本瞬、南山昌彦
主任調査員 辻広志
調査員 日紫喜勝重
測量員・調査補助員 西条洋樹、加藤優弥、内田徹、越智理奈、芦田吉史
整理員 木村靖子、田中羽留香、出口まゆみ、岡中喜代美、野村佳弘、井上昌子、山内千恵子、石守瞳、吉村香織、岡田都代、斎藤早苗、森岡沙織、小室恵子、山野恵子、野出操、東山華
4. 発掘調査は辻、日紫喜が、測量は西条、越智が、写真撮影のうち遺構写真は日紫喜が、記録写真は辻が、遺物の取り上げと管理を日紫喜が実施した。整理作業及び報告書作成は、遺物台帳の管理と洗浄・注記・接合等を木村、田中が、遺物実測・拓本・デジタルトレースを山内、石守、吉村、岡田、斎藤、森岡、小室、山野、野出、出口、岡中、野村、井上が、遺物観察表作成を木村_{田中}が、平面図・壁面図・個別遺構図等のデジタルトレースを越智、西条が、挿図作成を辻、木村_{田中}が、遺物写真撮影を日紫喜が主に行った。
5. 本書の原稿執筆は、第1章第1節、第2章第2・3節は木村友紀が、第2章第1節は田中が、第6章はパレオ・ラボ AMS 年代測定グループ（伊藤茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・辻康男）が、その他は辻が行った。編集は、島本町教育委員会の指示の下に辻が行い、東山がこれを補佐した。
6. 発掘調査及び整理調査、報告書作成にあたっては、下の方々及び関係機関のご指導、ご教示、ご協力をいただいた。名前を記して、感謝の意を表します。（50音順、敬称略）

足立佳代、井上満郎、小貫充、岡田賢、木村啓章、佐古愛己、辻康男、豊田裕章、中塚良、藤原昌史、前川佳代、増田富士雄、馬瀬和雄、村田路人、山川均、山中章、山中浩之、吉原忠雄
7. 本調査の記録及び出土遺物は、本町教育委員会において保管している。

凡　例

1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系平面直角座標系VI（測量成果2011）に基づいており、方位は平面直角座標系に基づく座標北を北として表記し、本文中では単位の「m」を省略した。標高は、海拔高（東京湾平均海面高度）を使用し、本文中では「T.P.」を省略した。
2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠他、2007年）に準拠した。粒度及び面積割合は、駿河湾団体研究グループの粒度表を適時使用した。
3. 使用地図は、2,500分の1の地形図『島本町全國』（昭和62年測量、平成23年修正図）を調整して用いた。
4. 遺構平面図や個別の遺構図は、各図にスケールを掲載し、縮尺は40・80・100・200分の1を基本とするが、遺構の規模や紙面に合わせて適時変更した。
5. 遺物実測図は、各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を4分の1とした。実測図の断面は、須恵器・陶磁器・鉄製品を黒塗りに、土師器・黒色土器・瓦器を白抜きに、瓦を斜線とした。遺物番号は、実測図・写真図版共に同一番号である。
6. 槌の用字は、磁器のみ「碗」を用い、他の土器・木製品は「椀」を用いた。
7. 遺構の法量は、基本「m」を用いたが、0.2m未満については「cm」を用いた。遺物の法量は、「cm」を用いた。
8. 本書に収録した図・資料等の引用・参考文献は、各節又は各章の文末に明記し、本書の体裁に合わせて縮小又は拡大したものや、一部加筆したものを用いた。
9. 遺構番号は、各調査区毎に001で始まる3桁の通し番号とし、遺構の性格（種類・属性）は下記の呼称を遺構番号の後ろに付し、「跡」は付さない。
洪水溝（洪水時溢流河川・自然河道）、溝（人工（化）河川・流路）、柱穴、杭穴、穴（ピット）、窪、土坑、落ち込み、段差（段）、杭列（柵・塙）、掘立柱建物、竪穴建物、井戸、池泉、平坦面、畦畔、大畦（畦道）、小畦（手畦）、水口（給排水口）、水田（水田区画）、畑（畠）、耕作溝（欽溝・欽状窪み・素掘り溝）、池（溜池・湧水池）、耕作穴、谷地形（谷状地）、擾乱、不明遺構
10. 写真図版の撮影方向は、座標の東西南北を正確に示すものではなく、調査区のおよその東西南北で示した。
11. 本書で用いた出土遺物の年代観については、下記の文献を主に引用参照した。
 - ・田辺昭三『須恵器大成』琳角川書店、1981年
 - ・森田克行『摂津地域』『弥生土器の様式と編年-近畿編II』神木耳社、1990年
 - ・橋本久和「大阪北部の古代後期・中世土器の様相」『高槻市文化財年報 昭和63年・平成元年度』1991年
 - ・九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年』2000年
 - ・江戸跡遺研究会編『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房㈱、2001年
 - ・中世窯業の諸相実行委員会編『中世窯業の諸相一生産技術の展開と編年』2005年
 - ・田中元浩「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号、一般社団法人日本考古学協会、2005年
 - ・馳大阪府文化財センター編『古式土師器の年代学』2006年
 - ・西村歩「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和 資料集』2008年
 - ・九州近世陶磁学会編『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通』2008年
 - ・角谷江津子『近世京焼の考古学的研究』㈱雄山閣、2016年
 - ・平尾政幸「土師器再考」『史洛 研究紀要』第12号、公益財團法人京都市埋蔵文化財研究所、2019年
 - ・日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』(株)真陽社、2022年

目 次

巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 地理的環境と歴史的環境	5
第1節 調査地の位置と地理的環境	5
第2節 調査地の歴史的環境	7
第3節 既往の調査	10
第3章 発掘調査と整理調査の方法	12
第4章 基本層序と遺構面	15
第1節 基本層序と各層の概要	15
第2節 調査地の地形と堆積状況	21
第5章 調査成果	26
第1節 東区の各遺構面の遺構と遺物	26
第2節 西区の各遺構面の遺構と遺物	45
第6章 自然科学分析	59
第1節 放射性炭素年代測定	59
第7章 総 括	69
第1節 越谷遺跡の時期別消長	69
第2節 舌状地形堆積物の堆積時期	76
第3節 舌状地形堆積物（第8層）と土石流・土砂流堆積物の成因	79
第4節 調査成果の意義	84

写真図版

報告書抄録

奥付

挿図目次

図 1. 調査位置図	1	図 20-1. 東区 第3遺構面 208 土器縫り出土遺物	40
図 2. 島本町大字小字図	6	図 20-2. 東区 第3遺構面 208 土器縫り出土遺物	41
図 3. 道路分布図	8	図 21. 東区 深掘り調査 平面図	43
図 4. 周辺の調査地	11	図 22. 西区 壁面図	46
図 5. 調査地の地区割と調査区名	13	図 23. 西区 東壁面・北壁面縫横変倍図	47
図 6. 土石流・土砂流模式図	17	図 24. 西区 西壁面・南壁面縫横変倍図	48
図 7-1. 調査区周辺柱状図	22	図 25. 西区 第1遺構面 平面図	49
図 7-2. 調査区周辺柱状図	23	図 26. 西区 第1遺構面 包含層及び遺構出土遺物	50
図 8. 土師器段階区分と略年代（平尾 2019）	26	図 27. 西区 第1遺構面 舌状地形堆積物（第8層）	
図 9. 調査地詳細図	27	出土遺物	51
図 10. 東区 壁面図	28	図 28. 西区 第2遺構面 平面図	53
図 11. 東区 東壁面・南壁面縫横変倍図	29	図 29. 西区 第2・3遺構面 遺構図及び出土遺物	55
図 12. 東区 西壁面縫横変倍図	30	図 30. 西区 第3遺構面 平面図	56
図 13. 東区 第1遺構面 平面図	31	図 31. 西区 深掘り調査 平面図	57
図 14. 東区 第1遺構面 遺構図	32	図 32. 略年較正結果	63
図 15. 東区 第1遺構面 包含層及び遺構出土遺物	34	図 33. マルチプロット図	64
図 16. 東区 第2遺構面 平面図	35	図 34. 島本町内等高線図	72
図 17. 東区 第2遺構面 遺構図	36	図 35. 小字「越谷」周辺詳細図	73
図 18. 東区 第3遺構面 平面図	38	図 36. 土師器皿法量分佈図	77
図 19. 東区 第3遺構面 遺構図	39	図 37. 島本町周辺の断層図	81

表目次

表 1. 既往調査地一覧	10	表 6-7. 遺物観察表	91
表 2. 東区基本順序	16	表 6-8. 遺物観察表	92
表 3. 西区基本順序	19	表 6-9. 遺物観察表	93
表 4. 測定試料および処理	60	表 6-10. 遺物観察表	94
表 5. 放射性炭素年代測定および略年較正の結果	62	表 6-11. 遺物観察表	95
表 6-1. 遺物観察表	85	表 6-12. 遺物観察表	96
表 6-2. 遺物観察表	86	表 6-13. 遺物観察表	97
表 6-3. 遺物観察表	87	表 6-14. 遺物観察表	98
表 6-4. 遺物観察表	88	表 6-15. 遺物観察表	99
表 6-5. 遺物観察表	89	表 6-16. 遺物観察表	100
表 6-6. 遺物観察表	90		

写真目次

写真 1. 東区の設定（南から）	2	写真 9. 10/11 府教育庁岡田氏の調査指導（南から）	3
写真 2. 西区の設定（北から）	2	写真 10. 10/14 増田富士雄氏の調査指導（北から）	3
写真 3. 6/29 遺構面確認（北東から）	2	写真 11. 10/15 山中章氏他の視察（南から）	4
写真 4. 6/30 前川氏他視察（南西から）	2	写真 12. 10/18 豊田裕章氏他の視察（北から）	4
写真 5. 現場作業中断と養生作業（北から）	2	写真 13. 10/19 深掘調査と府教育庁木村氏の指導（南から）	4
写真 6. 8/8 府教育庁岡田氏の調査指導（南から）	3	写真 14. 東区埋戻しの完了（北から）	4
写真 7. 8/9 文化財審議委員と山川氏他視察（南から）	3	写真 15. 西区埋戻しの完了（南から）	4
写真 8. 10/6 文全協小賀氏他の視察（南から）	3	写真 16. 測定試料写真	61

卷頭図版目次

卷頭図版 1

1. 東区 第1遺構面 完掘全景（南から）

卷頭図版 2

1. 西区 舌状地形堆積物 東壁断面（北西から）

2. 西区 舌状地形堆積物 東壁断面（南西から）

写真図版目次

図版 1 航空写真

1-1. 調査地周辺航空写真（昭和 30 年撮影）

図版 2 遺構

2-1. 東区 第1遺構面 完掘全景（南から）

図版 3 遺構

3-1. 東区 第1遺構面 遺構検出状況（南から）

3-2. 東区 第1遺構面 耕作溝、耕作穴等（南から）

図版 4 遺構

4-1. 東区 第1遺構面 完掘全景（北から）

図版 5 遺構

5-1. 東区 第1遺構面 遺構検出状況（北から）

5-2. 東区 第1遺構面 耕作溝、耕作穴等（北から）

図版 6 遺構

6-1. 東区 第2遺構面 完掘全景（北から）

図版 7 遺構

7-1. 東区 第2遺構面 遺構検出状況（北から）

7-2. 東区 第2遺構面 101 溝、102 土坑、103・104
耕作穴等（北から）

図版 8 遺構

8-1. 東区 第2遺構面 完掘全景（南から）

図版 9 遺構

9-1. 東区 第2遺構面 105 土坑、108 耕作地・平場、
109 管理立地等（南から）

9-2. 東区 第2遺構面 105 土坑（東から）

図版 10 遺構

10-1. 東区 第3遺構面 完掘全景（北から）

図版 11 遺構

11-1. 東区 第3遺構面 遺構検出状況（南から）

11-2. 東区 深掘り調査全景（北東から）

図版 12 遺構

12-1. 西区 第1遺構面 完掘全景（南から）

12-2. 西区 第1遺構面 完掘全景（北から）

図版 13 遺構

13-1. 西区 第1遺構面 耕作溝（北東から）

13-2. 西区 第1遺構面 耕作溝（東から）

13-3. 西区 第1遺構面 耕作溝（東から）

13-4. 西区 第1遺構面 耕作溝（東から）

13-5. 西区 第1遺構面 耕作溝（東から）

図版 14 遺構

14-1. 西区 第2遺構面 遺構検出状況（南から）

14-2. 西区 第2遺構面 204・205 柱穴（西から）

14-3. 西区 第2遺構面 202 土坑、203・206 柱穴（西から）

14-4. 西区 第2遺構面 植物付壁面（西から）

14-5. 西区 第2遺構面 10-2 層遺物出土状況（西から）

図版 15 遺構

15-1. 西区 第3遺構面 301～305 土砂流下部抉込痕（北東から）

15-2. 西区 第3遺構面 301～305 土砂流下部抉込痕（北西から）

図版 16 遺構

16-1. 西区 第3遺構面 東壁壁面 306 後流の流路（北西から）

16-2. 西区 第3遺構面 北壁壁面 306 後流の流路（南から）

図版 17 遺構

17-1. 西区 深掘り調査（南西から）

17-2. 西区 深掘り調査（北から）

17-3. 西区 深掘り調査（北西から）

17-4. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物全景（西から）

図版 18 遺構

18-1. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物半南（西から）

18-2. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分①（西から）

図版 19 遺構

19-1. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分②（西から）

19-2. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分③（西から）

図版 20 遺構

20-1. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分④（西から）

20-2. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分⑤（西から）

図版 21 遺物

21-1. 東区 208 土器溜り出土遺物 1（土師器皿集合写真）

21-2. 東区 208 土器溜り出土遺物 2（瓦器椀）

図版 22 遺物

22-1. 東区 表採遺物（複弁 8 莖蓮華文軒丸瓦）

22-2. 東区 208 土器溜り出土遺物 3（土師器甕、鉄滓、埴輪）

22-3. 東区 208 土器溜り出土遺物 4（須恵器甕）

22-4. 東区 208 土器溜り出土遺物 5（貿易陶磁器）

図版 23 遺物

23-1. 西区 舌状地形堆積物 第8層上位層

出土遺物（土師器皿・甕、瓦器椀）

23-2. 西区 舌状地形堆積物 第8層下位層 出土遺物（土師器皿）

图版24 遗物

24-1. 西区第2-1～10层・第10-2层・第11-1层出土遗物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本調査は、事業計画約13haの土地区画整理事業に伴う発掘調査である。この土地区画整理事業に伴い、平成29年度に道路予定地の確認調査を実施したが、遺構・遺物の存在が確認できなかった。このため当初、当該地周辺は、土地区画整理事業に伴う発掘調査の対象とならなかった場所である。

しかしながら、令和2年度に実施した当該地での工事立会の際に、鎌倉時代の遺物やそれ以前の造成土の存在を確認した。その位置は、当初の道路計画の南端付近であったが、道路計画がより南側に変更されたため、計画変更された南側の道路部分を対象として、令和3年度に再度、確認調査を行った。その結果、遺構・遺物の存在を確認したため、事業主と協議を行い、令和4年度に発掘調査を実施することとした。

なお、道路部分より南は、尾根を切土する計画となっていたが、協議中の令和3年度に立会調査を実施した結果、遺構・遺物の存在が確認できなかったため、本調査の対象としなかった。

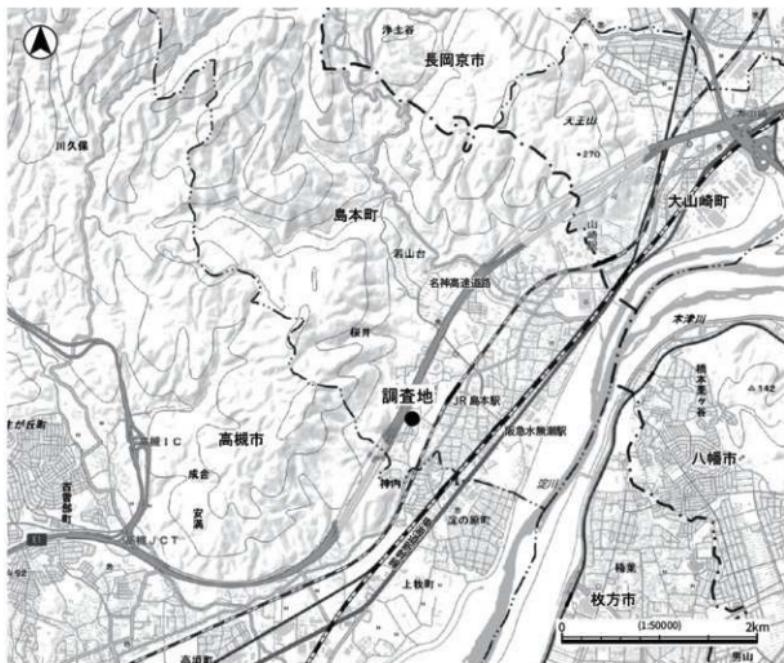


図1. 調査地位置図

第2節 調査の経過

今回の発掘調査（KT22-1 バンド山）は、6月の調査着手直後に調査の中断があり、9月中旬より再開して、10月末に終了した。現地調査の経過概要は、以下の通りである。

【令和4年(2022)】

6月 29日 午前、尾山遺跡から越谷遺跡へ資材・重機の搬送準備。午後、東区に調査トレントを設定し、写真撮影後に表土掘削を開始する。本日は、東区の南端から8m余りを表土掘削終了。明日、来客のため西区に重機を移動し、表土掘削を準備。

6月 30日 午前11時頃、大阪府教育府文化財保護課課長補佐岡田賢氏、奈良女子大学研究員前川佳代氏、島本町議会議員永山優子氏が視察のため来跡。西区の掘削範囲位置を確認した後、表土掘削を開始。本日、西区の半分程度を終了。

7月 1日 西区・東区共に污水樹や污水本管等による攪乱が確認されたため、施工業者と協議を行う。この問題が解決するまで、7月5日から発掘調査を一時中断することとなる。西区は表土掘削終了後、遺構検出と写真撮影実施。

7月 4日 東区の重機による表土掘削終了。

7月 5日 現場作業中断。以後、現場にて遺物洗浄および注記作業を、7月 22日まで行う。

8月 5日 8月9日の見学会のため、現場の清掃を実施。西区にて排水作業、流入土の除去、壁面の精査後、遺構検出を実施。壁面分層と検出遺構に白線を入れ、検出写真撮影。東区にて排水作業後、流入土の除去開始。

8月 8日 東区にて遺構検出実施。壁面分層と検出遺構に白線を入れ、検出写真撮影。西区にて、試掘坑の再掘削を実施。大阪府教育府文化財保護課岡田賢氏が来跡し、調査状況を確認。

8月 9日 来跡者用の導線整備。午前、島本町文化財保護審議会委員である大阪大谷大学非常勤講師吉原忠雄氏、京都市歴史資料館館長井上満郎氏、神戸女子大学教授村田路人氏、佛教大学准教授佐古愛己氏が視察。午後、立正大学博物館学芸員足立佳代氏、奈良女子大学研究員前川佳代氏、大阪大学招へい研究員豊田裕章氏、文化財保存全国協議会小貫充氏、日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会山川均氏が視察のため来跡。終了後にシート養生実施。

9月 12日 現地調査を再開。東区の壁面清掃後、西壁面分層作業。作業完了後に写真撮影。土層断面図作成後、污水樹掘込と拡張トレントの



写真1. 東区の設定 (南から)



写真2. 西区の設定 (北から)



写真3. 6/29 遺構面確認 (北東から)



写真4. 6/30 前川氏他視察 (南北から)



写真5. 現場作業中止と養生作業 (北から)

- 掘削開始。拡張トレーナーから溝状の擾乱を検出。
- 9月13日 東区西側污水樹掘込の擾乱掘削終了。
- 9月14日 東区南壁・東壁の壁面清掃作業。完了後に写真撮影と土層断面図作成。
- 9月15日 東区の第1遺構面遺構検出。完了後に写真撮影、遺構掘削開始。
- 9月16日 東区の遺構掘削終了。全景写真撮影、平面図作成終了。台風14号対策のための養生を実施。
- 9月20日 台風14号が九州・中国地方に上陸し大雨となるが、通過後に晴れとなる。排水作業後、遺構掘削実施。土層断面図作成。
- 9月21日 東区第1遺構面の遺構完掘、完掘写真撮影、平面図作成。第2遺構面包含層掘削、遺構検出。遺構検出写真撮影、遺構掘削、土層断面図の作成。
- 9月22日 東区第2遺構面の遺構掘削終了後、完掘写真撮影。3面目遺構包含層掘削。櫛バレオ・ラボ辻 康男氏来跡。複弁8葉蓮華文軒丸瓦を表採。台風15号接近、東海地方を通過。
- 9月26日 東区第3遺構面包含層掘削終了。遺構検出と遺構掘削。遺構の半裁写真撮影、完掘全景写真撮影。遺構平面図、断面図の作成。
- 9月27日 東区第3遺構面の谷状地掘削終了。深掘り調査を実施し、土層断面図追加作成。¹⁴Cサンプル採取。壁面を雨対策のため養生。
- 9月28日 本日より西区再開。東壁土層断面精査。基準点移設。東区の埋戻し開始。
- 9月29日 西区土層断面精査。東区の東側污水樹掘削終了。東区埋戻し。
- 9月30日 西区の西側污水樹掘込掘削開始。東区埋戻し完了。
- 10月3日 西区西側污水樹掘込掘削。
- 10月4日 西区西側污水樹掘込掘削。北側の試掘西1を再掘削。
- 10月5日 西区南側の試掘西2を再掘削。完了後、西壁土層断面図作成。污水水管掘削。
- 10月6日 北側擾乱除去。完了後、遺構検出、終了後に検出写真撮影。検出状況図作成。奈良女子大学研究員前川佳代氏、文化財保存全国協議会小貫充氏が視察のため来跡。
- 10月11日 西区第1遺構面の耕作溝掘削。完了後、写真撮影、平面図作成。北側包含層掘削。大阪府教育庁文化財保護課岡田 賢氏が来跡し、調査状況を確認。
- 10月12日 西区第2構面の遺構掘削後、土層断面図作成。作成後完掘撮影。第3遺構面包含層掘削開始。
- 10月13日 第3遺構面遺構検出。検出完了後に写真撮影。遺構掘削。第11-1層包含層から土師器の津根型鍋が出土。
- 10月14日 西区第3遺構面の遺構掘削。遺構半裁掘削後、土層断面図



写真6. 8/6 大阪府教育庁岡田氏の調査指導 (南から)



写真7. 8/9 文化財審議委員と山川氏他視察 (南から)



写真8. 10/6 文全協小貫氏他の視察 (南から)



写真9. 10/11 府教育庁岡田氏の調査指導 (南から)



写真10. 10/14 墓田富士雄氏の調査指導 (北から)

作成。完掘全景写真撮影。京都府埋蔵文化財調査研究センター理事増田富士雄氏による土砂流の確認と調査指導。(㈱)パレオ・ラボ辻 康男氏・石川智氏が調査補助。

10月15日 向日市埋蔵文化財センター中塙 良氏による堆積物の確認。三重大学名誉教授山中 章氏、島本町議會議員永山優子氏が視察。調査区を養生し、18日の来跡者用導線の整備。

10月18日 来跡者は、8月9日と同じく奈良女子大学研究員前川佳代氏、大阪大学招へい研究員豊田裕章氏、文化財保存全国協議会小貫 充氏、鎌倉・中世文化研究センター馬淵和雄氏、その他に産経新聞社と朝日新聞社が視察のため来跡。

10月19日 深掘り調査開始。土層断面を写真撮影後、断面図作成。大阪府教育庁文化財保護課木村啓章氏、(公財)向日市埋蔵文化財センター中塙 良氏、(㈱)パレオ・ラボ 辻 康男氏が来跡し、堆積物の再確認を実施。¹⁴Cサンプル採取。

10月20日 西区西壁包含層の遺物を採取。北壁の精査と写真撮影、土層断面図作成。西区の埋戻しを開始。

10月21日 西区埋戻しを継続。

10月24日 西区の埋戻しを完了。調査備品の撤収を完了。



写真 11. 10/15 山中章氏他の視察 (南から)



写真 12. 10/18 豊田裕章氏他の視察 (北から)



写真 13. 10/19 深掘調査と府教育庁木村氏の指導
(南から)



写真 14. 東区埋戻しの完了 (北から)



写真 15. 西区埋戻しの完了 (南から)

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 調査地の位置と地理的環境

本町は、大阪府の北部、京都府の境に位置し、その東側は北から京都府京都市、長岡京市、大山崎町、八幡市、西側は大阪府高槻市、南側は淀川をはさんで枚方市に隣接する。町域は、概ね南北約8.9km、東西約3.3kmの範囲に南北に細長く広がり、その面積は約16.81km²である。標高は一番低い所が淀川河床で標高4m、一番高い所が駅遊岳の標高631mである。町の北側から西側が山地・丘陵地であり、町域の約7割を占めている。市街地は、天王山の南側に広がる平坦地に形成されている。

山地部北側にはポンポン山山地が連なり、その東南側に一段低い天王山山地がある。これらの山地は主に丹波層群によって形成されている。天王山山地の南側には狭い範囲ながら山崎・桜井丘陵とよばれる丘陵地がみられ、主に大阪層群によって形成されている。また、平野部は9~13m程度の標高で広がり、主に河川堆積物によって構成され、淀川低地とよばれる。本町南東の山崎狭隘部においては、京都盆地から流れ込む桂川、宇治川、木津川の三川が合流し、淀川となり大阪平野を南西に流れる。淀川低地は、主に淀川からの供給物によって構成されるが、山地・丘陵地を源とする水無瀬川等や他の河川からの堆積物によっても形成され、小河川付近には扇状地が広がる。そして現在、島本町域では平野部から丘陵部にかけて宅地や工業用地として開発が進んでいる。

淀川は琵琶湖・淀川水系を作り、古来日本最大の内陸水運路の一つとして重要な役割を果たしてきた。特に長岡京・平安京の遷都以降その重要性を更に増していった。平野部においても、京と西国とを結ぶ山陽道（西国街道）が通り、陸路においても重要な幹線路が貫いていた。現在も町内には、JR東海道新幹線、JR東海道本線、阪急京都線といった鉄道や、名神高速道路、国道171号といった重要な交通幹線が通っている。

越谷遺跡は、本町内の南西部の山麓に位置している遺跡で、南北は御所池から桜井三丁目、桜井四丁目、桜井台、大字桜井に広がっている。その大部分は緩やかな南東下がりの段丘上（沖積扇状地上位面）で、近年まで水田や畠としての土地利用が顕著な地域であった。昭和40年に作成された図2の島本町大字小字図からみてみると、大字桜井の小字「御所内」と「バンド山」、「六条殿」等にあたる。今回の調査地は、桜井四丁目の中字「バンド山」にあたる。

<引用参考文献>

島本町史編さん委員会編『島本町史』本文篇・史料篇、島本町役場、1975・1976年

島本町教育委員会編『島本町文化財調査報告書』第1集～第42集、第44集～第47集、2002～2023年

島本町教育委員会・(公財)大阪府文化財センター編『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第43集、(公財)

大阪府文化財センター調査報告書第316集、2022年

名神高速道路内遺跡調査会編『水無瀬荘跡遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第1輯、1996年

名神高速道路内遺跡調査会編『越谷遺跡他発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2輯、1997年

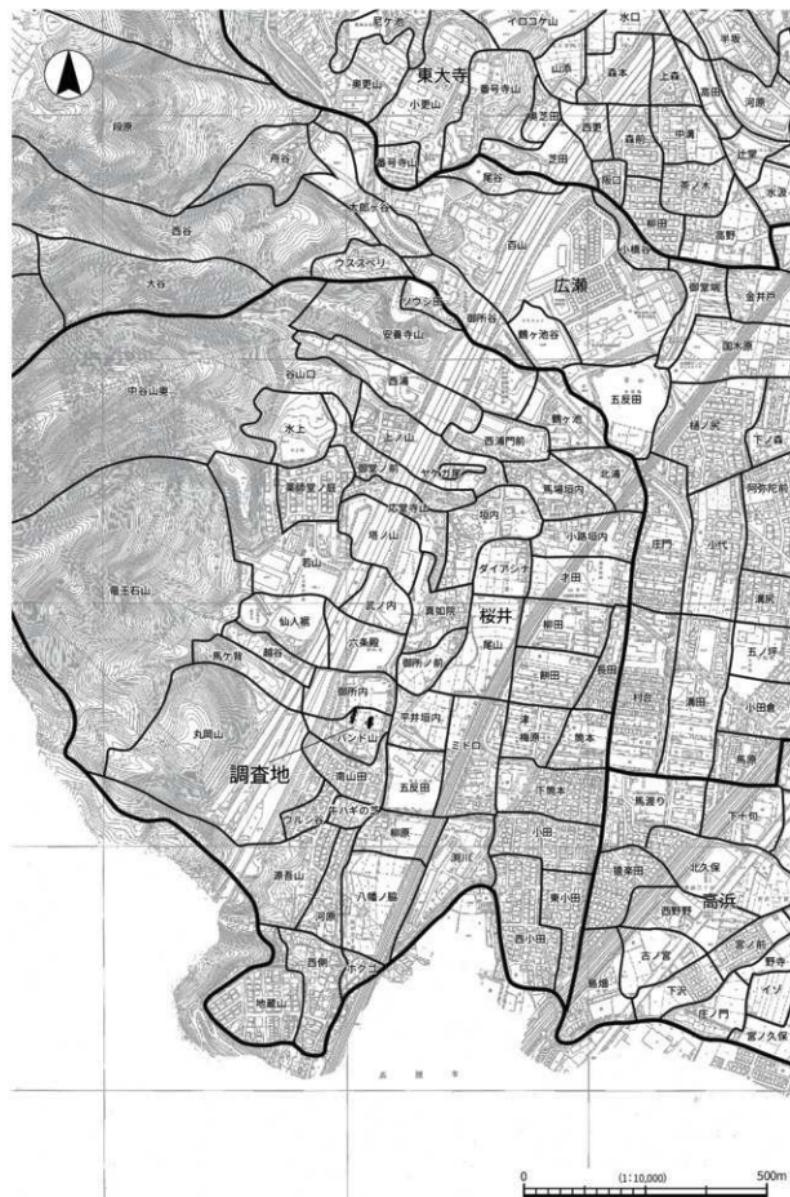


図2. 島本町大字小字図

第2節 調査地の歴史的環境

本町における人々の活動の痕跡を、図3の遺跡分布図よりたどると、最も古くは旧石器時代にまでさかのぼる。段丘上に位置する山崎西遺跡では、国府型ナイフ形石器やサスカイトの剥片を数点採集しており、後期旧石器時代におけるキャンプサイトなどの存在を想定することができる。

縄文時代になると、段丘上に位置する越谷遺跡において縄文時代中期の土器片が多数出土している。また、越谷遺跡に接して、丘陵裾部から平野部にかけて広がる尾山遺跡においても、縄文時代後期から晩期にかけての遺物が出土し、谷地形の埋没土からは縄文時代後期の土器片がまとまって出土している。このほか、平野部に広がる広瀬遺跡では縄文時代晩期の竪穴建物を確認しており、集落が展開していた可能性が考えられる。

次に弥生時代では、尾山遺跡において、弥生時代前期から後期にかけての遺物の出土が見られ、後期の銅鏡なども出土している。そして、弥生時代中期以降、水田跡や溝など耕作に関わる遺構が多く検出されている。また、桜井駅跡の周辺で弥生時代前期の遺物が出土しているが、弥生時代中期になると、青葉遺跡A地点・B地点において竪穴建物や溝を検出しており、桜井駅跡・広瀬溝田遺跡では耕作溝を確認している。これらは、いずれも沖積部に位置する遺跡であり、この付近一帯においては、弥生時代中期に集落や耕作地が広がっていたものと考えられる。また、弥生時代後期になると、段丘上に位置する越谷遺跡や伝待宵小侍從墓において当該期の遺物の出土を確認している。

古墳時代においては、これまでのところ集落に関わる明確な遺構の検出は少ないが、尾山遺跡では、古墳時代初頭の水田跡が確認されているほか、円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪等の破片が出土している。また、隣接する越谷遺跡では、名神高速道路建設工事に伴い出土した遺物の中に、古墳の副葬品と考えられる須恵器杯・壺、刀等の遺物が存在した。さらに、源吾山遺跡と神内古墳群は、平野部を南に望む丘陵上に位置し、一続きの古墳群であろうと推定されている。源吾山遺跡は、横穴式石室の一部と考えられる石材の散布と、名神高速道路建設工事に伴い出土した副葬品と考えられる須恵器から古墳の存在が想定されており、島本町と高槻市をまたいで広がる神内古墳群においては、高槻市側で横穴式石室が確認されており、ほかに墳丘のような形状の地形が存在している。

飛鳥時代から奈良時代になると、鈴谷瓦窯跡や御所池瓦窯跡が操業した。鈴谷瓦窯跡は、これまでに2基の瓦窯が発掘調査において確認されており、出土瓦の特徴から7世紀末から8世紀初頭にかけてのものと考えられている。また、鈴谷瓦窯跡の南西側にある御所ノ平遺跡では竪穴建物を確認しており、建物内から鈴谷瓦窯跡と同様の瓦や粘土塊が出土していることから、瓦製作の工房の可能性がある。御所池瓦窯跡は、飛鳥時代末から奈良時代前半の瓦を焼成した瓦窯であり、この瓦窯で焼かれたものと考えられる軒瓦の中には、明日香村・飛鳥寺東南禅院や高槻市・橿原寺の瓦と同様のものが見つかっている。今後、御所池瓦窯跡の周辺において、瓦を供給した寺院等が見つかる可能性があるが、同様瓦の多さから御所池瓦窯跡の瓦を供給した候補地としては、橿原寺が有力であろう。このほか、奈良時代中期には、水無瀬川の右岸に東大寺領水無瀬荘が存在していたことが、正倉院に伝わる天平勝宝8年(756)「摂津国嶋上郡水無瀬絵図」によって知ることができ、その付近一帯が水無瀬荘として埋蔵文化財包蔵地となっている。

ところで、前節で本町は水運・陸路とも交通の要衝であったと述べたが、『続日本紀』和銅4年(711)には、平城京と西国とを結ぶ古代山陽道に駅伝制の駅が置かれたとあり、本町には大原駅が設置



図3. 遺跡分布図

されたと考えられている。大原駅は平安時代前期のうちには廃止になったようであるが、長岡京・平安京遷都を経て、平安時代になると、京と西国とを結ぶ交通の要衝としての本町の立地の重要性は増していった。広瀬遺跡においては、西国街道沿いで発掘調査で小石敷きの路面をもつ中世の道路状遺構を検出している。そこには平安時代の遺物も含まれ、その整備が古代にまで遡る可能性がある。また、淀川河川敷にある広瀬南遺跡では、河道中より須恵器の大甕が見つかっており、これは淀川の水運により運ばれてきたもの可能性がある。

さて、このような地勢にある本町においては、平安時代から鎌倉時代にかけて、天皇や貴族が度々遊行に水無瀬の地へ訪れるようになった。桓武天皇や嵯峨天皇は遊獵に訪れ、文徳天皇の子である惟喬親王はこの地に御殿を築いている。広瀬遺跡においては平安時代前期の建物群を検出しているが、これは、惟喬親王の水無瀬離宮関連施設の可能性がある。また、鎌倉時代には、後鳥羽上皇が正治元年(1199)に水無瀬離宮の造営を行った。この水無瀬離宮は建保4年(1216)の洪水で倒壊したが、翌年には山上に再建されている。広瀬遺跡では、後鳥羽上皇の水無瀬離宮に関連するものと考えられる建物遺構や所用瓦を検出しており、また、丘陵上にある西浦門前遺跡では、庭園と考えられる遺構を検出している。桜井地区においては、鎌倉時代後半の遺構を広く確認することができ、この時期に桜井地区が大きく開発されていることが伺える。尾山遺跡では池泉なども見つかっており、有力者の閑与が伺えるが、後鳥羽上皇配流後の本町域をどのような人物が開発を行ったのかは明らかとなっていない。

その後、南北朝期から室町時代へと時代が動くとき、楠木正成・正行父子が別れた場所として『太平記』に記述のある桜井宿が、現在桜井駅跡として国史跡に指定されている。父子別れの場面は『太平記』という軍記物語の一場面であり、事実であるかどうかは不明であるが、発掘調査で『太平記』の記述を裏付けるような資料は得られていない。また、桜井駅の前身として、近辺に大原駅があったと考えられているが、これまでのところ、これら駅に関連する資料についても確認していない。ただし、桜井駅跡における発掘調査では、前述の弥生時代の遺構・遺物のほか、鎌倉時代・室町時代・江戸時代の遺構・遺物を検出しており、特に、室町時代から江戸時代にかけての井戸を複数まとめて確認している。

近世以降になると、発掘調査で得られた資料では、山崎東遺跡において地下貯蔵庫の痕跡と考えられる石組み遺構を検出している。

<引用参考文献>

島本町町史編さん委員会編『島本町史』本文篇、1975年

島本町教育委員会編『島本町文化財調査報告書』第1集～第42集・第44集～第47集、2002～2023年

島本町教育委員会・(公財)大阪府文化財センター編『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第43集・(公財)

大阪府文化財センター調査報告書第316集、2022年

名神高速道路内遺跡調査会編『水無瀬莊跡遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第1輯、1996年

名神高速道路内遺跡調査会編『越谷遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2輯、1997年

第3節 既往の調査

当該地は、古墳時代の集落跡である、埋蔵文化財包蔵地「越谷遺跡」の範囲内である。昭和39年(1964)の名神高速道路敷設工事時には、古墳時代の須恵器や刀の出土したことが知られている。

また、名神高速道路拡幅工事の際には、平成3年度(1991)及び平成4年度(1992)に名神高速道路内遺跡調査会によって表1及び図4の発掘調査及び試掘調査が実施されており、縄文時代の遺物包含層、弥生時代から鎌倉時代の遺構・遺物を検出している。

平成29年度(2017)の土地区画整理事業に伴う確認調査では、遺構・遺物の存在は確認できず、基本的には土山が堆積していたが、北側では一部において水成堆積物の存在を確認した。

令和2年度(2020)に実施した立会調査の際には、鎌倉時代の遺物を多く含む包含層とその直下に造成土と考えられる土層を確認した。

令和3年度(2021)に実施した確認調査では、2時期の遺構面を確認し、弥生時代、平安時代～鎌倉時代に属すると考えられる遺物が出土したため、令和4年度(2022)に実施した今回の調査では、東区・西区ともに2面調査として実施したものである。

なお、令和3年度(2021)に実施した当該地から南に位置する尾根の切土の立会調査では、遺構・遺物の存在は確認できず、地表面からすぐ大阪層群と考えられる土層が堆積していることを確認した。

<引用参考文献>

島本町教育委員会編『島本町文化財調査報告書』第1集～第42集・第44集～第47集、2002～2023年

名神高速道路内遺跡調査会編『水無瀬莊跡遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第1輯、1996年

名神高速道路内遺跡調査会編『越谷遺跡他発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2輯、1997年

表1. 既往調査地一覧

所収遺跡名	調査面積(m ²)	調査期間	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
① 越谷遺跡 第4トレンチ	48	平成3年2月試掘	集落・田畠	縄文・弥生・古墳・平安・鎌倉・江戸	土坑383 柱穴83 溝28	縄文・弥生土器・埴輪・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器	中世の土坑から草島式土器(吉備系土師質)出土
② 越谷遺跡 第5トレンチ	511	平成4年1月試掘 1月～翌年3月全面調査					
③ 越谷遺跡 第6トレンチ	3710	平成4年5月試掘 5月～翌年3月全面調査					
④ 越谷遺跡 第7トレンチ	282	平成4年9月試掘					
⑤ 板井御所跡 第8トレンチ	650	平成4年7月試掘					
⑥ 前所池瓦窯跡 第3トレンチ	100	平成4年11月試掘					
⑦ 宝持宮小物庭跡 第2トレンチ	108	平成5年4月試掘 10月から全面調査				弥生土器 (苔食層から)	
越谷遺跡 (保井二～五丁目の各一部)	84	平成30年2月～3月確認	散布地			弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦・瓦面子・加工杭	遺物包含層を確認

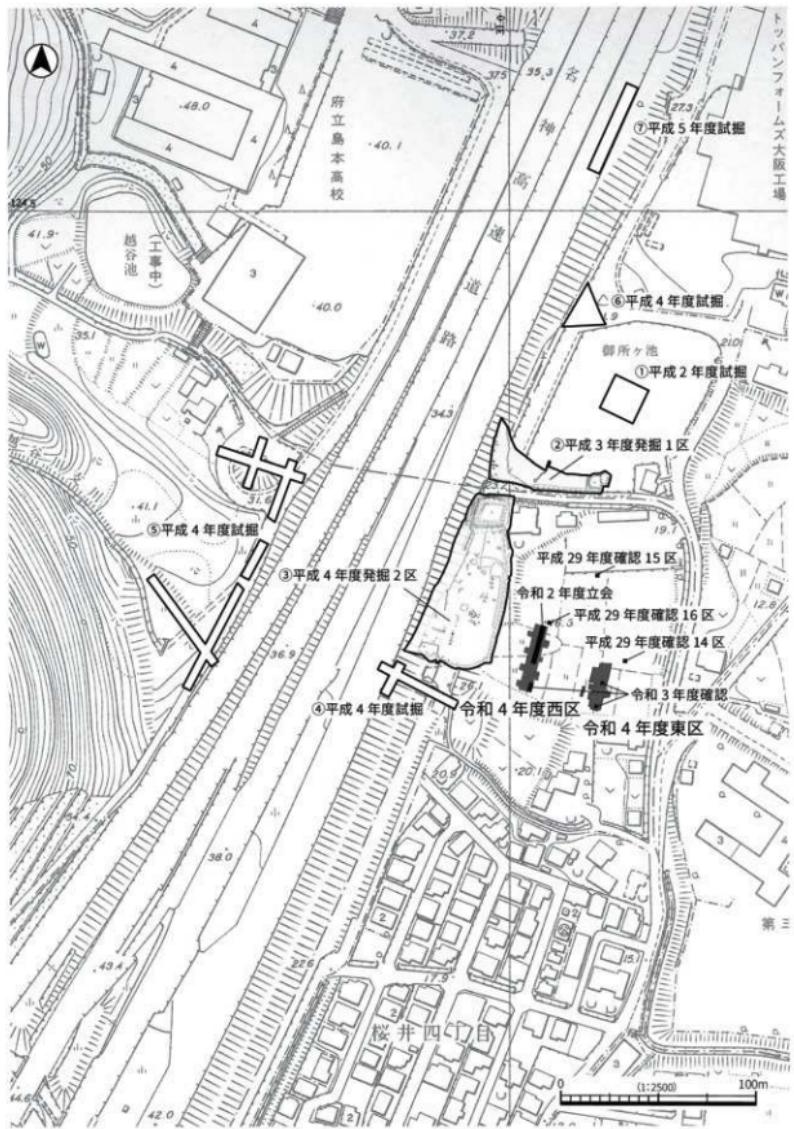


図4. 周辺の調査地

第3章 発掘調査と整理調査の方法

今回対象となった越谷遺跡の発掘調査は、中央自動車道西宮線（名神高速道路）拡幅工事に伴い、平成3～5年度に名神高速道路内遺跡調査会が、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下に実施した前回の調査（以下、「前回調査」という。）と、今回が発掘としては2回目の調査（以下、「今回調査」という。）である。発掘調査及び整理調査は、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下に、本町教育委員会が実施した。

1. 調査名・調査区名

調査名は、越谷遺跡「KT22-1 バンド山」を使用し、出土遺物への注記は、「KT22-1」を記した。調査区名は、図5の東区と西区の2地区であるため、これを調査区名（トレーナー名）として用いた。

2. 地区割名

地区割名は、公益財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』（2010）に準拠し、世界測地系（測地成果2000）の平面直角座標系第VI系を用いた。調査地の地区割名は、第I区画が「L7」、第II区画が「5」、第III区画が図6の下図に示す「14N・14O」の範囲にあたる。なお、今回の調査における遺物の取り上げ範囲は、調査区を基準として行った。

3. 層名・遺構面

層名の呼称は、上層からの通し番号とし、各調査区内の地層を土質・土色や出土遺物等から、東区と西区をそれぞれ13層に細別した。

なお、層名においては、層準を表す数字に、自然堆積した岩屑が動植物や人為による搅拌と有機物の混入により团粒という堆積構造をもつ土壤化作用を受けた地層（土壤層・耕作土・作土・耕土）を「a層」、そうでない岩屑の地層（自然堆積層）を「b層」、岩屑に少し土壤化作用が及んでいる地層を「a'層」として用いられることが多いが、一覧表には参考として記入しているが層名には付加していない。

また、調査の進展に従い、基本層序間に挟在する間層や、その層より掘り込まれた遺構やその埋土等が存在した場合は、枝番を付した。

調査深度は、最終の深掘り調査を、法令に定められた掘削方法に従いながら、中段を設けるなどして表土から約3mを限界として行った。遺構面は、東区では第3-1層、第10-1層・第11-1層、第13-1層の上面で、西区では第3層、第10-2層、第12-1層・第13-1層の上面で検出した。それぞれ第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面と呼称した。なお、この第13層以下については、限界深度に注意を払いながら深掘り調査を実施した。

4. 遺構名

遺構番号は、各調査区の遺構面毎に3桁の通し番号とし、凡例に示す遺構の属性は遺構番号の後に付け、「番号+遺構属性」という形で表現した。

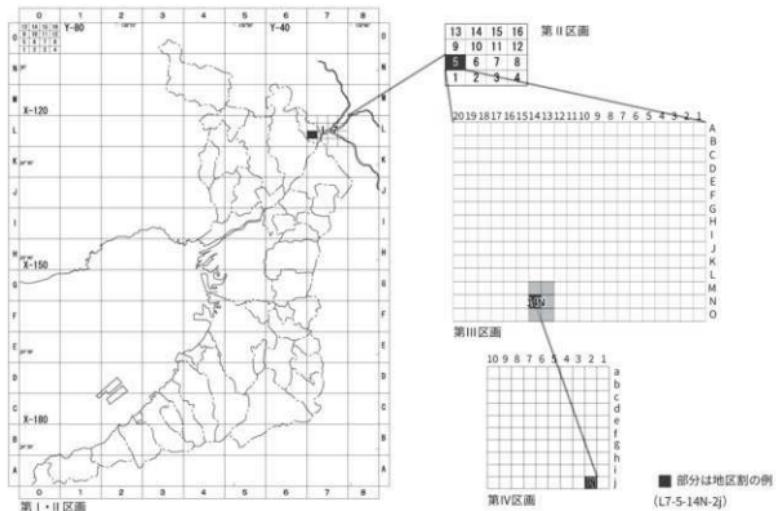


図5. 調査地の地区割と調査区名

5. 発掘調査

調査体制は、1班体制で行った。発掘調査にあたっては、重機で盛土層・攪乱層・表土層等を掘削したのち、包含層掘削と遺構の検出、埋土の掘削を人力掘削で行った。

6. 測量作業・写真撮影

平面図や個別遺構図等は、トータルステーションを用いた電子平板測量と、Agisoft社 Metashape Professionalによるオルソ写真測量を併用して行った。壁面図・断面図は、オルソ写真測量で作成した。縮尺は、基本20分の1で全て作成し、適宜縮小して使用した。

遺構の写真撮影は、Nikon社製一眼レフックスライブデジタルカメラ D610（有効画素数2,426万画素）を用いて、RAWとJPEGにて記録し、同時にNikon社製35mmフィルムカメラ F3を用いて、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムによる記録も行った。

7. 整理作業と報告書作成

遺物は、袋台帳を作成し、洗浄・注記の基礎整理を行った。洗浄は出土遺物の大半を現地で洗浄し、整理事務所にて注記した。注記の記載内容は、「KT22-I+台帳登録番号」とした。この内、抽出作業を行った重要な遺物については、実測・拓本・デジタルトレース・写真撮影等を順次行って、挿図・遺物観察表・遺物写真図版等を作成した。

報告書作成では、遺構平面図・壁面図・個別遺構図・遺物実測図等をスキャニングしたのち、Adobe社製Illustratorを用いて淨書・調整して、写真をPhotoshopで調整して挿図・図版を作成した。また、その他の調査記録の整理を進め、これらから本文原稿や表・挿図等を作成し、InDesignで編集して印刷製本を行い、本書を刊行した。

8. 出土遺物及び成果品の保管

整理調査終了後の出土遺物は、報告書掲載遺物と対象外の遺物に分けて収納を行い、図面・写真・台帳・調査日誌等の成果品とともに、本町教育委員会において保管・管理している。

第4章 基本層序と遺構面

第1節 基本層序と各層の概要

今回の調査地では、現代盛土層（第1層）以下、深掘り調査における現地表下3mまでの各調査区の地層を、東区では表2に、西区では表3に記したように、各13層に細別した。これらを、耕作土層（以下、「作土」という。）等の土壤層（a層）や自然堆積層（b層）の連続性、地層から出土した遺物の年代等から再検討し、本報告書では下記の基本層序で実施した。また、粒度や色調については、場所によって同一層内でも異なるため、代表例を記載し、幅をもたせて記述した。なお、第4～8層は、一過性の短期間の堆積である土砂流堆積物であり、層序では分層したが、本文中では8層で一括し、分層名は記載していない。

また、層序については、増田富士雄氏、中塚 良氏、辻 康男氏に現地確認していただき、堆積状況についてご教示をいただいた。

以下には、基本層序と微地形変化を把握しやすくするため、調査で確認された層序のうち、堆積時期の最も古い層から順に記述する。

【東区】（表2）

第13層

第13層は、にぶい黄橙色～灰黄褐色の疊（ $\phi \sim 7\text{ cm}$ ）を10～50%含むシルト質粘土～粗砂質シルトと、灰黄褐色～暗灰黄色の疊（ $\phi \sim 6\text{ cm}$ ）を30～50%含むシルト質粗砂～シルト質極粗砂などからなる。この第13層は、小字「越谷」という開析谷を埋める大阪層群の砂疊や粘土と、丹波帯の岩屑（岩片）や風化土が堆積した堆積物が、土石流や土砂流として流下したことにより堆積した土砂流堆積物^①で、調査地では層理状の構造を持つ。図6に土石流・土砂流模式図を掲げ、概要を示す。東区では、越谷と小字「馬ヶ背」の尾根との間の開析谷が明確に確認でき、堆積層の切り合いが数多く見られる。枝番は9層を確認した。この第13層上面を、第3遺構面とした。

この第13層は、平成4年度発掘調査を行った前回調査^②の成果から、縄文時代後期以降の堆積物と考えられる。

なお、第13層の下部層については、前回調査の下層調査から、およその層順が明らかとなっている。第13層（第V層）は無遺物層で層厚は約0.8m、この下に暗青灰色シルト層（第VIa層）が層厚約0.2mで堆積し、さらにこの下に黒褐色粘土層（第VIb層）が層厚約10cmで堆積する。さらにこの2層の縄文時代後期（北白川上層式1・2期）遺物包含層下に、遺物を包含しない暗青緑灰色砂疊層（第VII層）が層厚約0.6m堆積し、その下に無遺物の黄橙色粘土層（第VIII層）に達する。この黄橙色粘土層（第VIII層）は、大阪層群の堆積物と考えられる。

第12層

第12層は、土石流や土砂流の流下後に流れる、後流の流路^③の堆積物で、葉理（ラミナ）構造を持つ。東区では確認していない。

表2. 東区基本順序

地盤 番号	土　　材　　質	地盤判別と性状	地盤成因	a=土石(1)層 b=砂岩地盤	備　　考	過検索
1-1	10YRS/1/褐灰　礫(ø~10cm)を40%含むシルト質粘砂～粗砂	珪化/褐色層	粗乱層			
1-2	10YRS/6/黄褐色～5/6/オリーブ質　礫(ø~10cm)を30%含むシルト質粘砂～粗砂	珪化/素土地成層	素土地層			
1-3	7.5YRS/1/黄褐色　碎石(ø~3cm)を50%含むシルト質粘砂	珪化/砾层	素土地層			
1-4	10YRS/6/3/に近い黄褐色　礫(ø~16cm)を40~50%含むシルト質粘砂	珪化/素土地成層	素土地層			
2-1	2.5YS/2/灰黒～7.5YRS/1/绿层、シルト質粘砂～粗砂	(近世)～現代/小水作土層	土壤層	a	遺物包含	
2-2	2.5Y/1/灰灰　礫(ø~3cm)を30%含むシルト質粘砂～粗砂	(近世)～現代/小水作土層	土壤層	a	遺物包含	
2-3	SYE/1/灰　礫(ø~3cm)を10%含むシルト質粘砂	近世/灰作土層	土壤層	a	遺物包含	
2-4	10YRS/3/に近い黄褐色　礫(ø~2cm)を10%含むシルト質粘砂～粗砂	(中世)～近世/珊瑚土層	土壤化層	a'	遺物包含	
2-5	10YRS/2/黄褐色　礫(ø~5cm)を40~50%含むシルト質粘砂	(中世)～近世/谷筋堆積層	土壤化層	b	遺物包含	
2-6	7.5YRS/2/灰灰　礫(ø~3cm)を10%含むシルト質粘砂～中砂とシルトブロックの混層	(中世)～近世/珊瑚土層	土壤層	a	遺物包含	⇒ 1面
3-1	2.5Y/1/灰　礫(ø~3cm)を10%含むシルト質粘砂	中世～近世/自然堆積層	土砂沈降堆積層	b		
3-2	10YRS/2/灰黃色　礫(ø~3cm)を10%含むシルト質粘砂～中砂とシルトブロックの混層	中世～近世/作土化層	土壤化層	a'	遺物包含、希薄	
(4-7)	未確認					
8	10YRS/1/褐灰　礫(ø~6cm)を30~40%含むシルト質粘砂～粗砂	中世/自然堆積層	土砂沈降堆積層	b	遺物包含	
(9)	未確認					⇒ 2面
10-1	10YRS/2/灰黒層　シルト質中砂とシルトブロックの混層	中世/1098堆立層①	土壤層	a	遺物包含、13世紀中葉以降	
10-2	10YRS/4/浅黄褐色　シルト質粘砂とシルトブロックの混層	中世/1098堆立層②	土壤層	a'	遺物包含	
10-3	10YRT/7/に近い黄褐色　シルト質粘砂～20%含むシルトブロックの混層	中世/1098堆立層③	土壤層	a'	遺物包含	
10-4	10YRS/2/灰黒層　礫(ø~4cm)を10%含むシルト質粘砂～中砂とシルトブロックの混層	中世/1098堆立層④	土壤層	a'	遺物包含	
10-5	10YRS/3/に近い黄褐色　礫(ø~4cm)を20~30%含むシルト質粘砂	中世/1098堆立層⑤	土砂沈降堆積層	b		
10-6	7.5YRS/3/に近い黄褐色　礫(ø~10cm)を10%含むシルト質粘砂	中世/1098堆立層⑥	残存堆積層	a'	11層の再堆積層 a	
11-1	10YRS/2/灰黒層　礫(ø~6cm)を20~30%含むシルト質中砂～粗砂	中世/作土化層	土壤化層	a'	遺物包含、a層は11-2層の土壤化、13世紀中葉以降	
(11-2)	未確認					⇒ 3面
(12)	未確認					
13-1	10YRS/4/に近い黄褐色　礫(ø~4cm)を40%含む中砂質シルト	成文後期以降/自然堆積層	土砂沈降堆積層	b		
13-2	2.5YS/2/灰黒層　礫(ø~3cm)を30%含むシルト質粘砂	成文後期以降/自然堆積層	土砂沈降堆積層	b		
13-3	10YRS/2/灰黒層　礫(ø~2cm)を50%含むシルト質粘砂	成文後期以降/自然堆積層	土砂沈降堆積層	b		
13-4	10YRS/3/に近い黄褐色　礫(ø~4cm)を30%含むシルト質粘砂	成文後期以降/自然堆積層	土砂沈降堆積層	b		
13-5	10YRS/4/に近い黄褐色　礫(ø~7cm)を20%含む中砂質シルト	成文後期以降/自然堆積層	土砂沈降堆積層	b		
13-6	10YRS/2/灰黒層　礫(ø~3cm)を50%含むシルト質粘砂	成文後期以降/自然堆積層	土砂沈降堆積層	b		
13-7	10YRS/2/灰黒層　礫(ø~4cm)を40%含むシルト質粘砂	成文後期以降/自然堆積層	土砂沈降堆積層	b		
13-8	10YRS/3/に近い黄褐色　礫(ø~1cm)を30%含むシルト	成文後期以降/自然堆積層	土砂沈降堆積層	b		
13-9	10YRS/4/に近い黄褐色　礫(ø~5cm)を50%含むシルト質粘砂	成文後期以降/自然堆積層	土砂沈降堆積層	b		

第 11 版

第11-1層は、黒褐色の礫（φ～6cm）を20～30%含むシルト質中砂～粗砂である。本来は、下層の自然堆積層（b層）である第11-2層と分離されるべきであるが、極めて似通っていたため分層ができなかった。このため第11-1層の層厚は、0.5～0.9mの厚さとなっている。第11-1層は土壌化層（a'層）であるが、これに周辺の第11層を盛りした可能性もある。

西区では、下層の土壤化層である第11-1層から弥生時代後期後半、古墳時代後期、平安時代前期の遺物が混在して出土している。これは前回調査の第2遺構面検出遺構や包含層の遺物の年代と同じであることから、前回調査区第2遺構面の土砂堆積物と考えることができる。

第10周

第10層は、谷の自然堆積物と、開析谷を人為的に埋める客土層である。枝番は、6層からなる。第10-1層は、東区の南端に堆積した、第10-2～4層の客土層の上面を覆う最上層の土壤層である。第10-2～4層は、主に山土で人為的に埋めた客土層である。第10-5層は小規模な土砂流堆积層で、にごり

い黄褐色の礫 ($\phi \sim 4\text{ cm}$) を 20 ~ 30% 含むシルト質極粗砂である。第 10-6 層は土壌化層で、第 11-1 層と土色等が似ていることから、谷側に落下した第 11-1 層の再堆積層である可能性がある。この谷を埋める第 10 層上面と第 11 層の上面を、第 2 遺構面とした。

第9層

第 9 層は、自然堆積層である土砂流堆積物と、これを土壌化した作土層から成る堆積層である。東区では確認していない。

第8 ~ 4 層

第 8 層は、褐灰色の礫 ($\phi \sim 6\text{ cm}$) を 30 ~ 40% 含むシルト質粗砂 ~ 極粗砂である。西区の舌状地形堆積物とつながる。土砂流の下流域に堆積する洪水流堆積物で、西壁では厚さ 17 ~ 36 cm の南側傾斜で平たく堆積し、東壁でも厚さ 16 ~ 40 cm と厚い堆積である。図 6 に模式図を掲げる。なお、本報告書では、土石流、土砂流、さらに洪水流(氾濫流)への含有粒子濃度の低下に伴う、堆積物の細粒化・薄層化に代表されるモデル変化を、分析値として数字で示していないので、土砂流と洪水流(氾濫流)については、特に断らない限り土砂流として一括記載する⁴⁾。第 8 層には、遺物を僅かに含む。

第 7 (8) ~ 4 (8) 層は、土砂流堆積物である。東区では確認していない。

第3層

第 3 層は、灰色の礫 ($\phi \sim 3\text{ cm}$) を 10% 含むシルト質細砂である。土砂流堆積物 (b 層) とその土壌化層 (a' 層) である。第 2 層の床土層的な堆積物である。枝番は 2 層からなる。この第 3-1 層 (畑作

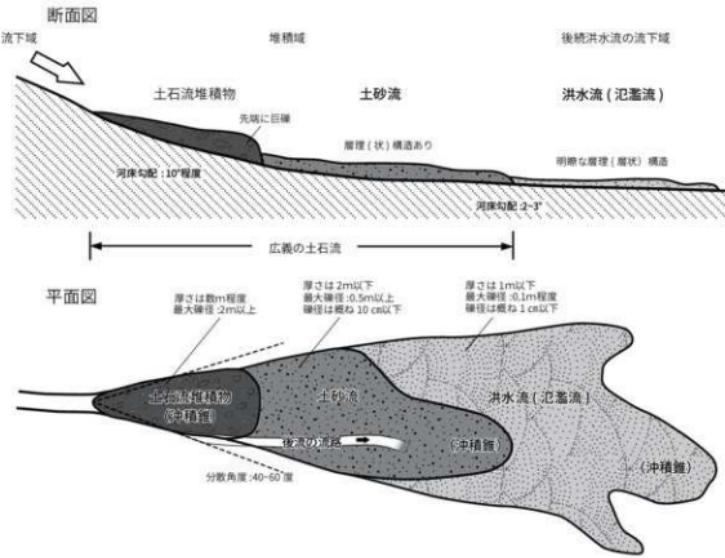


図 6. 土石流・土砂流模式図

土層)の上面を、第1遺構面とした。

第2層

第2層は、暗灰黄色の礫(Φ~3cm)を10%含む灰色のシルト質極細砂~細砂で、土壤層と自然堆積物の互層である。第2-1~3層は、水田にかかる堆積層で、第2-4~6層は畑作にかかる堆積層である。枝番は6層からなる。

第1層

調査地の土地利用は、近年まで水田または畑としての土地利用が顕著であったが、調査時には、客土層による盛土が厚く覆っていた。枝番は4層からなる。

【西区】(表3)

第13層

第13層は、にぶい黄橙色~灰黄褐色の礫(Φ~20cm)を40~50%含むシルト質中砂~粗砂と、褐色~灰黄褐色の礫(Φ~5cm)を10~40%含むシルト~シルト質細砂などからなる。この第13層は、東区同様に、越谷という谷を埋める、大阪層群の砂礫や粘土と、丹波帯の岩屑(岩片)や風化土が堆積した堆積物が、土石流や土砂流として流下したことにより堆積した土砂流堆積物で、調査地では層理状の構造を持つ。枝番は18層を確認した。

この第13層は、前回調査の成果から、縄文時代後期以降の堆積物と考えられ、第13層の下部層については、東区で記述したとおりである。

第12層

第12層は、土石流や土砂流の流下後に流れる、後流の流路の堆積物で、葉理(ラミナ)構造を持つ。西区の北壁より東壁にかけて、第13層の堆積後に流れた溝1条を検出した。枝番は4層からなる。この第13層上面と第12層上面を、第3遺構面とした。

第11層

第11-1層は、黒褐色の礫(Φ~6cm)を20~30%含むシルト質中砂~粗砂である。第11-1層は土壤化層(a'層)である。西区では下層の第11-2層は、上層の第11-1層と分層が可能で、暗灰黄色の礫(Φ~6cm)を40~50%含むシルト質中砂~粗砂である。第11-2層は、土砂流堆積物である。

西区においても、東区同様に上層の土壤化層である第11-1層から、弥生時代後期後半、古墳時代後期、平安時代前期から中期の遺物が混在して出土している。

第10層

第10-1層は、灰黄褐色のシルト質中砂とシルトブロックの混層である。この第10-1層は、土壤層である。第10-2層は、浅黄橙色のシルト質細砂とシルトブロックの混層である。第10-2層は、山土を多く含んだ客土造成層で、この層中にも遺物を含んでいる。この第10-2層の上面で、柱穴などの遺構を複数検出した。この第10-2層上面を、第2遺構面とした。この第10層の枝番は、2層からなる。

第10-2層に含まれる遺物は、13世紀中葉の遺物であった。

第9層

第9層は、自然堆積層である土砂流堆積物と、これを土壤化した作土層が少なくとも2回以上繰り返される堆積層で、東区と同様な堆積がみられる。枝番は4層からなる。

表 3. 西区基本層序

土壌 番号	土 壌 の 特 性	発達時期と性状	形成因成	a-ヒヨコ(化) b-自然堆積層	備 考	通路番
1-1	10YR5/2褐色 地(φ~20cm) 6.40%含むシルト質細砂~粗砂	現代/埋立層	埋立層			
1-2	10YR7/6黒紫青地(φ~30cm) 5.10%含むシルト質細砂~粗砂	現代/灰化成層	富士層			
1-3	7SYR2/1朱褐色 地(φ~30cm) 5.50%含むシルト質細砂	現代/埋立層	富士層			
1-4	10YR6/3-5-7黒紫地 地(φ~12cm) 5.00%含むシルト質細砂	現代/灰化成層	富士層			
1-5	7SYR4/3-5-7黒紫地 地(φ~3cm) 6.50%含むシルト質細砂~粗砂	令和2年度成層/埋立層	埋立層			
1-6	5YR5/1灰 地(φ~30cm) 10.0%含むシルト質細砂~粗砂	令和3年度成層/埋立層	埋立層			
2-1	2.5YR5/2灰灰青地~10YR1/5 黑 畜糞(φ~3cm) 10.0%含むシルト質細砂~粗砂	[近世]~現代/水田作土層	土堆層	a	遺物包含	
2-2	2.5YR4/3灰黑~10YR1/5 黑 畜糞(φ~3cm) 10.0%含むシルト質細砂~粗砂	[近世]~現代/水田作土層	土堆層	a	遺物包含	
2-3	5YR6/1灰 地(φ~3cm) 6.10%含むシルト質細砂	[近世]~現代/水田作土層	土堆層	a	遺物包含	
2-4	2.5YR7/2灰黑 地(φ~1cm) 6.10%含むシルト質細砂	[近世]~現代/水田土層	土堆層	a	遺物包含	
2-5	2.5YR6/2灰黑 地(φ~1cm) 6.10%含むシルト質細砂	[近世]~自然堆積層	土堆層	b		
2-6	10YR5/1灰 地(φ~3cm) 20.0%含むシルト質細砂	[中世]~近世/耕作土層	土堆層	a	遺物包含	
2-7	2.5YR7/2灰黑 地(φ~3cm) 10.0%含むシルト質細砂	[中世]~近世/耕作土層	土堆層	a'	遺物包含	
2-8	10YR7/3-5-7-9灰黑 地(φ~3cm) 10.0%含むシルト質細砂	[中世]~近世/自然堆積層	土堆層	b		
2-9	5YR6/1灰 地(φ~3cm) 6.10%含むシルト質細砂	[中世]~近世/耕作土層	土堆層	a	遺物包含	
2-10	10YR6/2灰灰青地 地(φ~3cm) 10.0%含むシルト質細砂	[中世]~近世/自然堆積層	土堆層	b	遺物包含	
3	2.5YR1/4灰青地 地(φ~3cm) 6.10%含むシルト質細砂~粗砂	[中世]~近世/耕作土層・灰土層	土堆化層	a'	遺物包含	
4-00	10YR4/2灰灰青地 地(φ~4cm) 5.30~40%含むシルト質細砂	中世/自然堆積層	土砂洪流堆積層	b	舌状地形堆積物	
5-00	10YR6/3-5-7-9灰黑 地(φ~6cm) 6.20%含むシルト質細砂	中世/自然堆積層	土砂洪流堆積層	b	舌状地形堆積物	
5-00	10YR5/3-5-7-9灰黑 地(φ~7cm) 6.20%含むシルト質細砂	中世/自然堆積層	土砂洪流堆積層	b	舌状地形堆積物	
7-00	10YR6/2灰灰青地 地(φ~3cm) 6.10%含むシルト質細砂~粗砂	中世/自然堆積層	土砂洪流堆積層	b	舌状地形堆積物	
8-00	10YR4/2灰灰青地 地(φ~3cm) 30~40%含むシルト質細砂	中世/自然堆積層	土砂洪流堆積層	b	舌状地形堆積物	
9-1	7SYR6/1褐色 地(φ~6cm) 6.40~50%含むシルト質細砂~中砂	中世/自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
9-2	7SYR7/1褐色 地(φ~6cm) 6.20~50%含むシルト質細砂~粗砂	中世/土堆化層	土堆化層	a'	土堆化	
9-3	7SYR8/2灰白 地(φ~1cm) 10.0%含むシルト質細砂~中砂	中世/自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
9-4	10YR6/1灰灰青地 地(φ~6cm) 6.40~50%含むシルト質細砂~中砂	中世/自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
10-1	10YR6/2灰裏樹 シルト質粘土とシルトプロックの混在	中世/作土層	土堆層	a	遺物包含。13世紀中葉以降	
10-2	10YR8/4灰裏樹 シルト質粘土とシルトプロックの混在	中世/富士成層	土堆層	b	遺物包含。13世紀中葉以降	
11-1	10YR9/2灰裏樹 地(φ~6cm) 20~30%含むシルト質細砂~粗砂	中世/土堆化層	土堆化層	a'	遺物包含。b層を土堆化。	
11-2	2.5YR7/2灰灰青地 地(φ~6cm) 40~50%含むシルト質粘土~粗砂	中世/自然堆積層	土砂洪流堆積層	b	遺物包含	
12-1	2.5YR5/3灰青地 地(φ~5cm) 6.40%含むシルト質細砂~粗砂	306年度の沈没堆積層①	水成層	b		
12-2	2.5YR5/2灰灰青地 地(φ~4cm) 50%含むシルト質細砂~中砂	306年度の沈没堆積層②	水成層	b	リミナ	
12-3	10YR9/4-7-9灰黑 地(φ~12cm) 5.00%含むシルト質細砂	306年度の沈没堆積層③	水成層	b	リミナ	
12-4	10YR4/1灰灰青地 地(φ~20cm) 50%含むシルト質粘土~粗砂	306年度の沈没堆積層④	水成層	b	リミナ	
13-1	10YR5/3-5-7-9灰黑 地(φ~1cm) 6.40%含むシルト質細砂~粗砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-2	10YR4/2灰黑 地(φ~10cm) 10.0%含むシルト質細砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-3	10YR4/2灰裏樹 地(φ~4cm) 6.40%含むシルト質細砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-4	10YR5/2-5-7-9灰黑 地(φ~1cm) 6.40~50%含むシルト質細砂~中砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-5	2.5YR7/4灰裏樹 地(φ~6cm) 6.20%含むシルト質細砂~中砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-6	10YR4/2灰裏樹 地(φ~6cm) 6.20%含むシルト質細砂~中砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-7	2.5YR7/20灰裏樹 地(φ~13cm) 40~50%含むシルト質細砂~中砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-8	10YR7/2灰裏樹 地(φ~20cm) 40~50%含むシルト質細砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-9	10YR5/2-5-7-9灰黑 地(φ~3cm) 40~60%含むシルト質細砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-10	10YR5/3-5-7-9灰黑 地(φ~3cm) 10~70%含むシルト質細砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-11	10YR5/4-5-7-9灰黑 地(φ~3cm) 10~70%含むシルト質細砂~粗砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-12	10YR4/3-5-7-9灰黑 地(φ~2cm) 20~50%含むシルト質細砂~粗砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-13	10YR4/2灰裏樹 地(φ~1cm) 10~40%含むシルト質細砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-14	10YR5/4-5-7-9灰黑 地(φ~3cm) 10~70%含むシルト質細砂~粗砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-15	10YR5/2-5-7-9灰黑 地(φ~1cm) 10~50%含むシルト質細砂~粗砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-16	10YR5/3-5-7-9灰黑 地(φ~1cm) 20~40%含むシルト質細砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-17	2.5YR7/3-5-7-9灰黑 地(φ~1cm) 30~40%含むシルト質細砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		
13-18	10YR6/3-5-7-9灰黑 地(φ~1cm) 10~50%含むシルト質細砂	誠文庫以降~自然堆積層	土砂洪流堆積層	b		

11

-2-

23

第8～4層

第8～4層は、礫を多く含むシルト質極細砂～細砂の5層からなり、舌状地形堆積物を形作る土砂流堆積物³⁾である。これらの層は、土砂流堆積物の層理であることから、第8層として一括して本文中では表記する。断面図の記載は、第8～4層を8(8)～4(8)とした。

第8(8)層は、礫(φ～3cm)を30～40%含むシルト質細砂で、西壁で遺物を多く包含する舌状地形堆積物の最下層の堆積物である。

第7(8)層は、礫(φ～1cm)を40%含むシルト質極細砂～細砂で、東壁で遺物を僅かに含む舌状地形堆積物の最下層の堆積物である。

第6(8)層は、亜角礫27cmが堆積層上部に立つ、典型的な土砂流堆積物構造である。主な堆積物は礫(φ～10cm)を30～40%含むシルト質細砂で、層の上部に大型の礫を多く含み、遺物も僅かに含む東壁の堆積物である。

第5(8)層は、礫(φ～6cm)を20%含むシルト質細砂で、東壁で下層第6(8)層と上層第7(8)層の間に、部分的に挟在して堆積する。

第4(8)層は、礫(φ～4cm)を30～40%含むシルト質細砂で、東壁で残存する舌状地形堆積物の最上層の堆積物である。

この第8(8)～4(8)層は、発生域の方向（西南西方向からの堆積）を示唆する層理（状）構造をもち、礫径は概ね10cm以下で、比較的大きな礫が層の上部で立っている状態が確認できた。土砂流堆積物の先端は、流下域の勾配が緩くなった本調査付近で沖積錘を形成し、舌状の形をした堆積物として残ったものである。残存する土砂流堆積物による沖積錘（土石流堆）の大きさは、西区の東壁で基底幅約10m、厚さ0.7～0.94m、西壁で基底幅約11m、厚さ0.3～0.85mである。

また、第8(8)～6(8)層は遺物を包含するが、西側ほど多く含み、東側では僅かしかみられなかった。包含する遺物は、いずれも前回調査区の遺物相と同じものである。

第3層

第3層は、浅黄色の礫(φ～3cm)を10%含むシルト質極細砂～細砂である。土壤化層(a'層)で、第2層の床土層となっている。

第2層

第2層は、灰黄褐色から灰色の礫(φ～3cm)を10%含むシルト質極細砂～細砂である。枝番は10層からなる。下層の第2-6～10層は（中世）～近世の土壤層（畑作土層）で、上層の第2-1～5層は近世～現代の土壤層（水田作土層）である。

第1層

調査地の土地利用は、近年まで水田や畑としての土地利用が顕著であったが、調査時点では客土層による盛土が厚く覆っていた。枝番は6層からなる。

第2節 調査地の地形と堆積状況

本町の地勢は、大阪層群下部及び最下部が見られる北-北東側からの緩い主傾斜と、本山寺コンブレックスの山麓堆積からなる西-北西側の山麓からの急な傾斜よりなる。堆積物は、北-北東側の礫・砂・シルト及び粘土が堆積する後背湿地・沖積地性堆積物と、西-北西側山麓部の礫や砂が堆積する扇状地性堆積物からなる。越谷遺跡は、この内の京都西山断層帶-神内断層西側の、斜面裾部に上方から徐々に移動してきた岩屑や風化土が堆積して形成された緩斜面である麓面を、洗刻した開析谷が埋没した後に作られた遺跡である。谷の下流部では、土砂流（洪水流）により扇状地を形成し、さらに裾部は浸食を受け段丘化している。越谷遺跡東側に隣接する尾山遺跡の微高地は、沖積地上に堆積した扇状地性の堆積物の上に形成された居住域である。

今回の調査地の地形を、越谷遺跡の平成4年度に発掘調査を実施した前回調査⁶⁾と令和2年度に発掘調査を実施した尾山遺跡⁷⁾の柱状図を用いて、東西柱状図を図7-1のA-A'に、南北柱状図を図7-1のB-B' と図7-2のC-C'に示した。柱状図の延長距離は、東西幅約290m、南北幅約270mである。

この内、尾山遺跡の鍵層となる中世（13世紀中葉以降）の第3-1a層上面、弥生時代後期～古墳時代前期の第4-1a層上面、弥生時代中期前葉の第5a層上面、大阪層群の黄橙色粘土層（前回調査第VII層=地山層）上面の変化を中心見てみる。

東西柱状図を作成した地点は、名神高速道路拡幅工事第2地区の南西端から、JR東海道本線に近い尾山遺跡9区東端までの、図7-1の東西柱状図 A-A' の8地点で、直線距離にして約290m分である。各地点は、西からNo.1（前回調査2区南西端）-No.2（前回調査2区深掘Eトレーナー）-No.3（今回調査西区）-No.4（今回調査東区）-No.5（尾山遺跡12区）-No.6（尾山遺跡7区南西端）-No.7（尾山遺跡7区東端）-No.8（尾山遺跡9区東端）で、鍵層のおよその高さ（標高）を以下に示す。なお、数値を（ ）書きするものは、欠層による復元値である。

No.1～4は谷の中に堆積した堆積物である。No.1は谷の南側、小字「バンド山」尾根北側の斜面に位置しており、堆積物は表土上面から0.7mで地山層（第VII層）に達する。No.2は谷の中央部よりも僅かに南側斜面に位置する深掘Eトレーナーで、土砂流堆積物に上下に挟まれた中間層から、縄文時代後期の遺物が出土している。No.3は今回調査の西区、No.4は今回調査の東区で、いずれも表土上面から3m下まで掘削したが、地山層は検出していない。また、No.3・4の第13層土砂流堆積物は、層位や堆積層の高さ等から、前回調査の第V層に相当する層である可能性が高い。

No.5～8は、尾山遺跡の沖積地の堆積物である。このため、No.1～4とNo.5～8の堆積層が直接繋がるものではなく、基本的にはNo.3・4の堆積物の上に、No.5～8の堆積物がのるものと考えられる。

地山層（第VII層）の各標高は、No.1・2のみで確認でき、〔西〕21.0m-16.8m-未確認-未確認-未確認-未確認-未確認-未確認〔東〕である。今回調査地の北側の谷中央部では、3m以上の厚い堆積が存在し、急激に冲積地に向かって落ち込んでいるものとみられる。このことは、尾山遺跡1-1区の深掘り調査において、検出最下層の第7b層が、地表面から8m以上の掘削でも基底に達しなかったことからも明らかである。

第5a層の各標高は、東側の沖積地 No.5～8 で確認でき、〔西〕未堆積-未堆積-未堆積-未堆積-

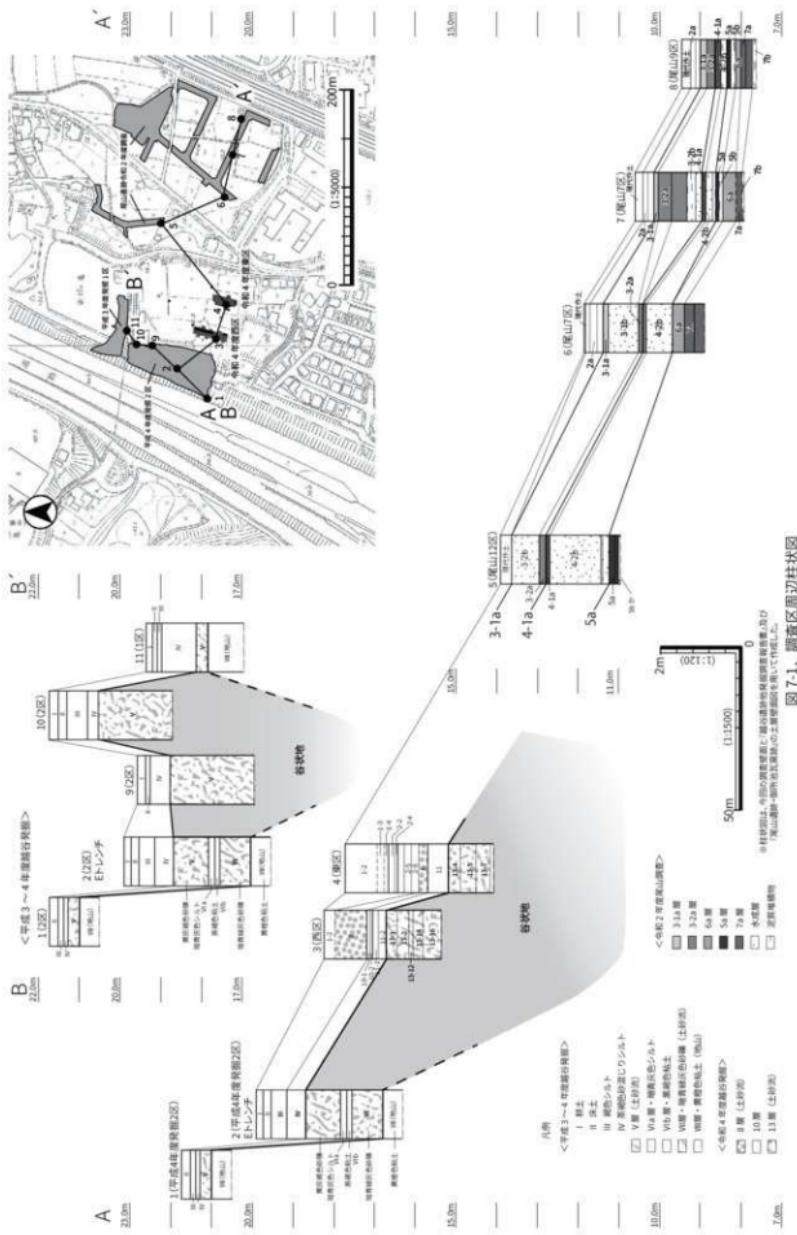


圖 7-1：調查區周邊柱狀圖

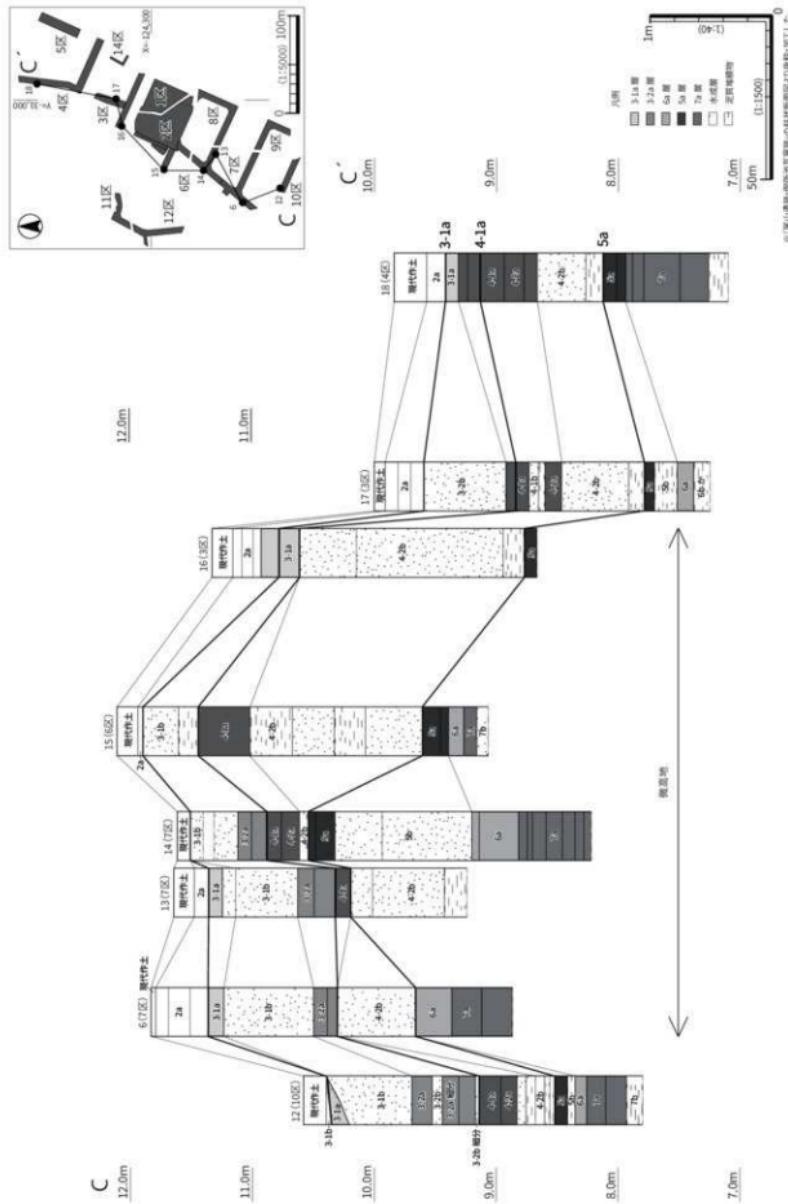


図 7-2. 調査区周辺柱状図

11.26m - (9.7m) - 8.63m - 8.36m [東] である。No.6 ~ 8 は沖積地上の堆積で、No.5 は段丘裾部の堆積であるが、第 5a 層が段丘裾部にまで堆積しているのを確認できる。

第 4-1a 層の各標高は、東側の沖積地 No.5 ~ 8 で確認でき、[西] 未堆積-未堆積-未堆積-未堆積-12.81m - 10.4m - 8.97m - 8.63m [東] である。堆積状況は、第 5a 層と同じである。

第 3-1a 層の各標高は、東側の沖積地 No.5 ~ 8 で確認でき、[西] 未堆積-未堆積-未堆積-未堆積-13.7m - 11.41m - 10.1m - 9.03m [東] である。堆積状況は、第 5a 層・第 4-1a 層と同じである。

これらのことから、谷を形作る地山層（第V層）の位置は、今回調査の調査区周辺においては、その傾斜角度から No.2（前回調査 2 区深掘 E トレンチ）よりもさらに深い、標高 7 m 前後に存在するものと推測された。

次に南北柱状図を図 7-1・2 より、B-B' と C-C' の 2 列について堆積状況を見てみる。

南北柱状図 B-B' を作成した地点は、名神高速道路拡幅工事第 2 地区の南西端から、御所ヶ池南側の前回調査 1 区南端までの、図 7-1 の 5 地点で、直線距離にして約 110 m 分である。各地点は、西から No.1（前回調査 2 区南西端）- No.2（前回調査 2 区深掘 E トレンチ）- No.9（前回調査 2 区東端）- No.10（前回調査 2 区北東端）- No.11（前回調査 1 区南端）で、鍵層のおよその高さ（標高）を以下に示す。

この内、No.1・2 は東西柱状図にも用いた地点で、先述した。No.9・10 は、中層から下層に土砂流堆積物（第 V 層）があるが、地山層の把握までは行われていない地点であるため、その深さは明らかでない。No.11 は御所ヶ池南側の前回調査 1 区南端で、ここでは地山層が表土下 1.6 m で検出されている。地山層の標高は、[南] 21.0m - 16.8m - 未確認-未確認-17.87m [北] である。

この南北柱状図 B-B' の位置は、開析谷の谷口部にあって、その幅が約 110 m であることが明らかにできたことは重要である。残念ながら、谷の深さについては明らかにできていない。

南北柱状図 C-C' を作成した地点は、沖積地内の令和 2 年度調査尾山遺跡の最も段丘側に近い地点から選定し、尾山遺跡 10 区の南西端から、4 区北端までの、図 7-2 の 8 地点で、直線距離にして約 270 m 分である。各地点は、南から No.12（尾山遺跡 10 区南西端）- No.6（尾山遺跡 7 区南西端）- No.13（尾山遺跡 7 区東端）- No.14（尾山遺跡 7 区中央）- No.15（尾山遺跡 6 区西端）- No.16（尾山遺跡 3 区西端）- No.17（尾山遺跡 3 区中央）- No.18（尾山遺跡 4 区北端）で、鍵層のおよその高さ（標高）を以下に示す。

第 5a 層の各標高は、[西] 8.5m - (9.66m) - (10.18m) - 10.47m - 9.6m - 8.77m - 7.78m - 8.1m [東] である。No.2 ~ 6 の南側にややよった高さ 2.4 m 余りの高まりが、確認できる。

第 4-1a 層の各標高は、[西] 9.12m - (10.28m) - 10.33m - 10.87m - 11.43m - (10.6m) - 8.84m - 9.13m [東] である。No.6 ~ 16 の北側にややよった高さ 2.3 m 余りの高まりが、確認できる。

第 3-1a 層の各標高は、[西] 10.38 m - 11.36m - 11.38m - (11.52m) - (11.9m) - 10.78m - (9.6m) - 9.41m [東] である。No.12 の南側にも堆積が及び始めており、高さは 2.5m 余りと落差がさらに大きくなっている。

この南北柱状図 C-C' の位置は、B-B' の開析谷の谷口部から、東側の沖積地に出て堆積が広がった地点で、大きく段を作る高まり No.6 から No.16 までの幅約 170 m が、谷のおよその土砂流堆積物の幅であると推測できる。地山層を確認していないため、谷の層厚を直接に知ることはできないが、今後ボーリング調査資料等からこれらを確認することは可能であろう。

<註・引用文献>

- 1) 増田富士雄「神戸市兵庫区祇園遺跡で観察された土石流と土砂流堆積物」『祇園遺跡第17・18次発掘調査報告書』神戸市教育委員会、94-101p、2016年
増田富士雄『ダイナミック地層学』近未来社、2019年
- 2) 大塚 隆・川端博明ほか『越谷遺跡他発掘調査報告書-伝侍宵小侍從墓・源吾山古墳群-』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2集、名神高速道路内遺跡調査会、1997年
- 3) 土石流や土砂流の流下後に、残った沢水が川状に流れる流路をいう。
- 4) 土石流と河川流（洪水流・氾濫流）、その中間的な土砂流（“土石流様”）も存在するが、その明確な分類は、流体中の懸濁粒子の濃度と堆積物の特徴との対応が必要であるが、詳細な分析が行えないので「土砂流」として一括表記する。
- 5) 前掲1)
- 6) 前掲2)
- 7) 後川恵太郎「尾山遺跡・御所池瓦窯跡」『島本町文化財調査報告書第43集・(公財)大阪府文化財センター調査報告書第316集、2022年
辻 広志「尾山遺跡の時期別消長」『島本町文化財調査報告書-尾山遺跡発掘調査報告書』島本町文化財調査報告書第48集、85-87p、2023年

第5章 調査成果

調査成果を記述する前に、本書の遺物の年代観や型式については、主に下記の文献及び凡例に示した参考文献により記述した。

【土師器皿・椀】平尾政幸「土師器再考」『史洛 研究紀要』第12号、(公財)京都市埋蔵文化財研究所、2019年
※以下、上記文献の編年を「平尾編年」という。各段階を図8に示す。

【瓦器椀】 佐藤亜聖「畿内産瓦器椀」『新版 概説 中世土器・陶磁器』2022年

【貿易陶磁器】 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」、『新版 概説 中世土器・陶磁器』、2022年

ここでは、図9の調査地詳細図に位置する、東区と西区の各遺構面検出の遺構や出土遺物について概要を報告し、調査区を縦覧した総括的な内容は、第7章総括において遺構変遷として記述することにする。

第1節 東区の各遺構面の遺構と遺物

東区(図9～21)

東区では、3面の遺構面調査と深掘り調査を実施した。第1遺構面は第3-1層上面で、耕作溝14条、耕作穴18基、耕作穴よりも浅い窪15基、土坑1基を検出した。第2遺構面は第10層・第11層上面で、溝1条、耕作穴2基、土坑2基と、谷埋立地1か所等を検出した。第3遺構面は第13層上面で、溝1条、耕作穴2基、窪1基、土坑1基、谷状地1か所等を検出した。また、下層調査のため、調査区の南側谷部を中心に深掘り調査を実施した。

なお、図15の001軒丸瓦は、現地調査開始時に表採されたものである。復元される瓦当径は約15cmで、瓦当厚は3cmである。文様は複弁8葉蓮華文で、複弁内を棒状の4子葉に表し、蓮弁は互いに接し間弁を持たず、弁中央の凸線もなく、子葉を輪郭線で囲む。突出した中房に1+8の蓮子を配し、中房縁部に圓線があり子葉・輪郭線が連結する。外区には界線、珠文は残存25（推定56）がある。周縁は素文直立縁とする。瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形で、范はB型である。瓦当が厚く、瓦当側面・裏面共にヨコナデで平坦、文様の彫りは浅く凸線で表し、焼成は黄灰色で軟質である。周辺の調査では初見の軒丸瓦で、時期は平安時代と考えられる。

上層の包含層である第2・4・5層からは、図15の002～004土師器皿の他に、弥生時代後期後半の壺・甕、長岡京期～平安時代前期の須恵器蓋・壺、鎌倉時代の土師器皿・瓦器椀、時期不明の瓦・輪・鉄製釘等の実測できなかった小片が出土している。比較的大きな破片である3点の土師器皿の時期は、002が6C・7A段階、003・004が6C段階で、13世紀中葉～後葉の遺物と考えられる。

図 8. 土師器段階区分と略年代（平尾 2019）

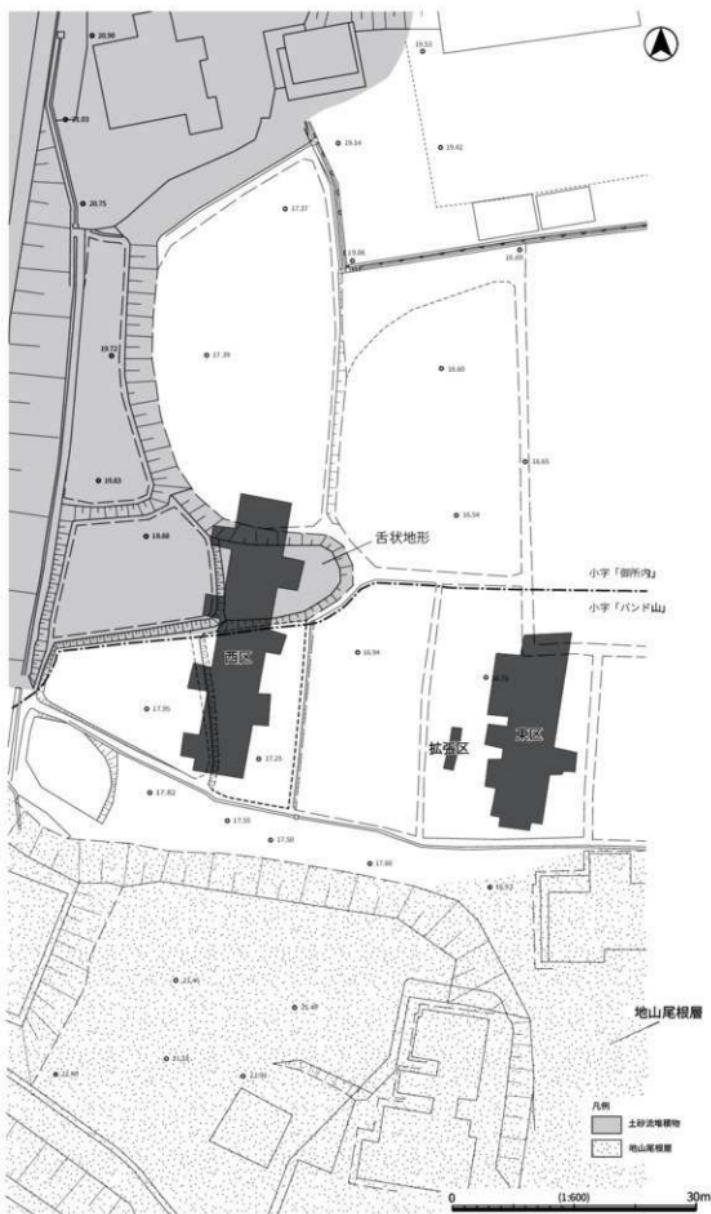


図9. 調査地詳細図

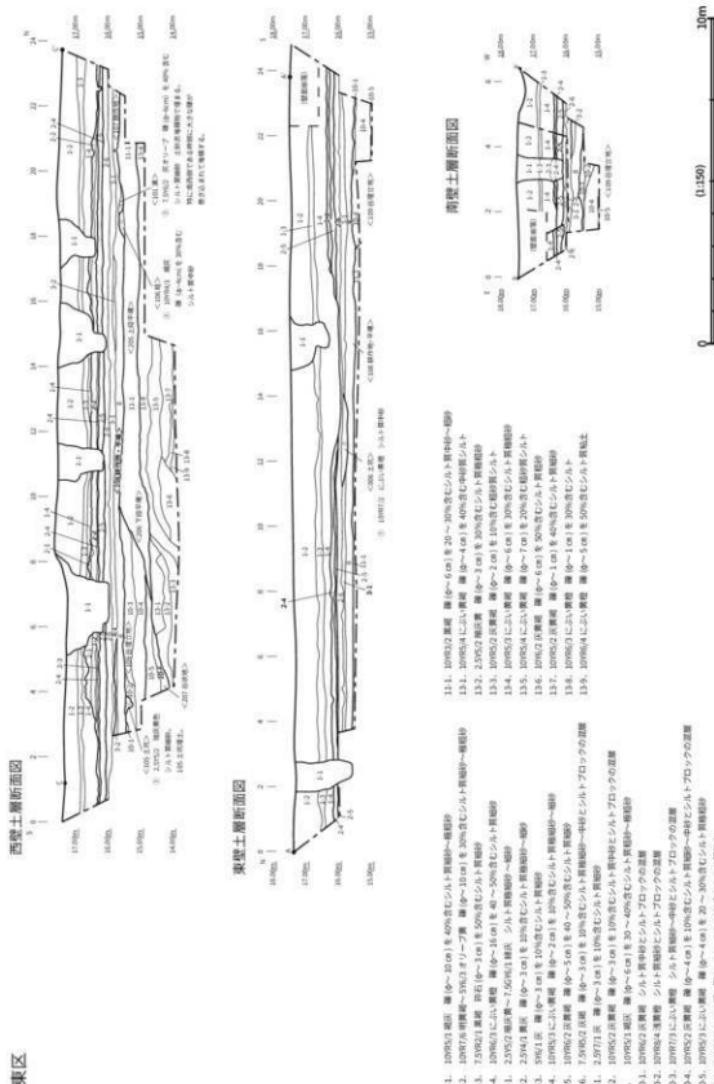


図10. 東区壁面図

東区

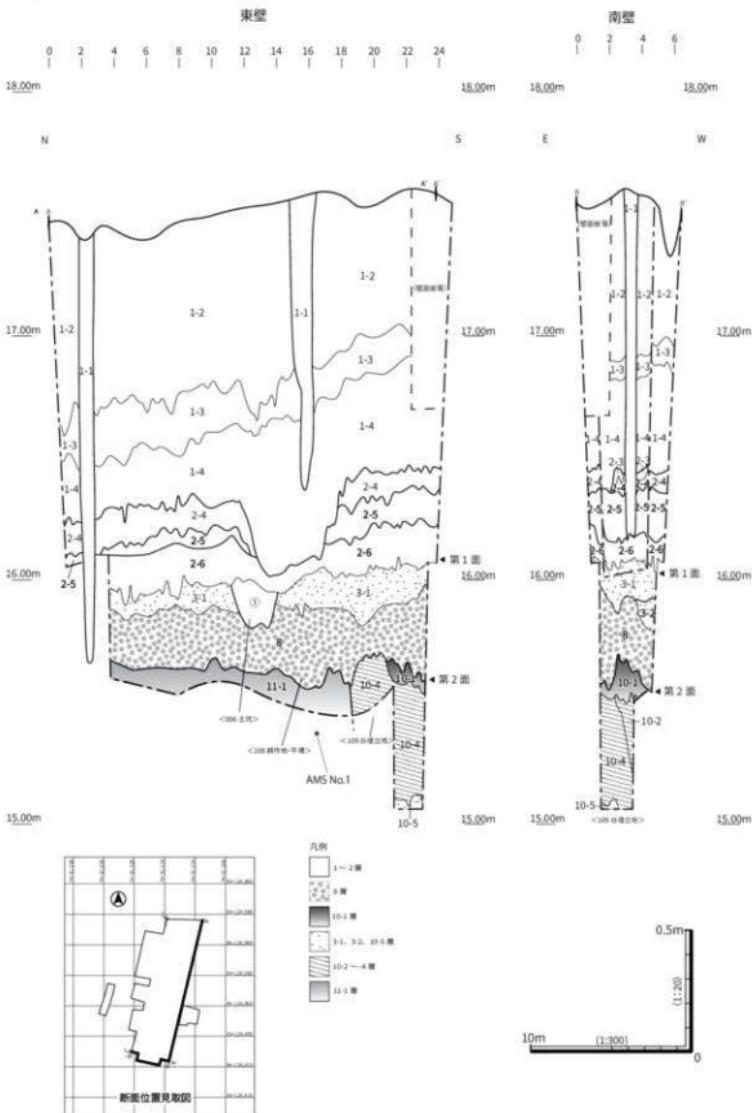


図 11. 東区 東壁面・南壁面縦横変倍図

東区

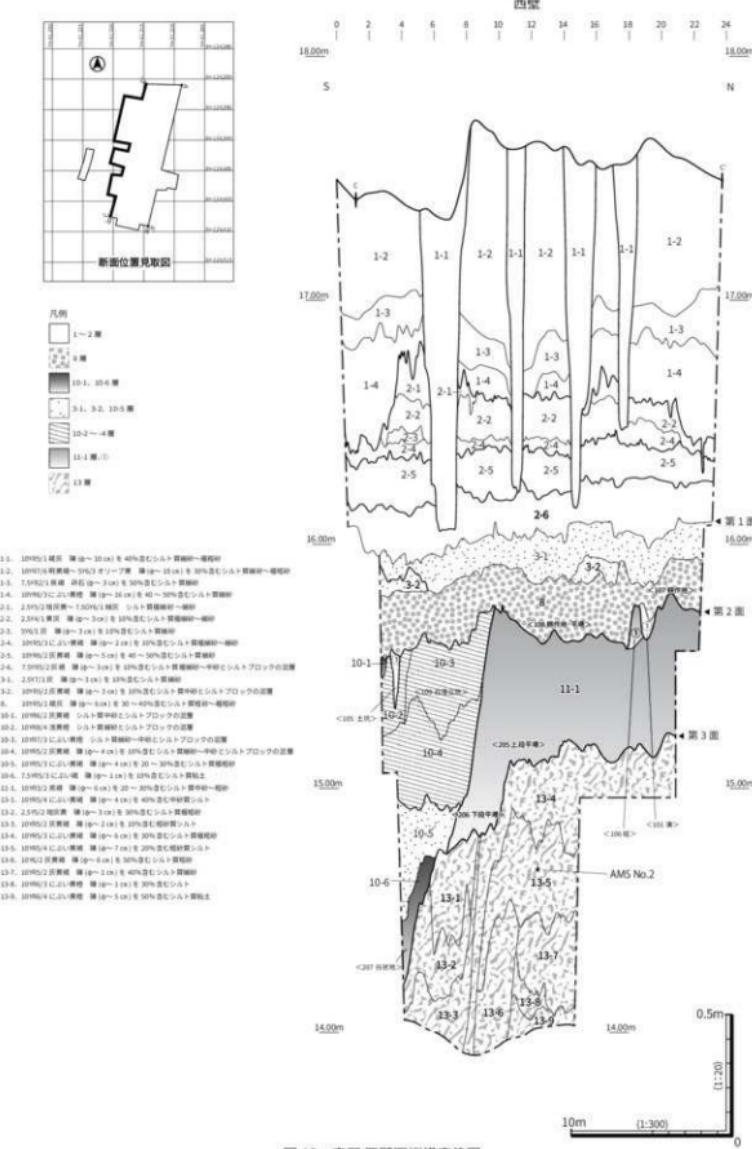
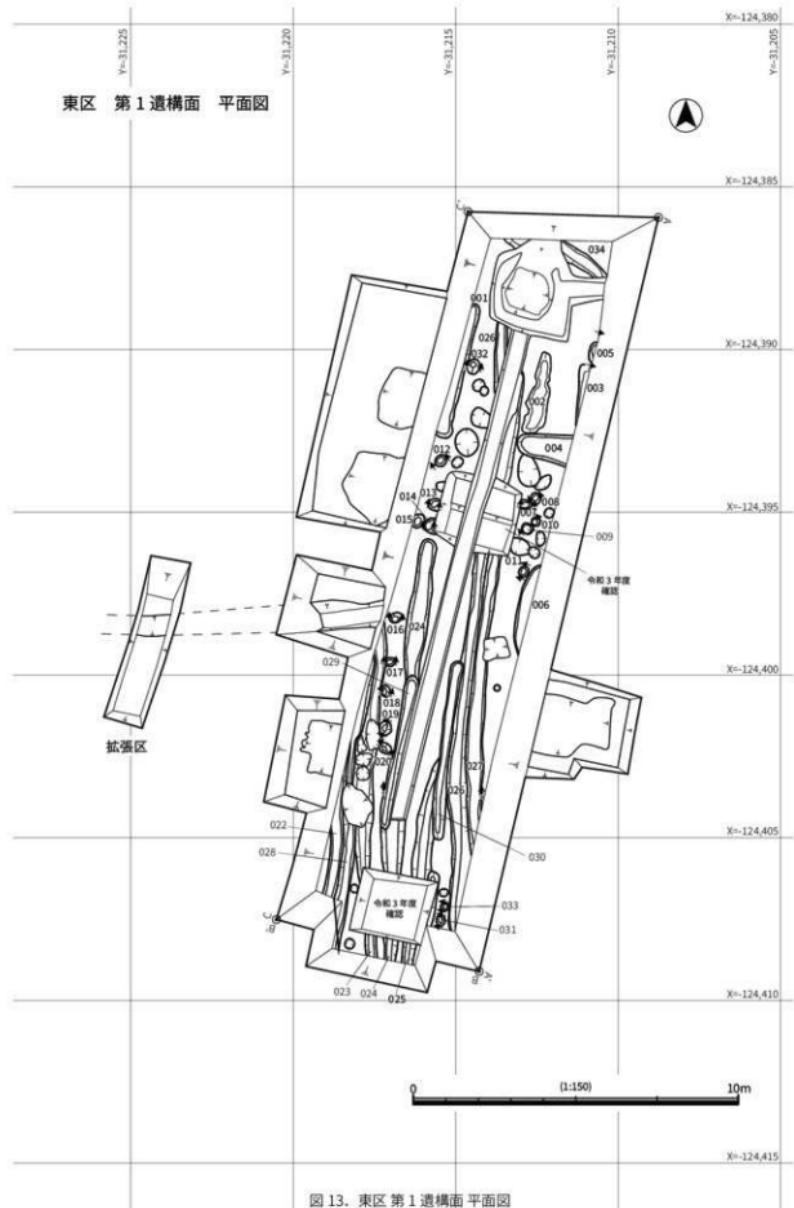


図 12. 東区西壁面縦横変倍図

東区 第1遺構面 平面図



東区 第1遺構面 遺構図

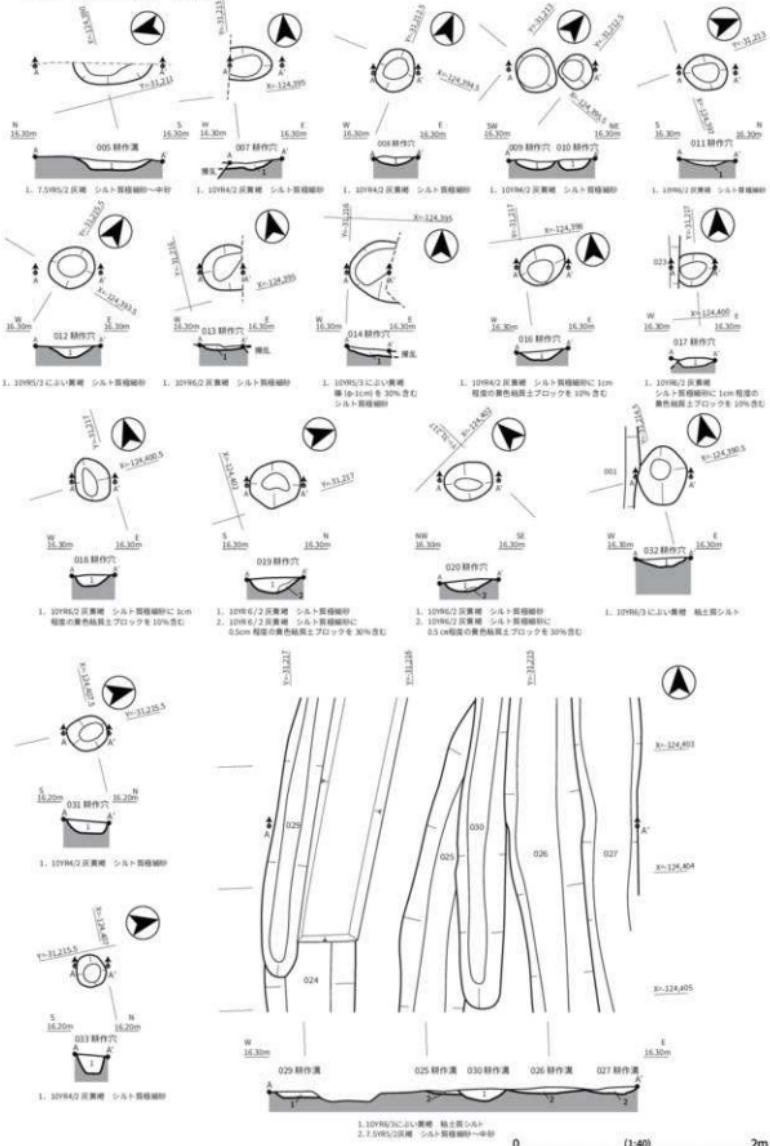


図 14 東区第 1 遺構面 遺構図

〔第1遺構面〕

第1遺構面（図13・14）は、水田や畑の6層の堆積が重なる作土を除去した、第3-1層上に検出した、第3-1層を上面とする遺構面である。遺構面全体に、耕作溝や耕作穴等がみられた。

なお、第1遺構面の包含層である第2-1～6層からは、図15の13世紀中葉～後葉の6C・7A段階の006～010土師器皿、16世紀末～17世紀前半の11A・B段階の005土師器皿、長岡京期～平安時代前期の011土師器丸底甕、12世紀中葉～後半の龍泉窯系D期の012青磁櫛目文皿、16世紀末以降の013～015・017平瓦や016・018丸瓦、時期不明の019鉄製釘等が出土した。

001～005・022～030・034 耕作溝（図10～15、写真図版2～5）

東区の第2-6層（a層）を畑作土とする耕作溝で、第3-1層（b層）上面で検出した。

耕作溝の方向は、主に南北方向N5～8°-Eであるが、004耕作溝については直交する東西方向で、034耕作溝は斜め方向の溝である。溝の切り合いと埋土の違いから2時期が想定され、001・022～027耕作溝の溝群から、028～030耕作溝の僅かに東にN8～12°-E振る溝群に変わる。また、東西溝である004耕作溝の北側にも南北方向の002・003耕作溝の溝群がみられる。これらから東区の土地区画は、南北に長い027耕作溝を境として、西側の南北に長い溝群の区画と、東西溝004耕作溝北側の南北に短い溝群の区画、004耕作溝南側の耕作溝が確認できない区画の、3区画に分けて土地利用されていた可能性がある。

耕作溝の規模及び形状は、検出した最も長いものが026耕作溝の延長約18.8mで、溝の上幅は0.3～1m、深さは2～10cm、断面形状は浅い皿状である。

埋土は、第2-6層が灰褐色のシルト質極細砂～中砂で、新しい028～030耕作溝の一群がにぶい黄褐色の粘土質シルトである。

なお、004耕作溝から、図15の020平瓦が1点出土している。この瓦の表面には、粘土塊（タタラ）を針金の張った弓で瓦一枚分の厚さに切断することをコピキというが、このコピキ方法で瓦に残る平行条の痕跡を「コピキB」、斜め平行条の痕跡を「コピキAB」¹⁾、それ以前の糸引きによる弧状の痕跡を「コピキA」という。005平瓦には凸凹両面に「コピキAB」が残り、凸面にはコピキの上に縦縄目叩き痕が残る。平行条や斜め平行条の痕跡を残す「コピキB」や「コピキAB」の使用は、地域により使用開始時期が異なるが、一般的には16世紀末頃には始まっていたと考えられている²⁾。

007～020・031～033 耕作穴・窪（図10～14、写真図版2～5）

東区の耕作溝の間にみられる、第2-6層（a層）を作土とする耕作に伴う耕作穴と、耕作穴の浅い痕跡程度のものを窪とするもので、第3-1層（b層）上面で検出した。これらは、耕作溝間に細長く存在して、前後の間隔は曖昧ではあるが、各耕作穴が直線的に並ぶなど、何らかの作付けや植栽に伴う穴の痕跡と考える。

東区南側には南北溝である023耕作溝と024耕作溝の幅0.5～0.8mの間に、南北に並ぶ016～020耕作穴がある。南北溝である025耕作溝と026耕作溝の幅0.3～0.6mの間に、南北に並ぶ031・033耕作穴と窪1基がある。北側には南北溝である001耕作溝と024耕作溝の約3.1mの間に、南北に並ぶ012～015耕作穴と窪1基が並ぶ。001耕作溝と026耕作溝の幅0.6～1mの間には、南北方向にランダムに並ぶ032耕作穴と窪5基がみられる。さらに、北東側の東西溝である004耕作溝の南側、南北溝である027耕作溝の東側に、007・009・011耕作穴、008・010耕作穴・窪1基、窪2基で、それぞれが南側に延長する、南北方向に接して並走する3列が想定される。

耕作穴や窪の規模及び形状は、検出した最も長い並びは 016 ~ 020 耕作穴の延長約 4 mで、耕作穴の形状は一辺が 0.2 ~ 0.66 m、深さ 5 ~ 16 cmで、窪の形状は一辺が 10 cm ~ 0.88 m、深さ 4 cm以下で、いずれも平面が円形から楕円形、断面形状は浅い皿状である。出土遺物はなかった。

[第2遺構面]

第2遺構面（図 16・17）は、厚く被った第8層土砂流堆積物の下に検出した、第10層・第11層の上面を遺構面とする。東区の北側に107耕作地があり、106畦畔の東側に101溝、102土坑、103・104耕作穴がみられる。中央には108耕作地・平場とした、南側の谷と北側の耕作地の間に平場がある。南側には南側に広がる谷を人為的に埋めた109谷埋立地があり、この上にも105土坑やこの第2遺構面全体を覆っていたと考えられる第10-1層（a層）土壤層が一部残存している。

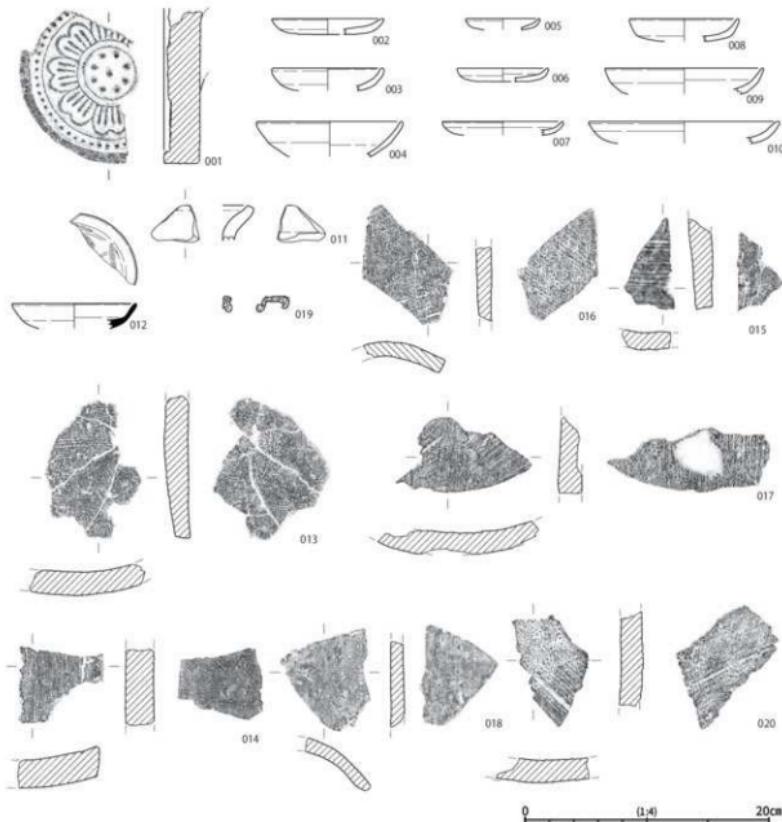


図 15. 東区 第1遺構面 包含層及び遺構出土遺物

東区 第2遺構面 平面図

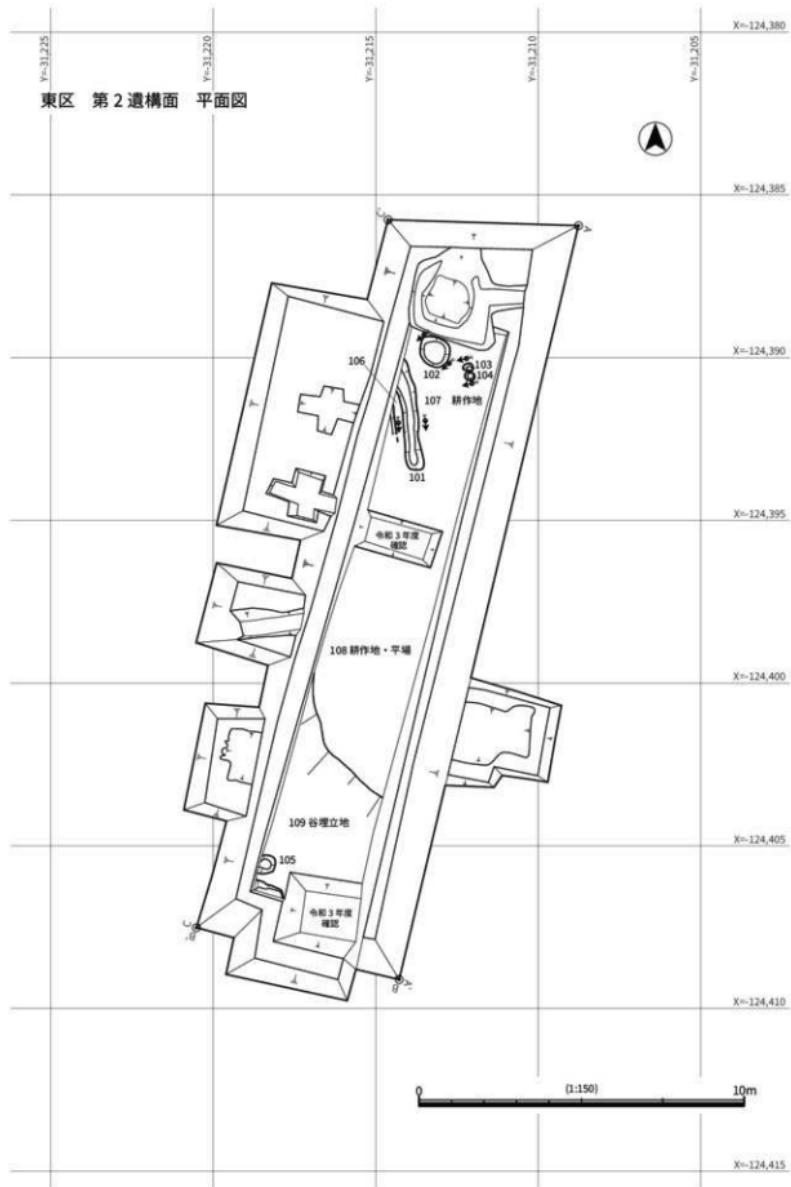


図 16. 東区 第2遺構面 平面図

東区 第2遺構面 遺構図

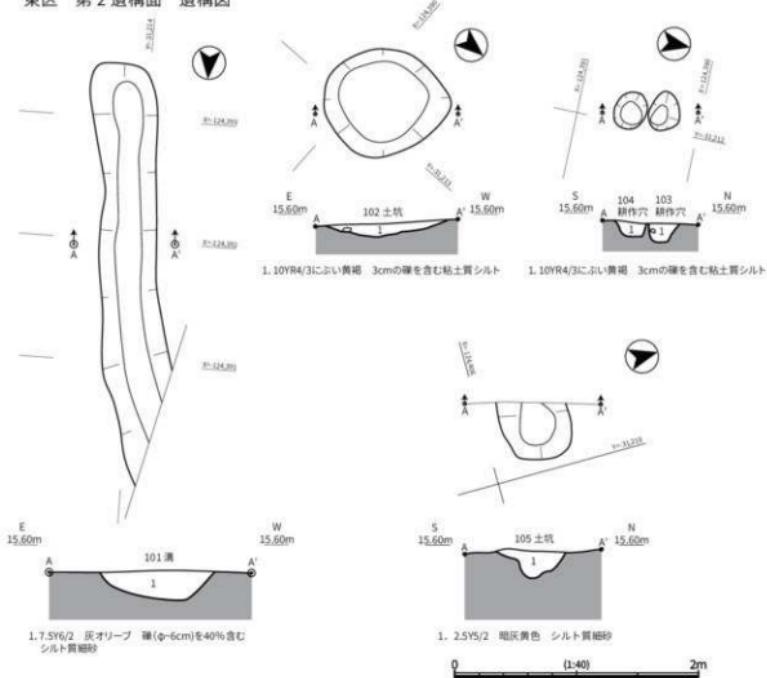


図 17. 東区 第2遺構面 遺構図

101溝 (図 10～12・16・17、写真図版 6～9)

東区北側の107耕作地の西壁際で検出した、南北方向 N-9°-W の用水路と考えられる溝で、西側に106畦を伴い、北側延長は調査区外に延びる。検出できた規模は、延長約 2.9 m、幅は 0.44 ~ 0.63 m、深さ 7 ~ 14 cm余りで、北側に延びる。埋土は1層で、①灰オリーブ色の礫 (φ~6 cm) を 40% 含むシルト質細砂で、106畦側に大きな礫が巻き込まれて堆積していた。出土遺物はなかった。

102土坑 (図 10～12・16・17、写真図版 6・7)

東区北側の101溝の東側に、103・104耕作穴に隣接して検出された土坑である。検出できた規模は、平面形状が楕円形で、長軸 1.42 m、短軸 0.9 m、深さ 11 cm余りで、断面形状は浅い皿状であった。埋土は1層で、①にぶい黄褐色の礫 (φ~3 cm) を 10% 含む粘土質シルトである。耕作に係る遺構と考えている。出土遺物はなかった。

103・104耕作穴 (図 10～12・16・17、写真図版 6・7)

東区北側の102土坑の東側で隣接して検出した、北側が103耕作穴で南側が104耕作溝である。103耕作穴の規模は、長軸 0.23 m、短軸 0.26 m、深さ 16 cm余りの楕円形で、断面形状はU字状であった。104耕作穴の規模は、長軸 0.32 m、短軸 0.26 m、深さ 11 cm余りの楕円形で、断面形状はU字状

であった。埋土は 103・104 耕作穴共に 1 層で、①にぶい黄褐色の礫 ($\phi \sim 3\text{ cm}$) を 10% 含む粘土質シルトで、102 土坑と同じ埋土であった。出土遺物はなかった。

105 土坑（図 10～12・16・17、写真図版 8・9）

東区南側の 109 谷埋立地上の、南西壁際で検出した。平面形状は橢円形と思われるが、西側が西壁に入るため明確な形状は不明である。検出できた規模は、長軸 0.53 m 以上、短軸 0.51 m、深さ 0.26 m 余りで、断面形状は逆台形であった。埋土は 1 層で、①暗灰黄色のシルト質細砂である。出土遺物はなかった。

106 突（図 10～12・16）

東区 101 溝の西側に伴う、南北方向の突である。検出できた規模は、延長約 1.1 m、幅 0.24～0.32 m、高さ 18～22 cm 余りで、北側は調査区外へと延びる。残存する盛土は 1 層のみで、①褐灰色の礫 ($\phi \sim 4\text{ cm}$) を 30% 含むシルト質中砂であった。断面形状は台形である。出土遺物はなかった。

107 耕作地（図 10～12・16、写真図版 6・7）

東区の北側にある 107 耕作地は、西側を南北方向の 106 突と 101 溝で段状に囲い、その東側の標高 15.7～15.8 m の高まりを耕作地とする遺構であったと考える。南側は、西側の様に段を設けていたかは不明確であるが、現況では 108 耕作地・平場になだらかに接合している。出土遺物はなかった。

108 耕作地・平場（図 10～12・16、写真図版 8・9-1）

東区の中央部で検出した。107 耕作地の西側にあって、0.1～0.2 m の段下である標高 15.6～15.7 m にあり、109 谷埋立地との間である幅 3～5 m を平場状の干渉地としていたか、耕作地としていたものと思われる。出土遺物はなかった。

109 谷埋立地（図 10～12・16、写真図版 9-1）

東区の南側で検出した。小字「馬の背」の尾根の東側延長部である小字「バンド山」の尾根と、谷に堆積した堆積物との間、上幅 14～18 m 余りを流れる東西方向の開斬谷を、人工的に埋めて土地開発を行ったことを示す埋立遺構である。検出できた規模は、延長約 7 m 余りで、南北の幅約 5 m、深さ約 1.5 m である。確認できる埋土は 6 層で、上層から①灰黄褐色のシルト質中砂とシルトブロックの混層、②浅黄橙色のシルト質細砂とシルトブロックの混層、③にぶい黄橙色のシルト質細砂と～中砂とシルトブロックの混層、④灰黄褐色の礫 ($\phi \sim 4\text{ cm}$) を 10% 含むシルト質細砂～中砂とシルトブロックの混層、⑤にぶい黄褐色の礫 ($\phi \sim 4\text{ cm}$) を 20～30% 含むシルト質粗砂、⑥にぶい褐色の礫 ($\phi \sim 1\text{ cm}$) を 10% 含むシルト質粘土である。この内、①層の第 10-1 層は、先述した 109 谷埋立地や第 2 遺構面を覆っていた土壌層である可能性が高い層である。②～④層の第 10-2～4 層は、主に南側の尾根のものと思われる山土と周辺土を用いた埋立の客土層である。⑤層の第 10-5 層は、土砂流堆積物である。⑥層の第 10-6 層は、谷の当初の堆積物か、斜面上部の第 11 層堆積物が斜面を滑り落ちた再堆積物かは不明である。埋土からの出土遺物はなかった。

[第 3 遺構面]

第 3 遺構面は（図 18・19）、厚い第 11-1 層（a 層）を除去した、第 13 層土砂流堆積物の上面で検出した遺構面である。調査区の中央部から北側にかけて 205 上段平場があり、北側に 201 溝、南側に 203・204 耕作穴と窪、東壁際に 202 土坑がみられる。南側には 205 上段平場の斜面と、その下に 206 下段平場と 207 谷状地がある。

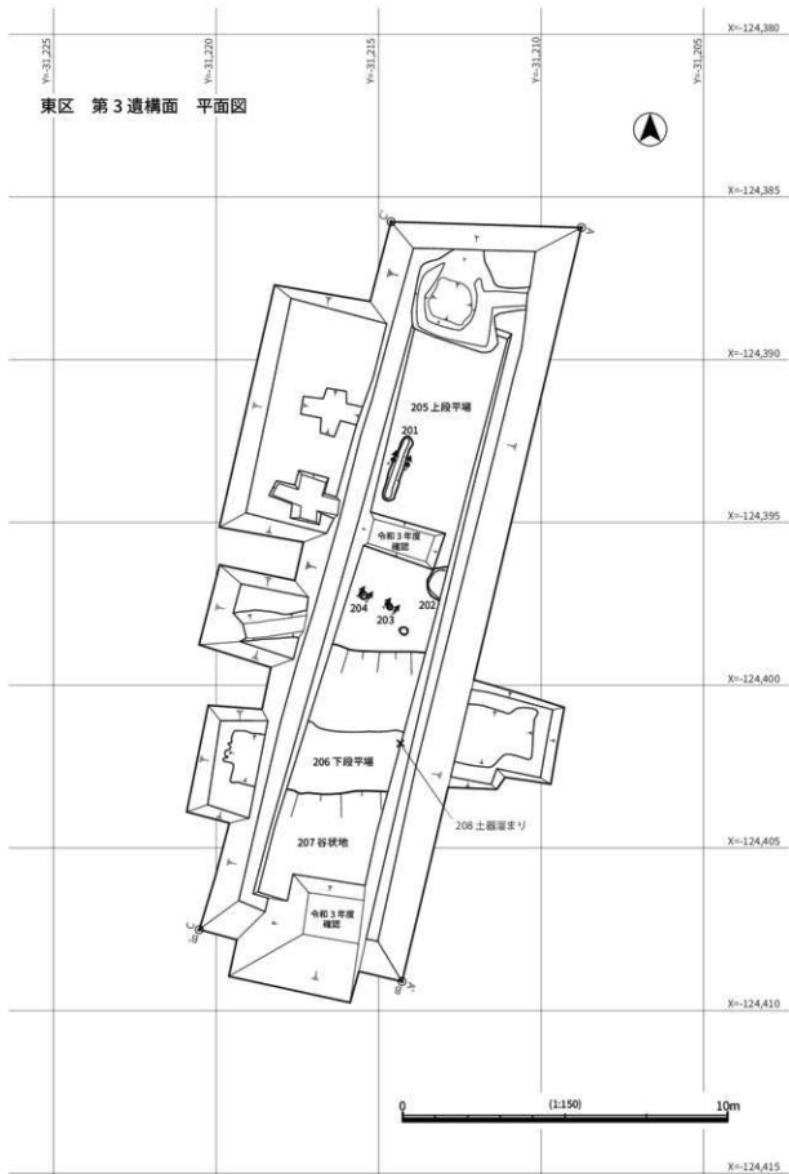


図 18. 東区 第3遺構面 平面図

東区 第3遺構面 遺構図

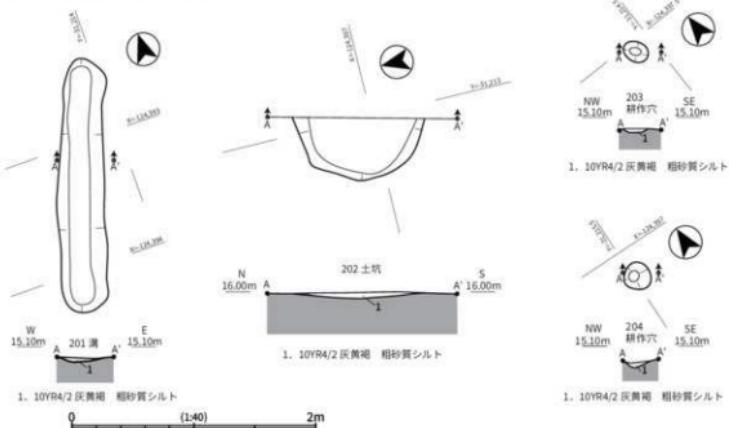


図19. 東区第3遺構面遺構図

201溝 (図10～12・18・19、写真図版10-1、11-1)

東区の北西で検出した。検出できた規模は、延長約2.12m、幅0.36～0.4m、深さ2～8cm余り、南北方向N18°-Eの短い溝である。残存する埋土は1層で、①灰黄褐色の粗砂質シルトであった。断面形状は、浅い皿状である。出土遺物はなかった。

202土坑 (図10～12・18・19、写真図版10-1)

東区の中央部東壁の調査区外に入る遺構で、極めて浅い遺構であるが土坑とした。検出できた規模は、長さ0.53m以上、幅1.12m、深さ4cmである。断面形状は浅い皿状である。堆積は1層で、201溝と同じ①灰黄褐色の粗砂質シルトである。遺構の性格は不明であるが、堆積物が201溝と同じであり、耕作に係る遺構とみられる。出土遺物はなかった。

203・204耕作穴・窪 (図10～12・18・19、写真図版10-1、11-1)

東区の中央部で、205上段平場の南端にみられる。204耕作穴・203耕作穴・窪は、東西方向約1.8mに並ぶ耕作に伴う遺構と考えられる。耕作穴・窪の規模と形状は、203耕作穴が長軸0.23m、短軸17cm、深さ3cm、204耕作穴が長軸0.23m、短軸0.24cm、深さ4cmで、窪が長軸0.22m、短軸0.2cm、深さ2cm、平面形状はいずれも円形から楕円形、断面形状は浅い皿状である。出土遺物はなかった。

205上段平場 (図10～12・18・19、写真図版10-1)

東区の中央部から北部の、標高15.1～15.2mに205上段平場がある。下段の206下段平場との間には、南側に幅2.6m余りの斜面がある。201溝、202土坑、203・204耕作穴・窪等の遺構は、この上段の平場にある。出土遺物はなかった。

206下段平場 (図10～12・18、写真図版11-1)

東区の南側には斜面の下の標高14.7～14.8mには、幅1.8～2.2m余りの206下段平場がある。

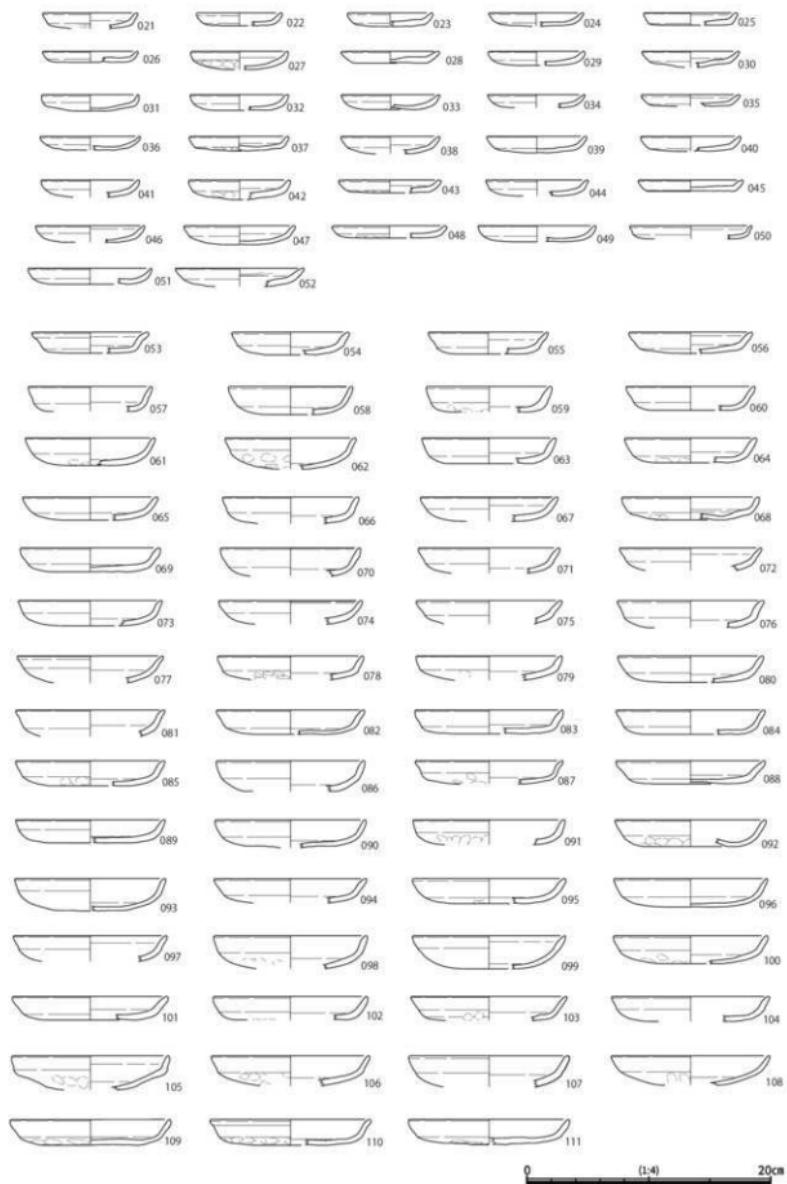


図 20-1. 東区 第3遺構面 208 土器溜り出土遺物

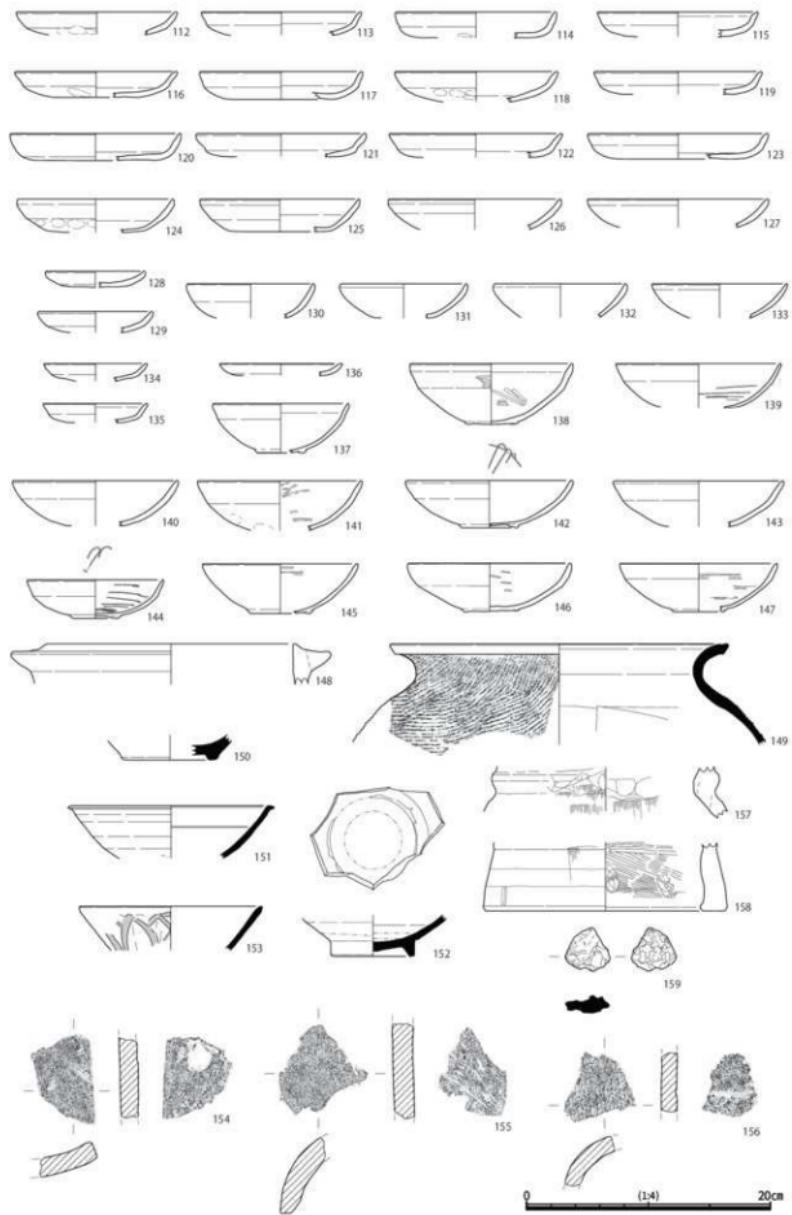


図 20-2. 東区 第3遺構面 208 土器溜り出土遺物

208 土器溜りは、206 下段平場とその北側の斜面下の一か所に、東壁際や壁面内の第 11-1 層中から、まとまって出土した。遺構とは考えられず、第 13 層上に集め置かれた状態であったと考えられる。他には、検出遺構も出土遺物もない。

207 谷状地（図 10～12・18.、写真図版 11-1）

東区の南側端の 207 谷状地で、検出した幅は 3.5 m 余りで、最も深い所で標高 14.1 m である。出土遺物はなかった。

208 土器溜り（図 10～12・18・20-1・2）

206 下段平場においても既述したように、205 上段平場の斜面下から 206 下段平場の傾斜変換地点で、東壁壁面内の第 11-1 層中から、比較的まとまって出土した遺物群である。図 20-1・2 に示す。

遺物の種類は、土師器の皿、瓦器の皿・椀、土師器の鍋、東播系須恵器の甕、貿易陶磁器の青磁碗・白磁碗、平瓦・丸瓦、朝顔形埴輪・円筒埴輪、鉄滓で、様々な遺物から成っている。

021～052 は、N 系列の口径が 6.8～10.4 cm、器高が 1.5 cm 以内の浅い土師器皿である。053～127 は、N 系列の口径が 9.3～14.7 cm、器高が 1.7～2.7 cm の土師器皿である。128・129 は、S 系列の小皿 (Ss) の口径が 8.0～9.2 cm、器高が 1.3～1.7 cm の浅い土師器皿である。130～133 は、S 系列の口径が 10.3～11.0 cm、器高が 2.7～2.8 cm の土師器皿である。134～136 は、口径が 8.4～10.0 cm、器高が 1.0～1.6 cm の瓦器皿である。137～147 は、口径が 11.0～13.8 cm、器高が 3.2～4.1 cm の楠葉型瓦器椀である。148 は口径 20.0 cm 余りの横津型土師器鍋（羽釜）である。149 は東播系須恵器甕である。150～153 は貿易陶磁器である。150 は小片であるが釉調や底部の形状等から、越州窯系 I-2 エ類の青磁碗と思われる。151 は福建省系 VIII-3 類の白磁碗である。152 は福建省系 V-4b 類の白磁碗である。153 は龍泉窯系 II b 類の片彫り蓮弁文青磁碗である。154 は平瓦、155・156 は丸瓦で、凸面はタテ網目タタキ、凹面は布目が残る。157 は土師質の朝顔形埴輪のくびれ部である。158 は土師質の円筒埴輪の底部とみられる。159 は鉄滓である。

208 土器溜りの遺物は、古墳時代から鎌倉時代までの、年代幅のあるものが含まれている。埴輪片である 157・158 は、川西編年 V 期³⁾ の 6 世紀代に位置付けられるもので、尾山遺跡⁴⁾ においても破片が散見している。148 土師器鍋（羽釜）は、10 世紀後半頃の遺物である。149 東播系須恵器甕は、11 世紀末～12 世紀前半頃のもので、出土破片を全て集めても半分程度の個体であったものと思われる。貿易陶磁器⁵⁾ の内、150 の青磁碗は B 期の 10 世紀後半～11 世紀中頃に、151 と 152 の白磁碗は D 期の 12 世紀中頃～後半に、153 の片彫り蓮弁文青磁碗は E 期の 13 世紀初～前半に比定される。154 平瓦と 155・156 丸瓦や 159 鉄滓は、時期不明である。これら上記のものは、破片で完形に近いものはない。137～147 瓦器椀は、137・138 が楠葉型 III-2 型式の 13 世紀前葉、139～143 が楠葉型 III-3 型式の 13 世紀中葉、144～147 が楠葉型 IV-1 型式の 13 世紀後葉と考えられる。よって 134～136 瓦器皿についてもこの頃の遺物とみられる。021～052 と 053～123 の土師器皿は、成形調整法から、口縁端部を横に摘まみだすもの、屈曲させるもの、斜め上に真っすぐ上げるものなど、製作地や年代により変化が見られる。これらの土師器皿は、口径や器高を小さくしながら 6A～7C 段階まで見られるものである。124～127 は、口径が 12.6～14.7 cm と大きく深いもので、斜めに内湾ぎみに上げた端部の先端を上に摘まみ、端部外側に面を作る一群である。これらも 5A～7C 段階まであり、口径や器高を小さくしながら見られるものである。128・129 は、S 系列の小皿 (Ss) で、6B 段階に出現する。130～133 は、S 系列の椀型タイプの土師器皿で、6B～7C 段階ぐらいまで残るが、口径と形状から 6C～7B

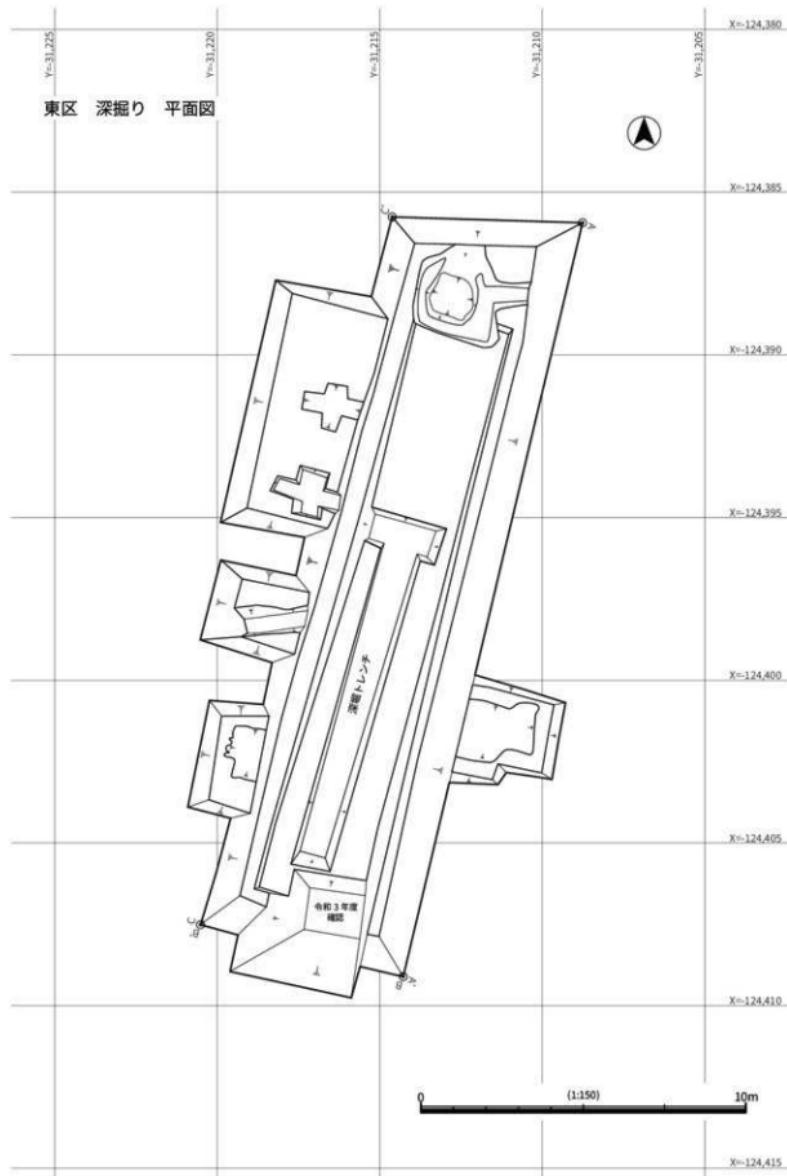


図 21. 東区 深掘り調査 平面図

段階のものと見られる。土師器皿の変化は極端には変化しない漸移的なもので、最も出土傾向の多いものは、6C・7A段階の13世紀中葉～後葉と考えられる。しかし、7A段階のある時期には、へそ皿(Sh)が出現するが、これに繋がるものや、口縁立ち上がり部の極端な屈曲と屈曲部器壁の薄いものを、208土器溜りからは確認できなかった。それ以前の遺物群であることを傍証するものである。これらのことから、208土器溜りの中心的で、最終時期の遺物群は、6C段階の13世紀中葉頃の遺物群と考えられる。

208土器溜りの性格は、出土状況が木箱や壺・甕等を埋納した土坑などでないこと、出土遺物に年代幅があること、ある時期のものについては完形に近い土器が多く含まれること、石を多く含むことなどから、何らかの共食などに伴う遺物群と、畑の耕作に伴い障害となった石を含む遺物群が合わさったもので、畑の斜面下に二次的に集積された遺物群であったと考える。

〔深掘り調査〕(図10～12・21、写真図版II-2)

東区の谷寄りの11.4mについて、表土下約4.3m、標高13.9mまでの深掘り調査(図21)を実施した。前回調査のVIII層に相当する層は確認できなかったが、第13層が、次第に南側の谷部を埋積していく過程を確認できた。出土遺物はなかった。

第2節 西区の各遺構面の遺構と遺物

西区（図9・22～31）

西区では、3面の遺構面調査と深掘り調査を実施した。第1遺構面は第3層上面で、耕作溝12条を検出した。第2遺構面は第10-2層上面で、窪2基、柱穴4基を検出した。第3遺構面は第13層上面で、土砂流下部抉込痕5条を検出した。また、下層調査のため、調査区の中央部において深掘り調査を実施した。

なお、上層の包含層である第2-1～9層から、図26の鎌倉時代13世紀中葉～後葉の6C・7A段階の160～175土器皿、広東省・福建省系IV-1a類でC期（11世紀後半～12世紀前半）の178玉縁白磁碗、鎌倉時代13世紀後葉の楠葉型IV-1型式の176瓦器椀、弥生時代後期後半の177壺底部が出土している。この他にも古墳時代後期の須恵器壺、長岡京期～平安時代前期の須恵器杯身、江戸時代後期の京焼椀、時期不明の鉄製釘等が出土している。

【第1遺構面】

第1遺構面（図25）は、水田や畑の10層の堆積が重なる作土を除去した、第3層上面に検出した、第3層を上面とする遺構面である。第8層土砂流堆積物である舌状地形堆積物が占める北側を除く、両側で耕作溝を検出した。

001～012耕作溝（図22～26、写真図版12・13）

西区の第2-10層（a層）を畑作土とする耕作溝で、第3層（b層）上面で検出した。近年まで舌状地形堆積物の西側から南側に沿って、第2-4～10層の畑作土層を、第2-1～3層の水田作土層が帯状に深く掘り込んで水田化している部分があり、この間に第3層の段差が生じている。

耕作溝の方向は、南北方向から西にN-0～5°-W傾く001～005・011・012耕作溝が古く、やや東に傾くN-12°-Eの006～010耕作溝が新しい。

耕作溝の規模及び形状は、検出した最も長いものが012耕作溝の延長約8.2mで、溝の上幅は0.3～0.6m、深さは2～8cm、断面形状は浅い皿状である。

埋土は、第2-10層が灰黄褐色の礫（φ～3cm）を10%含むシルト質細砂で、新しい一群が灰黄褐色の礫（φ～3cm）を10%含むシルト質極細砂～細砂である。

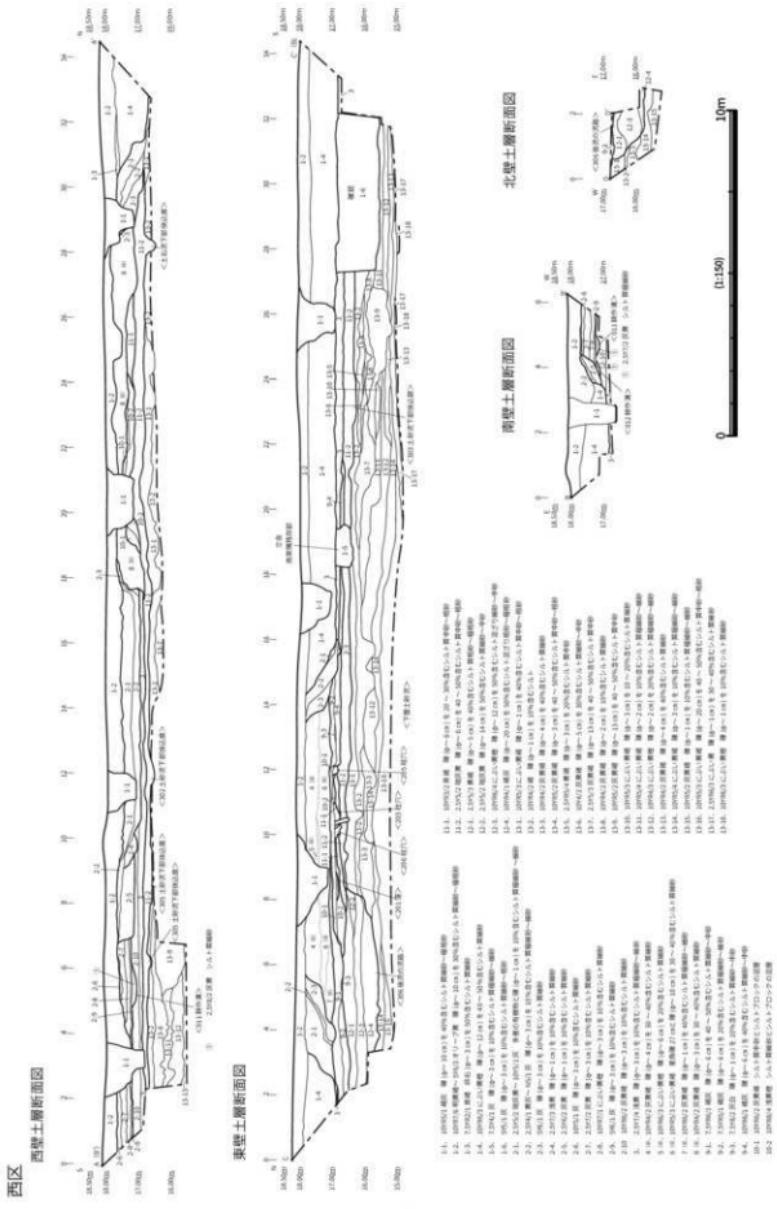
東区の様な耕作穴や窪は、検出されなかった。

なお、第2-2層から、図26の信楽焼5期⁶⁾で19世紀中頃～後半の179蓋物鉢の小片が、第2-10層からは、平安時代12世紀中葉の楠葉型II-2型式頃の180瓦器皿が出土している。

舌状地形堆積物（図22～24・27、写真図版17-4、18～20）

西区周辺において、長さが25m余り、幅が最大10m余り、基部で18m余り、高さ1m余りが残存していた堆積物である。これは、舌状地形に堆積する第8層の土砂流堆積物から成る冲積錐で、舌状の形をした堆積物として残ったものである。この堆積物と同じものは、図9の調査地詳細図の西側発生域側にも10m余りの幅で堆積し、40m余り北側にも、長さが30m近い土砂流堆積物から成る冲積錐が確認できる。残存する土砂流堆積物による冲積錐（土石流堆）の大きさは、西区の東壁で基底幅約10m、厚さ0.7～0.94m、西壁で基底幅約11m、厚さ0.3～0.85mである。

また、第8層は遺物を包含するが、西側ほど多く含み、東側では僅かしか見られない。これは、西区から20m余り西側上部で、前回調査地区⁷⁾の出土遺物を巻き込んでいるからに他ならない。



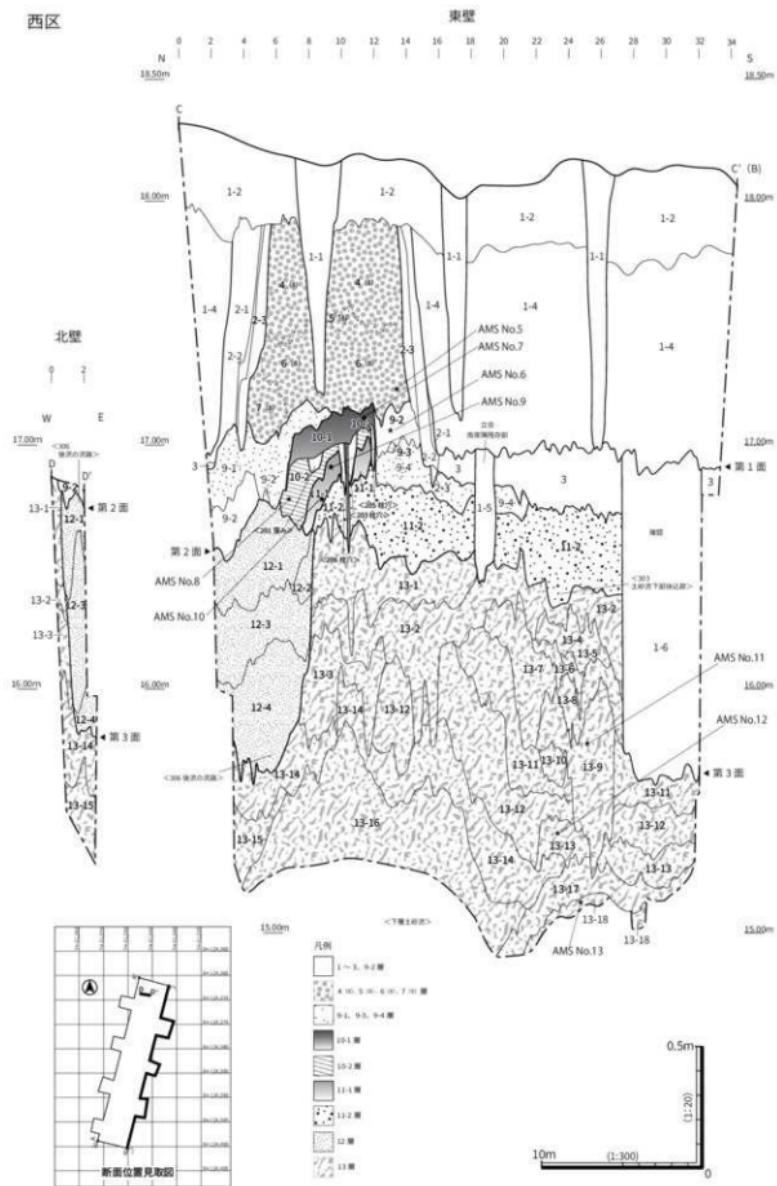


図 23. 西区 東壁面・北壁面縦横変倍図

西区

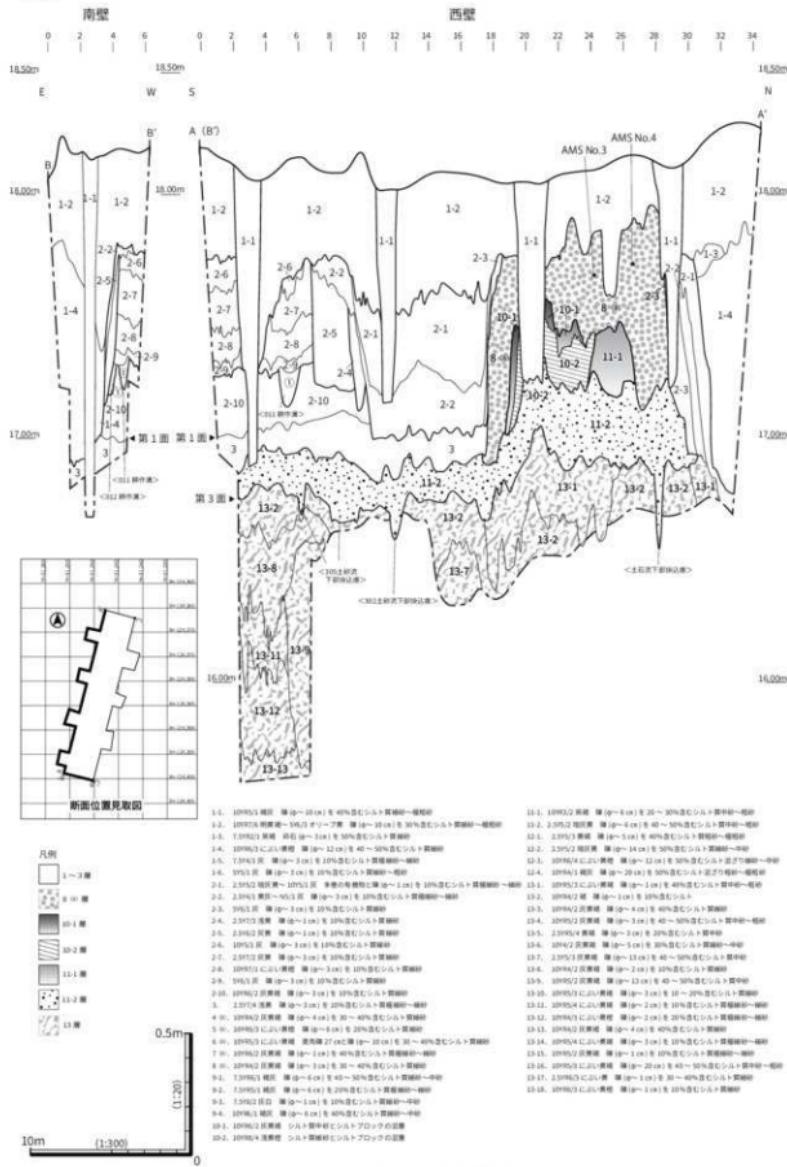


図 24. 西区西壁面・南壁面縦横変倍図

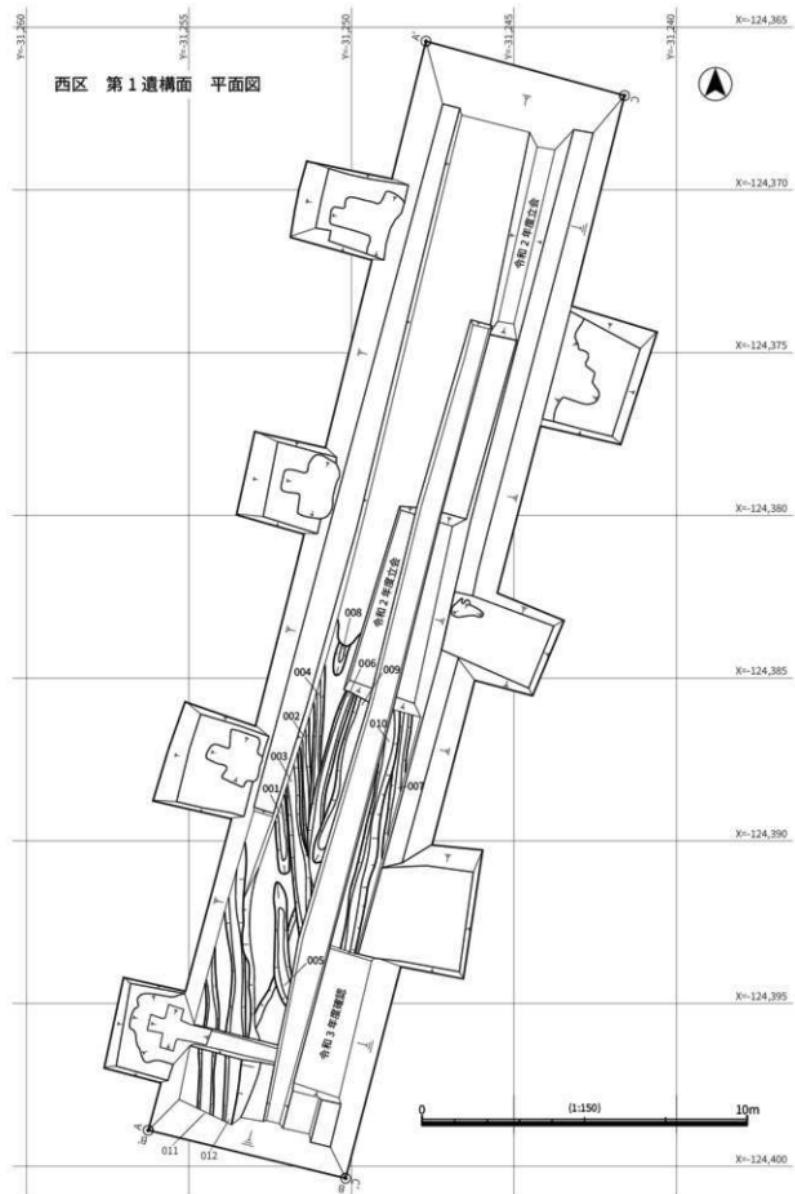


図25. 西区 第1遺構面 平面図

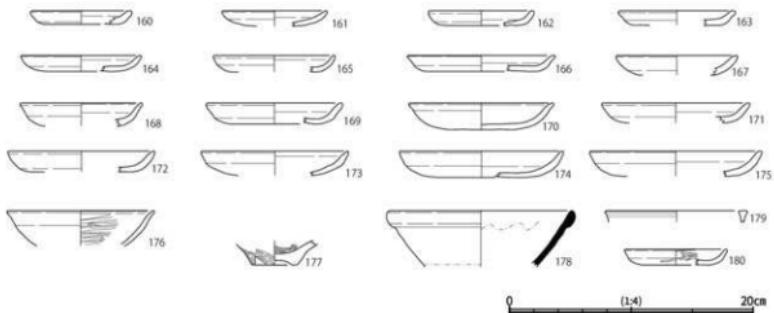


図 26. 西区第1遺構面 包含層及び遺構出土遺物

第8層包含層の遺物は、年代差等が無いかを見比べることを目的として、調査区の西壁において、任意に上位層と下位層に分けて採集を行った。上位層の遺物は181～216で、下位層の遺物は217～250である。図27に示す。

上位層の遺物の種類は、土師器皿、瓦器椀、土師器甕である。

181～191は、N系列の口径が7.0～11.5cm、器高が0.8～1.5cm以内の、口縁端部を丸くおさめるものと上に屈曲する、浅い土師器皿である。192～199は、N系列の口径が8.0～12.1cm、器高が1.3～2.1cmの、口縁端部を横に摘まみだすもの、斜め上に上げるものなどの土師器皿である。200～211は、N系列の口径が9.0～13.7cm、器高が1.6～2.3cmの、以後N系列の主流となる底部から外傾ないしは外反する口縁部をもつ土師器皿である。200～205は、器壁が薄く、口縁立ち上がり部が外傾し、内面の上部に稜をもち、外端面を丸くおさめるものである。206～211は、器壁が厚く、口縁立ち上がり部が外反し外端面を上に摘まみ上げ面を残すもので、口縁立ち上がり部の屈曲部器壁が薄くなり始めた時期の土師器皿である。212は、N系列の口径が12.7cm、器高が2.9cmの深手の土師器皿である。213は口径23.2cmとやや大きいもので、三河型甕（清郷型鍋）と思われる土師器の破片である。214～216は楠葉型の口径が14.0～14.9cmの瓦器椀である。

下位層の遺物の種類は、土師器皿のみであった。

217～225は、N系列の口径が6.0～8.8cm、器高が0.8～1.2cm以内の、口縁端部を丸くおさめるものと上に屈曲する、浅い土師器皿である。226・227は、N系列の口径が8.0～11.1cm、器高が1.2cmの、平らで大きく広がる厚い端面を上に摘まむ、茶托型の土師器皿である。228～239は、N系列の口径が8.4～12.4cm、器高が1.4～2.3cmの、口縁端部を横に摘まみだすもの、斜め上に上げるものなどの土師器皿である。240～250は、N系列の口径が10.6～12.0cm、器高が1.6～2.5cmの、底部から外傾ないしは外反する口縁部をもつ土師器皿である。240～243は、器壁が薄く、口縁立ち上がり部が外傾し、内面の上部に稜をもち、外端面を丸くおさめるものである。244～250は、器壁が厚く、口縁立ち上がり部が外反し外端面を上に摘まみ上げ面を残すもので、口縁立ち上がり部の屈曲部器壁が薄くなり始めた時期の土師器皿である。

第8層包含層の遺物には、平安時代から鎌倉時代までの遺物が含まれている。213は三河型甕（清郷型鍋）⁸³⁾で、口縁部の形態がI類で、第II段階第2小期の10世紀後半頃の遺物である。愛知県・静岡

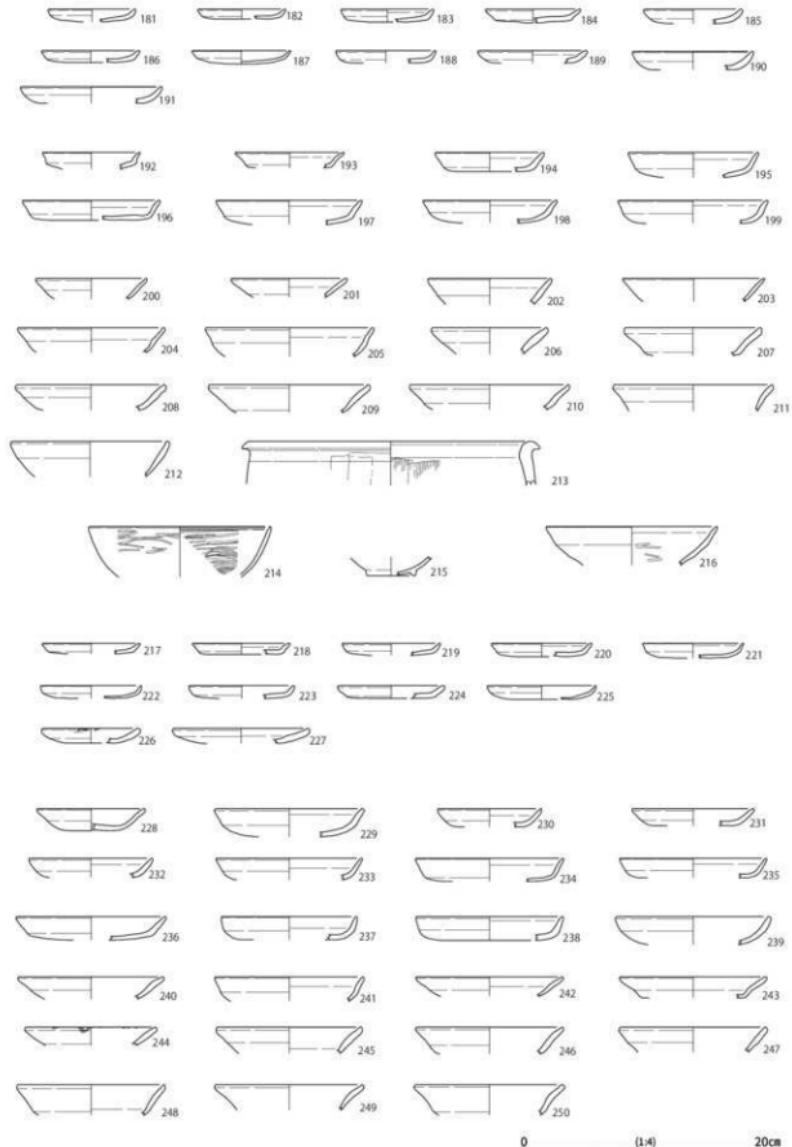


図 27. 西区 第1遺構面 舌状地形堆積物（第8層）出土遺物

県・岐阜県・三重県では出土が知られていたが、淀川流域とはいえ極めて珍しい遺物である。瓦器椀は、214・215が楠葉型II-3型式の12世紀後葉、216が楠葉型III-3型式の13世紀中葉と考えられる。

土師器皿については、上位層も下位層も口径や器高では、大きく異なっていない。浅い土師器皿は、上位層が口径7.0～8.7cm、器高0.8～1.2cm、下位層が7.0～8.8cm、器高0.8～1.1cmである。口縁端部を横に摘まみだすもの、斜め上に上げるものなどの土師器皿は、上位層が口径8.0～12.1cm、器高1.3～2.1cm、下位層が8.4～12.4cm、器高1.4～2.3cmである。底部から外傾ないしは外反する口縁部をもつ土師器皿では、上位層が口径9.0～13.7cm、器高1.6～2.3cm、下位層が10.6～12.0cm、器高1.7～2.5cmであった。上位層の181～212も、下位層の217～250の土師器皿も、成形調整法からみると、口縁端部を横に摘まみだすもの、屈曲させるもの、斜め上に真っすぐ上げるもの、底部から外傾ないしは外反する口縁部をもつものが出土している。これらの土師器皿は、口径や器高を小さくしながら、6A～7C段階まで見られるものである。

器種については、上位層のみで出土している226・227の茶托型の土師器皿⁹⁾は、特異なものではあるが、7A段階前後に出土が知られている。上位層の212は、口径が12.7cmと大きく、2.9cmと深いもので、斜めに内湾ぎみに上げた端部の先端を上に摘まみ、端部外側に面を作る、6A～7C段階までみられる一群であるが、1点のみの出土であった。また、上位層と下位層共にS系列の出土はなかった。

東区208土器溜りの遺物と第8層包含層の遺物を比較してみると、東区208土器溜りの遺物は、浅い土師器皿の口径が7.6～10.4cm、器高が1.5cm以内である。口縁端部を横に摘まみだすもの、斜め上に上げるものなどの土師器皿は、口径が9.3～14.7cm、器高が1.7～3.0cmである。いずれをとっても208土器溜りの遺物の方が、口径・器高共に大きく、第8層包含層の遺物の方が小さくなっていることは明らかである。さらに、東区208土器溜りの遺物には存在しなかった、底部から外傾ないしは外反する口縁部をもつ土師器皿や、茶托型の土師器皿の存在など、後続する時期の遺物に引き継がれる新しい要素が入ってきている。土師器皿の変化は極端には変化しない漸移的なもので、最も出土傾向の多いものは、6C・7A段階の13世紀中葉～後葉と考えられる。しかし、口縁立ち上がり部の極端な屈曲と屈曲部器壁の薄いものが存在するにもかかわらず、7A段階のへそ皿(Sh)が無いことなどから、それ以前の遺物群であることを傍証するものである。これらのことから、第8層包含層の遺物の中心的で、最終時期の遺物群は、6C段階に近い7A段階の13世紀後葉頃の遺物群と考えられる。

[第2遺構面]

第2遺構面(図28)は、第8層砂流堆積物である舌状地形堆積物の下で、第9-1～4層下、第10-1層土壤層(作土層)下の、客土造成層である第10-2層の上面において検出した遺構面である。この遺構面は、狭い範囲に山上を主にして土壤層を混ぜて客土とした第10-2層の遺構面で、当初は小規模な掘立柱建物等が存在していた可能性があるが、その後は耕作地となっていたようである。客土造成された範囲は、東壁では幅約5.9m、客土厚9～29cm、西壁では幅約5.3m、客土厚13～30cmであった。遺構を検出したのは、この内の東壁下の犬走上で残存していたのみで、西壁では残っていなかった。第10-2層上面で検出した遺構は、第10-1層土壤層が入り込む201・202窟が2基と、203～206柱穴が4基である。この第10-2層には、客土時に土器を包含している。

201・202窟、203～206柱穴(図22～24・28・29、写真図版14)

201窟と202窟は、第10-1層土壤層が入り込むもので、形状は201窟が不定形で浅いものであるのに対し、202窟は棒状のもので引っ掻いたような形を残す。図29の203～206柱穴の内、204柱穴の

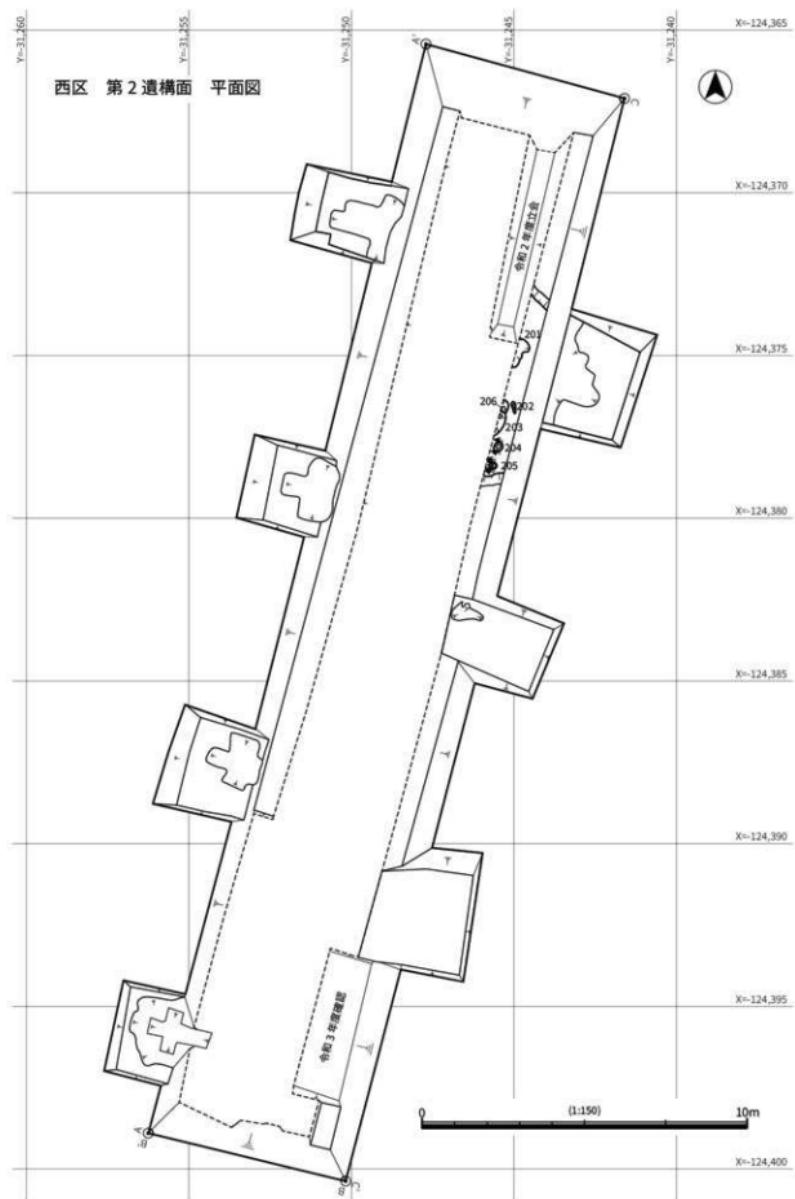


図 28. 西区 第2遺構面 平面図

みが形状の明らかな遺構である。204 柱穴の形状は、長辺 0.3m、短辺 0.26 m、深さ 17 cm の楕円形で、柱痕跡の直径は 12 cm 余りであった。柱痕跡の直径は、残っているものは全て、直径 12 cm 余りであった。203 柱穴のように異常な沈下を起こしているものもあり、地盤は固くなかったようである。建物がこの柱穴で建てられていたとするなら、小規模なものであったと想像され、作業小屋的なものが想起される。

第 10-2 層・客土層（図 22～24・28・29、写真図版 14-5）

第 10-2 層は、山土と土壤層が混った客土層である。

東壁から 5 点の土師器皿が、西壁から 3 点の土師器皿と 1 点の瓦器椀底部が出土している。東壁の図 29 の 251 は口径 8.9 cm、器高 1.3 cm の茶托型の土師器皿、252 は口径 8.1 cm、器高 1.3 cm の浅い土師器皿、253～255 は口径 9.2～13.9 cm、器高 1.9～2.7 cm の、斜め上に上げる土師器皿である。西壁の 256・257 は口径 8.9～9.3 cm、器高 1.5～1.6 cm の、口縁端部を横に摘まみだす土師器皿で、258 は口径 8.9 cm、器高 1.5 cm の斜め上に上げる土師器皿である。土師器皿は、6C 段階の 13 世紀中葉頃の遺物群と考えられる。259 は瓦器椀の底部で、底径 4.0 cm の貼付け高台の形状や体部のカーブ等から、楠葉型III-3 型式前後と考えられる。

〔第 3 遺構面〕

第 3 遺構面（図 30）は、土砂流堆積物第 11-2 層の土や石が、土砂流堆積物第 13 層上面を通過するときに傷つけた痕跡である、土砂流下部抉込痕 5 条と後流の流路 1 条を、調査区の南側で検出した。土砂流下部抉込痕 5 条と後流の流路 1 条である。いずれも自然現象で生じたものである。

301～305 土砂流下部抉込痕（図 22～24・29・30、写真図版 15）

この痕跡は、土砂流堆積物第 11-2 層の土や石が、下層の土砂流堆積物第 13 層上面を通過するときに、特に大きめの石が転がることによって発生するものである¹⁰⁾。流れた方向は、西北西から東南東である。抉込痕内には、粗い礫が残る。検出されたのは、301～305 土砂流下部抉込痕で、全て不定形な形状で、横方向に転がったことによって生じた痕跡と思われる。

なお、第 11-2 層土砂流堆積物上層の土壤層である第 11-1 層と思われる層から、図 29 の 260 土師器鍋が 1 点出土している。浜津型の 9 世紀前半～10 世紀前半の遺物と思われる。

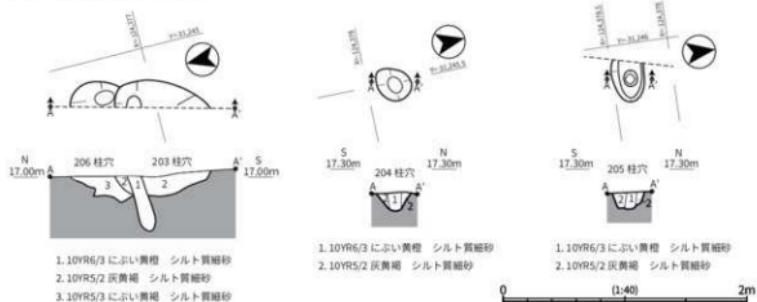
306 後流の流路（図 22～24・29・30、写真図版 16）

土石流や土砂流の流下後に流れる自然発生的な流路で、堆積層である第 12 層は葉理（ラミナ）構造を持つ。調査区の北壁より東壁にかけて、第 13 層の堆積後に流れた 306 後流の流路 1 条を検出した。検出した延長は約 5m 余りで、幅は 4 m 以上、深さ約 1.1 m である。流下方向は、N-82°-E の南南東方向で、蛇行しているものとみられる。

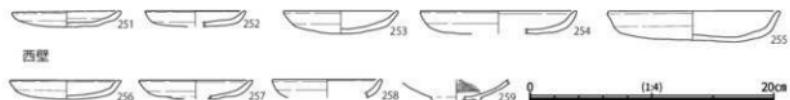
〔深掘り調査〕（図 22～24・31、写真図版 17～20）

西区の中央約 30m について、表土下約 3.2m、標高 14.9m までの深掘り調査（図 31）を実施した。西区においても、前回調査Ⅷ層の地山層は確認できなかったが、第 13 層が次第に南側の谷部を埋積していく過程を確認できた。第 13 層からの、出土の遺物はなかった。

西区 第2遺構面 遺構図



東壁



西区 第3遺構面 遺構図

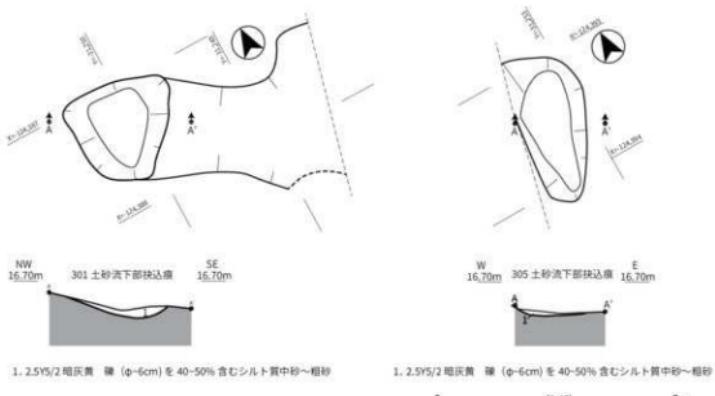


図29. 西区第2・3遺構面遺構図及び出土遺物

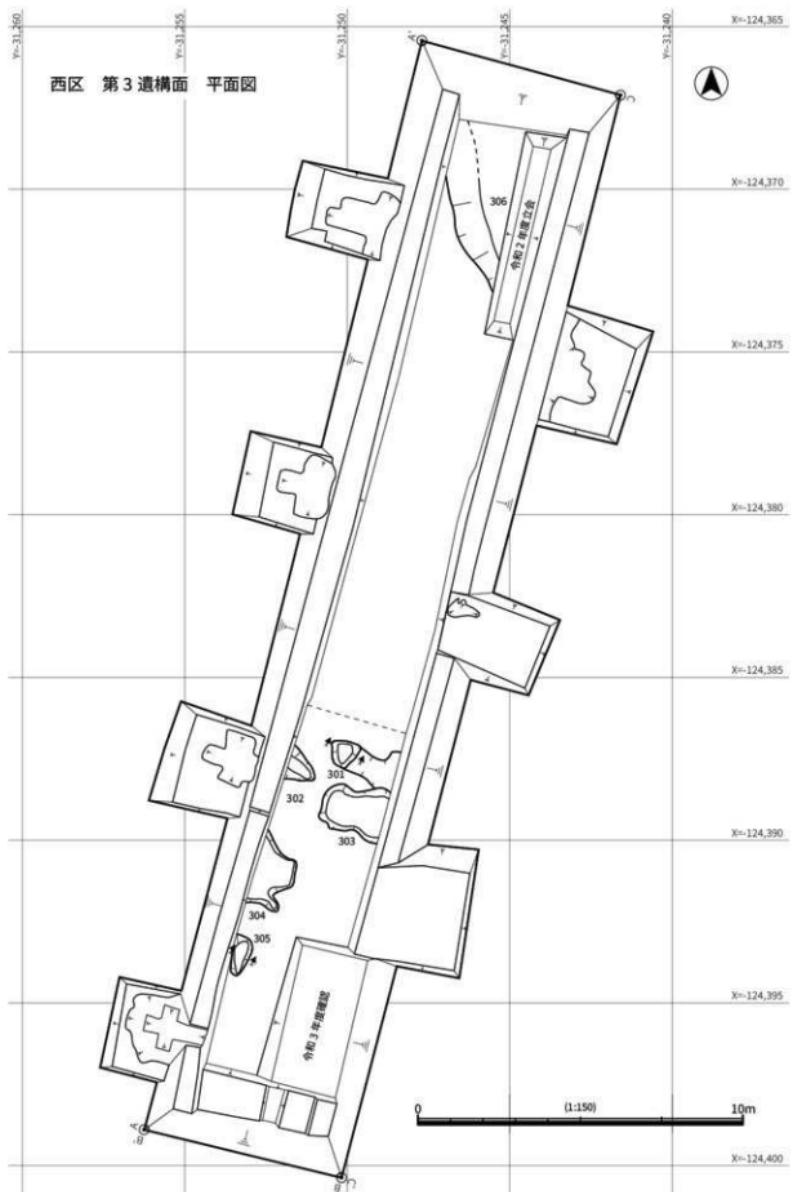


図 30. 西区 第3遺構面 平面図

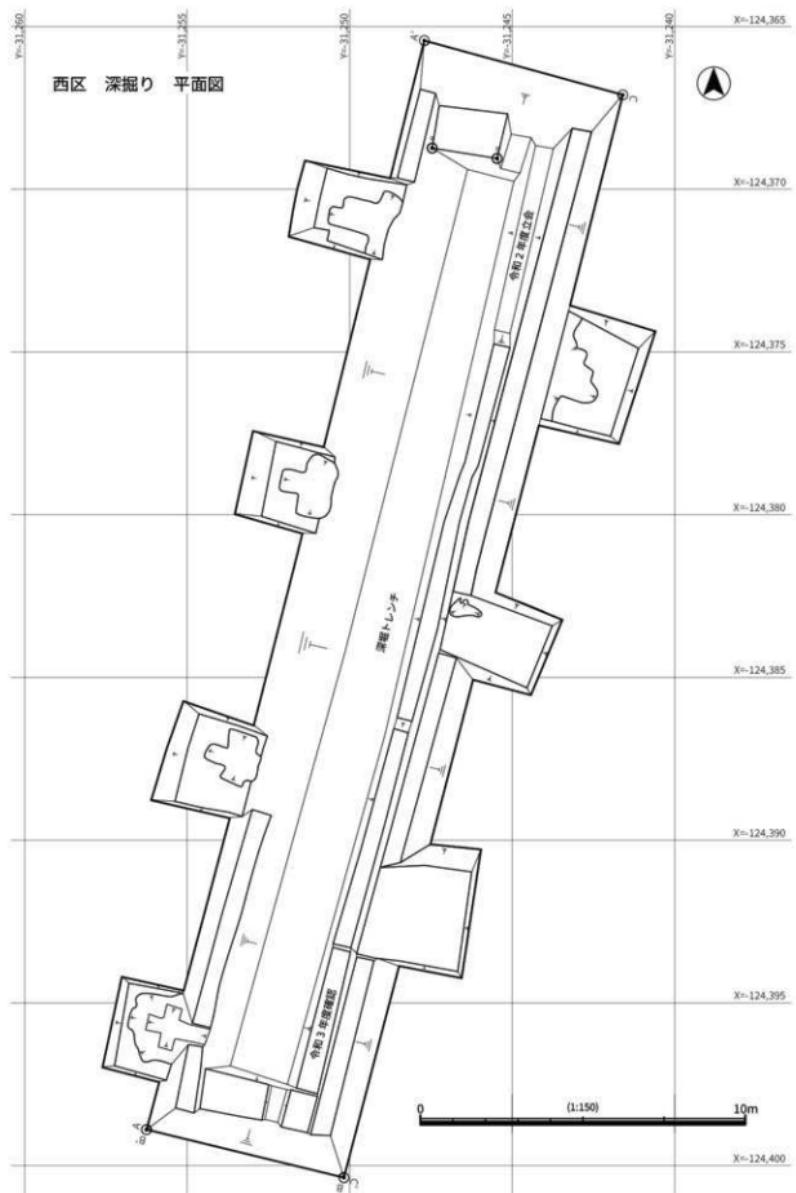


図 31. 西区 深掘り調査 平面図

<註・引用文献>

- 1) 山口誠司「製作技法からみた織豊期城郭の瓦」『中世城郭研究』第 31 号、中世城郭研究会、2017 年
- 2) 山崎信二「近世瓦におけるコピキ B（鉄線切り）出現の年代-地域別の実年代について-」『考古学論究』（有）真陽社、2007 年
森田克行「屋瓦」「掛津高櫻城」高槻市教育委員会、1984 年
- 3) 川西宏幸「円筒埴輪總論」『考古学雑誌』64-2、1978 年
- 4) 後川恵太郎「尾山遺跡・御所池瓦窯跡」島本町文化財調査報告書第 43 集・（公財）大阪府文化財センター調査報告書第 316 集、
2022 年
辻 広志「尾山遺跡の時期別消長」『島本町文化財調査報告書-尾山遺跡発掘調査報告書』島本町文化財調査報告書第 48 集、
85-87p、2023 年
- 5) 山本信夫「貿易陶磁器」『新版概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編、（有）真陽社、2022 年
- 6) 煙中英二「信楽焼の考古学的研究」サンライズ出版、2003 年
- 7) 大塚 隆・川端博明ほか「越谷遺跡他発掘調査報告書-伝待宵小侍從墓・源吾山古墳群-」名神高速道路内遺跡調査会調査報告書
第 2 集、名神高速道路内遺跡調査会、1997 年
- 8) 北村和弘「古代「三河型甕」考」『研究紀要』第 2 号、（株）愛知県埋蔵文化財センター、2001 年
- 9) 辻 広志「土坑 187SK の土器」『植物園北遺跡』（株）四門、2021 年
- 10) 増田富士雄『ダイナミック地層学』近未来社、2019 年

第6章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

越谷遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表4に、測定試料採取地点は図11・12・23・24の壁面図のとおりである。測定試料を写真16に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結 果

表5に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図32に暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ:IntCal20)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考 察

(1) 測定結果

今回得られた年代値は、5つの年代グループに分けられる。5つの年代グループについて、年代が新しいグループから順に整理する。

表4. 测定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-48278	試料No.1 調査区：東区 採取位置：東壁面 部位：土壌化層 208土器層 第11-1層 取上No.①	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48279	試料No.2 調査区：東区 採取位置：西壁面 部位：土砂混堆植物 第13-5層 取上No.②	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48280	試料No.3 調査区：西区 採取位置：西壁面 部位：玄武地帯堆植物 第5層（上位層） 取上No.③	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48281	試料No.4 調査区：西区 採取位置：西壁面 部位：玄武地帯堆植物 第6層（上位層） 取上No.④	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48282	試料No.5 調査区：西区 採取位置：東壁面 部位：玄武地帯堆植物 第5層（下位層） 取上No.⑤	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48283	試料No.6 調査区：西区 採取位置：東壁面 部位：土壌化層 第1-2層 取上No.⑥	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48285	試料No.7 調査区：西区 採取位置：東壁面 部位：竹土層 第10-1層 取上No.⑦	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48287	試料No.8 調査区：西区 採取位置：東壁面 部位：竹土層 第10-2層 取上No.⑧	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48284	試料No.9 調査区：西区 採取位置：東壁面 部位：土壌化層 第11-1層 取上No.⑨	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48286	試料No.10 調査区：西区 採取位置：東壁面 部位：土壌化層 第11-1層 取上No.⑩	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48289	試料No.11 調査区：西区 採取位置：東壁面 部位：土砂混堆植物 第13-1層 取上No.⑪	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48288	試料No.12 調査区：西区 採取位置：東壁面 部位：土砂混堆植物 第13-13層 取上No.⑫	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）
PLD-48290	試料No.13 調査区：西区 採取位置：東壁面 部位：土砂混堆植物 第13-18層 取上No.⑬	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年幅以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 硫酸：1.2 mol/L）



写真 16. 測定試料写真

表5. 放射性炭素年代測定および層年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	樹木年齢 (yr BP ± 1 yr)	^{14}C 年代 (yr BP ± 1 yr)		^{14}C 年代を樹木年齢に校正した年代測定		^{14}C 年代を樹木年齢に校正した年代測定		
			1 = 樹木年齢測定		2 = 樹木年齢測定		1 = 樹木年齢測定		
			10 ³	10 ⁴	10 ³	10 ⁴	10 ³	10 ⁴	
ILD-48270 ERFbc.1	-24.78 ± 0.25	788 ± 20	790 ± 20	1228 ± 246	10 (36, 98%)	1223 ± 1273	cal AD (66, 45%)	722 ± 477	cal BP (95, 45%)
ILD-48270 ERFbc.2	-24.96 ± 0.24	2715 ± 21	2715 ± 20	922 ± 965	cal BC (121, 95%)	976 ± 863	cal BC (11, 99%)	2825 ± 2902	cal BP (1, 98%)
ILD-48280 ERFbc.3	-25.03 ± 0.31	787 ± 20	787 ± 20	874 ± 838	cal BC (132, 84%)	934 ± 800	cal BC (100, 37%)	2823 ± 2779	cal BP (50, 37%)
ILD-48281 ERFbc.4	-24.99 ± 0.22	885 ± 21	885 ± 20	1160 ± 1270	cal AD (32, 43%)	1223 ± 1274	cal AD (66, 45%)	722 ± 476	cal BP (35, 83%)
ILD-48282 ERFbc.5	-25.30 ± 0.35	961 ± 23	960 ± 25	1185 ± 1215	cal AD (31, 29%)	1030 ± 1020	cal AD (14, 29%)	896 ± 860	cal BP (31, 25%)
ILD-48283 ERFbc.6	-23.65 ± 0.22	777 ± 21	778 ± 20	1175 ± 1196	cal AD (33, 95%)	1054 ± 1059	cal AD (10, 97%)	896 ± 881	cal BP (1, 97%)
ILD-48284 ERFbc.7	-27.18 ± 0.20	840 ± 19	840 ± 20	1188 ± 1219	cal AD (34, 24%)	1137 ± 1230	cal AD (61, 82%)	773 ± 754	cal BP (33, 90%)
ILD-48285 ERFbc.8	-30.12 ± 0.17	846 ± 22	845 ± 20	1220 ± 1244	cal AD (26, 67%)	1243 ± 1258	cal AD (7, 95%)	732 ± 723	cal BP (15, 34%)
ILD-48286 ERFbc.9	-27.69 ± 0.15	2062 ± 21	2060 ± 20	1178 ± 1192	cal AD (18, 98%)	1225 ± 1277	cal AD (66, 45%)	721 ± 706	cal BP (12, 67%)
ILD-48286 ERFbc.10	-25.08 ± 0.18	819 ± 20	820 ± 20	1202 ± 1225	cal AD (42, 98%)	1186 ± 1261	cal AD (65, 45%)	748 ± 680	cal BP (11, 98%)
ILD-48289 ERFbc.11	-26.41 ± 0.44	3147 ± 25	3145 ± 25	1401 ± 451	cal BC (5, 37%)	1407 ± 1479	cal BC (12, 87%)	704 ± 606	cal BP (7, 82%)
ILD-48290 ERFbc.12	-25.24 ± 0.24	3110 ± 23	3110 ± 25	1448 ± 402	cal BC (62, 95%)	1465 ± 1385	cal BC (55, 69%)	3037 ± 3531	cal BP (1, 99%)
ILD-48290 ERFbc.13	-27.29 ± 0.29	3035 ± 21	3035 ± 20	1339 ± 1346	cal BC (36, 61%)	1338 ± 1319	cal BC (1, 28%)	3446 ± 3419	cal BP (12, 87%)

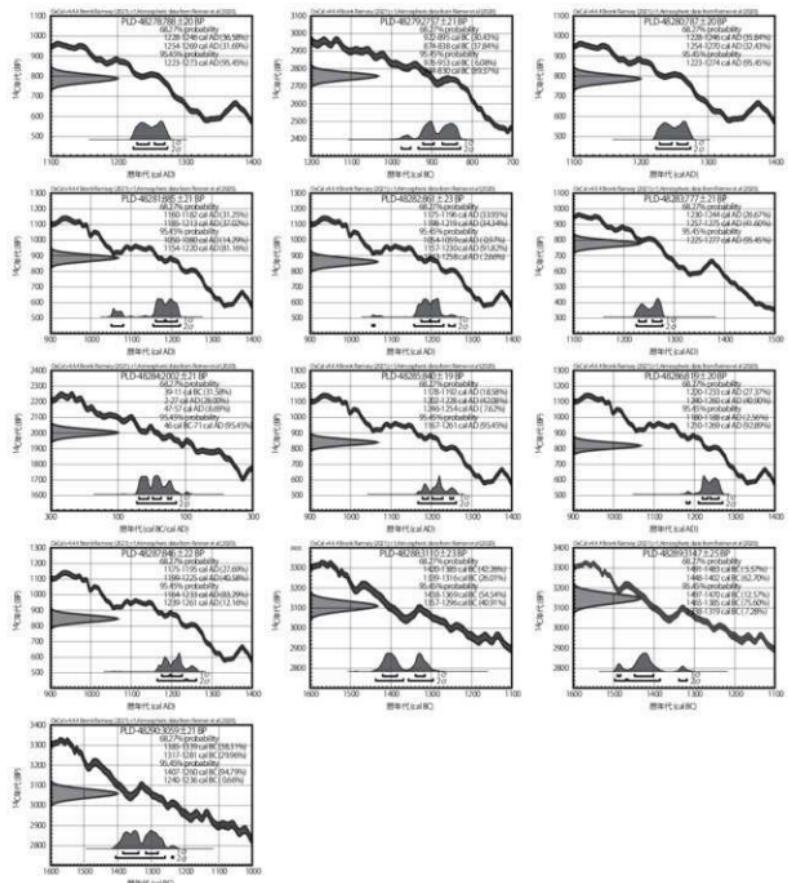


図 32. 历年較正結果

最も新しい年代値を示す年代グループは、 ^{14}C 年代が 775 ~ 790 BP 前後、 2σ の較正年代（以下、同様）が 1220 ~ 1280 cal AD 前後で、紀元後 13 世紀前半～後半に相当するグループである。東区・第 11-1 層・208 土器溜りの試料 No.1 (PLD-48278)、西区・第 8 層上位層・舌状地形堆積物の試料 No.3 (PLD-48280)、西区・第 9-2 層・土壤化層の試料 No.6 (PLD-48283) の 3 試料である（図 32）。

次に新しい年代値を示す年代グループは、 ^{14}C 年代が 820 ~ 885 BP 前後、較正年代が 1050 ~ 1270 cal AD 前後で、紀元後 11 世紀中頃～13 世紀後半に相当するグループである西区・第 8 層下位層・舌状地形堆積物の試料 No.4 (PLD-48281)、西区・第 8 層下位層・舌状地形堆積物の試料 No.5 (PLD-48282)、西区・第 10-1 層・作土層の試料 No.7 (PLD-48285)、西区・土壤化層・第 11-1 層の試料

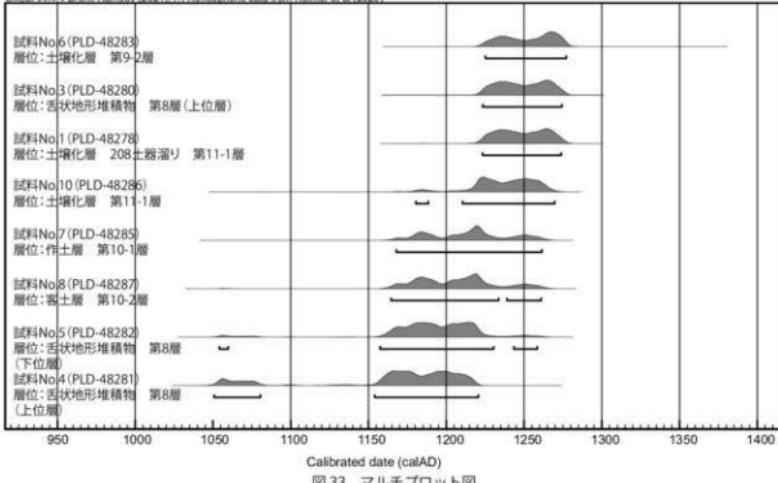


図33. マルチプロット図

No.10 (PLD-48286)、西区・第10-2層・客土層の試料No.8 (PLD-48287) の5試料である(図32)。

3つ目の年代グループは、¹⁴C年代が2000 BP前後、較正年代が50 cal BC ~ 70 cal AD前後で、紀元前1世紀半ばから紀元後1世紀後半に相当するグループである。西区・第11-1層・土壤化層の試料No.9 (PLD-48284) の1試料のみである。3つ目の年代グループと1つ目と2つ目の年代グループの間には、大きな時間的間隙が存在する。

4つ目の年代グループは、¹⁴C年代が2755 BP前後、較正年代が2930 ~ 2780 cal BP前後のグループで、西区・第13-5層・土砂流堆積物の試料No.2 (PLD-48279) の1試料のみである。

最も古い年代値を示した5つ目の年代グループは、¹⁴C年代が3060 ~ 3145 BP前後、較正年代が3450 ~ 3180 cal BP前後のグループで、西区・第13-13層・土砂流堆積物の試料No.12 (PLD-48288)、西区・第13-9層・土砂流堆積物の試料No.11 (PLD-48289)、西区・第13-18層・土砂流堆積物の試料No.13 (PLD-48290) の3試料である。

縄文時代の年代観については幡中(2012)、岡田(2012)、小林(2017)、弥生時代については今村・設楽(2011)と若林(2018)、弥生時代後期~古墳時代中期については森岡ほか(2016)と春成ほか(2011)、古墳時代以降については児玉編(2018)にもとづき、測定結果をまとめる。

紀元後13世紀前半~後半の1つ目の年代グループは、鎌倉時代に相当する。紀元後11世紀中頃~13世紀後半に2つ目の年代グループは、平安時代中期~鎌倉時代に相当する。紀元前1世紀半ばから紀元後1世紀後半の3つ目の年代グループは、弥生時代後期前半に相当する。較正年代が2930 ~ 2780 cal BP前後の4つ目の年代グループは、縄文時代晚期中葉~後葉に相当する。較正年代が3450 ~ 3180 cal BP前後の5つ目のグループは、縄文時代後期後葉~晚期前葉に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料は、

すべて最終形成年輪の確認できない部位不明の炭化材である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

(2) 今回の発掘調査区の堆積状況

今回の調査トレンチの西側に近接する地点では、平成3・4（1991・1992）年度にかけて発掘調査が実施された越谷遺跡の第2地区が存在する（大塚編、1977）。今回の調査区および第2地区は、開析谷底ないし谷口に発達する沖積堆もしくは小規模扇状地の斜面上に存在する。第2地区は、今回の調査区よりも斜面上部に位置する。今回の調査区および第2地区付近では、都市開発と名神高速道路建設以前に、広く棚田が構築されていた。そのため、第2地区的調査前の地表面の標高は、斜面上部にあたる西側と北側に向かって階段状に高くなっていた。今回の調査トレンチに近い第2地区東縁部では、調査前の地表面の標高がT.P.20.0m前後を示す。この第2地区では、上下2面の遺構確認面が設定されており、検出された遺構・遺物から、基本層序のIII層上面の第1遺構面で中世後半、IV層上面の第2遺構面で弥生時代後期～古代末頃の遺構が確認されている。遺構確認面の標高は、調査区東半部付近において、第1遺構面がT.P.19.5m前後、第2遺構面がT.P.18.7m前後である。なお、遺構確認面を構成するIII層、IV層は、ともに淘汰不良の砂礫混じりの泥層を主体とする構成層からなる。さらにIII層は、中世中頃の遺物を下限年代とする遺物包含層となっている。

弥生時代～中世の遺構・遺物が検出される第2地区では、第2遺構面の下位において、更新統の大坂層群を侵食して形成された開析谷が検出されている。深掘トレンチ調査により、第2遺構面の構成層であるIV層の下位には、最深部で層厚2.0m前後ある、開析谷を埋積する砂礫層のV層の堆積が確認された。さらに、V層の基底部では、直下の砂礫層のVI層に挟まれて、T.P.17.5m前後に谷底で形成された湿性の土壌化層準と考えられる層厚0.5m前後の黒色粘土層のVI層の挟在も捉えられた。このVI層からは、縄文時代後期前葉の北白川上層式1期および2期の土器がまとまって検出された。

越谷遺跡の周辺では、今回の調査トレンチの北東に位置する地点において、令和2・3（2020・2021）年度にかけて発掘調査が実施された尾山遺跡が存在する（後川編、2022）。尾山遺跡は、沖積堆もしくは小規模扇状地の斜面の下部に位置する。尾山遺跡の調査範囲における調査前の地表面の標高は、相対的に高い場所でT.P.11.5～12.0m前後、低い場所で10.0～10.5m前後である。発掘調査では、深部まで調査が実施されており、基底部のT.P.8.0～8.5m前後の土壌化した泥層の第7a層から、縄文時代後期中葉の土器が出土している。なお、第7a層の下位には、砂礫層の第7b層が3m以上連続して堆積しており、深掘調査でも砂礫の基底は確認されなかった。

第7a層の直上には、縄文時代晚期～弥生時代前期の土壌化した泥層の第6a層が堆積する。第7a層と第6a層は、縄文時代後期中葉から弥生時代前期に堆積的に発達した泥質の土壌化層準と考えられる。第6a層の上部には、弥生時代前期以降から弥生時代中期の砂層である第5b層が、ロープ状の微高地をなして層厚1.0m前後の厚さで堆積する。第5b層の表層には、弥生時代中期に形成された泥質の土壌化層準である第5a層がある。第5b層～第5a層段階に発達した微高地は、調査範囲の中央付近に形成され、その周囲が微低地となる。微高地の周囲の微低地では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、最大層厚1.0m以上の砂礫層第4-2b層を主体とする第4層が堆積する。第4層の砂礫層は、挟在する泥層の第4-2a層により、第4-2b層と第4-1b層の上下2つの堆積層に区分される。上部の砂礫

層である第4-1b層の表層部には、弥生時代後期～古墳時代初頭もしくは古墳時代前期の泥層である第4-1a層がのる。また、第4-2a層段階において相対的に地形が低い領域には、古墳時代前期～中期の砂礫層である第3-2b層が堆積する。

なお、尾山遺跡で記載された堆積柱状図からは、古墳時代前期以降から古代もしくは中世前半にかけて土砂流出が静穏化した状況が読み取れる。土砂流出が再び活発化するのは、調査範囲の南側に主に分布する、13世紀以降の泥層の第3-2a層と、砂礫層からなる13～14世紀代の第3-1b層の堆積時期である。砂礫層の第3-1b層直上には、14世紀以降の泥層である第3-1a層がのる。堆積柱状図からは、近世の第2層、現代の第1層の耕作土が、調査区全域を薄く被覆する状況が確認できる。よって、第3-1a層の14世紀以降になると、尾山遺跡では土砂流出がかなり静穏化したと考えられる。

(3) 今回の調査区で得られた年代値と周辺調査区の層序について

1) 越谷遺跡

今回の発掘調査で採取された測定試料は、平安時代～鎌倉時代、弥生時代後期、縄文時代後期後葉～晩期後葉の大きく3つの年代グループに大別できる。

越谷遺跡の西側に接する第2地区の開析谷内からは、北白川上層式1期および2期の縄文時代後期前葉の土器が出土している（大塚編、1997）。土器の検出層準は、開析谷の埋積層である砂礫層のV層基底部に堆積する黒色泥層のVI層である。VI層を被覆するV層からは、遺物は検出されず、堆積時期は不明である。ただし、V層の上部に堆積した淘汰不良の砂礫混じり泥層のIV層では、堆積層上面で設定された第2遺構面において、古い時期の遺構として弥生時代後期の遺構が検出されている。第2地区での発掘調査結果をふまえると、考古遺物から堆積時期を特定できないV層およびIV層は、縄文時代後期前葉以降から弥生時代後期以前に形成されたと捉えられる。一方で、VI層については、出土土器から堆積時期が推定できる。VI層から出土した北白川上層式1期および2期の土器は、幡中（2012）の縄文土器の放射性炭素年代の検討結果によると、3980～3820 cal BP前後の年代値が示される。よって、出土土器にもとづくVI層の放射性炭素年代としては、3980～3820 cal BP前後を一つの目安として採用できると考えられる。今回の調査区で得られた年代値を参照すると、最も古い年代グループである縄文時代後期後葉～晩期後葉の試料は、3450～2780 cal BP前後の較正年代を示しており、出土土器から推定されるVI層の年代値よりも新しい時期を示す。

以上、既往の発掘調査区である第2地区と今回の調査区の発掘調査結果と放射性炭素年代の関係を述べてきた。この検討結果にもとづくと、今回の調査区で得られた最も古い年代グループである縄文時代後期後葉～晩期後葉の試料は、第2地区的基本層序のV層およびIV層の上面付近を除く層準に、年代的には対比されると考えられる。なお、縄文時代後期後葉～晩期後葉の試料は、東区・第13-5層・土砂流堆積物の試料No.2、西区・第13-9層・土壤化層の試料No.11、西区・第13-13層・土砂流堆積物の試料No.12、西区・第13-18層・土砂流堆積物の試料No.13の4試料である。また、弥生時代後期の年代を示した西区・第11-1層・土壤化層の試料No.9については、第2遺構面を構成するIV層上面付近と年代的に対比される可能性がある。

第2地区では、弥生時代後期～古代末頃の遺構が検出されるIV層上面の第2遺構面を被覆して、淘汰不良の砂礫混じりの泥層を主体とする中世中頃の遺物を包含するIII層が、層厚0.4～0.8m程度堆積する。今回の調査区で得られた年代値を参照すると、平安時代～鎌倉時代の年代を示した試料は、第2

地区的Ⅲ層と年代的に対比されると考えられる。平安時代～鎌倉時代の年代グループの試料は、東区・第11-1層・208土器溜りの試料No.1、西区・第8層（上位層）・舌状地形堆積物の試料No.3、西区・第9-2層（図23）・土壤化層の試料No.6、西区・第8層（上位層）・舌状地形堆積物の試料No.4、西区・第8層（下位層）・舌状地形堆積物の試料No.5、西区・第10-1層・作土層の試料No.7、西区・第11-1層・土砂流堆積物の試料No.10、西区・第10-2層・客土層の試料No.8である。

2) 尾山遺跡

尾山遺跡の基本層序についてみると、現地表面下3.0～2.5m前後の層準では、縄文時代後期中葉の第7a層、縄文時代晚期～弥生時代前期の第6a層が累重する（後川編、2022）。今回の調査区で得られた年代値を参照すると、最も古い年代グループである縄文時代後期後葉～晚期後葉の試料は、第7a層堆積後以降から第6a層の形成段階に対比される。

また、弥生時代後期の年代グループは、年代的に弥生時代後期～古墳時代前期の第4層に対比される。平安時代～鎌倉時代の年代グループについては、古墳時代前期～中期の第3-2b層の上部に堆積する13世紀以降の泥層の第3-2a層と13～14世紀代の第3-1b層との対比が考えられる。

（4）越谷遺跡と尾山遺跡の層序と堆積環境変遷

越谷遺跡の第2地区（大塚編、1997）と尾山遺跡（後川編、2022）の基本層序をふまえると、両遺跡がのる冲積錐もしくは小規模扇状地の斜面では、考古遺物による堆積年代で縄文時代後期前葉～中葉に、土砂流出が静穏化した可能性が捉えられる。当該期の地形面上では、堆積環境の安定化と地表での土壌発達の進行が継続する期間が存在したと推定される。尾山遺跡では、縄文時代後期以降から弥生時代前期頃まで、顕著な土砂流出は認められない。一方で、越谷遺跡では、縄文時代後期前葉以降のある段階に、開析谷の埋積が進行した状況が発掘調査結果から確認できる。埋積された開析谷の上面に位置する第2地区の第2遺構面では、弥生時代後期～古代末頃の遺構が検出されている。よって、開析谷の埋積は、弥生時代後期には既に終息傾向に転じていたと認識されるが、埋積時期の詳細については現状で不明な点が多い。第2地区で、弥生時代後期～古代の第2遺構面を被覆して中世の第1遺構面が形成されている状況から、越谷遺跡では、弥生時代後期以降も何らかの土砂流出の影響を受けていた可能性がうかがえる。弥生時代前期以降の断続的な土砂流出については、尾山遺跡でも確認できる。ただし、尾山遺跡では、古墳時代前期以降から古代もしくは中世前半にかけて、土砂流出がいったん静穏化した可能性がある。越谷遺跡の第2地区のIV層（第2遺構面）とⅢ層（第1遺構面）で検出された遺構・遺物をふまえると、越谷遺跡では、弥生時代後期以前のある段階から中世中頃もしくは後半以前のある段階まで、背後の開析谷からの土砂流出が比較的少なかった時期が存在した可能性がうかがえる。

以上、本報告では、今回実施した放射性炭素年代と、近傍の既往の発掘調査で得られた層序との関係に関する概略的な検討を試みた。越谷遺跡から尾山遺跡にかけての冲積錐もしくは小規模扇状地の斜面については、今後、より詳細な地質層序や地形発達史の検討を行っていく必要がある。

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadidze・辻 康男

<引用・参考文献>

- 後川恵太郎編『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』(公財)大阪府文化財センター、152p. 2022年
- Bronk Ramsey,C.「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」『Radiocarbon』51(1) 337-360p. 2009年
- 橋中光輔・関西縄文文化研究会編「西日本縄文時代における遺跡タイプ別分析の実践と展開」『関西縄文時代研究の新展開 松尾洋次郎さん追悼論集』関西縄文文化研究会、33-49p. 2012年
- 春成秀爾・小林謙一・坂本 稔・今村峯雄・尾崎大真・藤尾慎一郎・西本豊弘「古墳出現期の炭素14年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』国立歴史民俗博物館、163、133-176p. 2011年
- 今村峯雄・設楽博己「炭素14年の記録から見た自然環境—弥生中期—」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『弥生時代の考古学 多様化する弥生分析』同成社、48-69p. 2011年
- 小林謙一『縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—』同成社、263p. 2017年
- 児玉幸多編『標準日本史年表』吉川弘文館、66p. 2018年
- 森岡秀人・三好 玄・田中元浩総括 古代学研究会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房、335-398p. 2016年
- 中村俊夫「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編『日本先史時代の14C年代』日本第四紀学会、3-20p. 2000年
- 岡田憲一「関西縄文集落の一時的景観と時間的累積—墓地の分析から矢野健一氏の批判に答える—」関西縄文文化研究会編『関西縄文時代研究の新展開: 松尾洋次郎さん追悼論集』関西縄文文化研究会、13-32p. 2012年
- 大塚 隆編『越谷遺跡他発掘調査報告書: 伝代宵小寺從墓・源吾山古墳群』名神高速道路内遺跡調査会、78p. 1997年
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, p.E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capello, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. 「The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP).」『Radiocarbon』62(4) doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020) 725-757p. 2020年
- 若林邦彦「近畿地方弥生時代諸土器様式の歴年代—石川県八日市地方遺跡の研究成果との対比—」同志社大学考古学研究室編『同志社大学考古学シリーズXII 実証の考古学 松藤和人先生退職記念論文集』同志社大学考古学研究室、119-129p. 2018年

第7章 総括

前章までで、東区・西区の発掘調査成果及び自然科学分析の成果について報告してきた。本章では、越谷遺跡の地形環境変遷と土地利用について時代毎に報告し、総括したい。

第1節 越谷遺跡の時期別消長

ここでは、今回調査のみでは不足する情報を、名神高速道路拡幅工事における前回調査¹⁾や、隣接する尾山遺跡の令和2・3年度調査²⁾や令和4年度調査³⁾において検出された、遺構と出土遺物についても加え、地形環境の変遷と土地利用について、まとめておきたい。

縄文時代後期

今回調査では、縄文時代の遺構と遺物については、確認できなかった。

前回調査の第2地区第3遺構面の黒褐色粘土層（包含層）からは、縄文時代後期前葉の北白川上層式1・2期の壺・浅鉢・深鉢が、標高約17.5m付近で出土している。縄文時代の包含層があるとするか、第13層の下の次の層に存在していることになるが、今回は確認できなかった。

周辺では、尾山遺跡の微高地南側7区谷地形において、縄文時代後期前葉の縁帶文土器や後期中葉の深鉢等が、標高約9m付近から出土している。広瀬遺跡⁴⁾では、縄文時代後期中葉の元住吉山II式の浅鉢・深鉢が、標高9.6m付近で出土している。

縄文時代後期前葉頃から、淀川及びその支流、あるいはこれらを含む河跡湖や潟湖等の河畔に近い所では、居住痕跡は未だ見つかってはいないが、漁撈活動等に伴う遺物の出土が確認されている。

縄文時代晩期・弥生時代前期～中期

突帯文土器・弥生時代前期～中期の遺構・遺物については、今回調査も含め越谷遺跡では発見していない。

段丘下の東側に隣接する尾山遺跡の令和2・3年度調査では、突帯文土器・弥生時代前期～中期の遺物が出土し、水田遺構（第5a層）や遺構も検出している。

弥生時代後期～古墳時代前期初頭

今回調査においても混入はあるが、東区や西区の第2層～第11層の包含層において、この時期の遺物の小片が出土している。図化したものは少ないが、西区第2層で弥生時代後期後半の177壺底部がある。

前回調査の第2地区第2遺構面では、標高18.7m付近において検出された、15基余りの土坑群の内の土坑1（長さ2.3×幅0.7×深さ0.4m）と土坑2（長さ3.4×幅1～1.4×深さ0.8m）から、墓壙かは不明であるが、弥生時代後期の土器（弥生時代後期後半古段階～中段階）¹⁰⁾が出土している。しかし、検出された2基の土坑以外に、弥生時代～古墳時代前期の遺構は検出されていない。

尾山遺跡の令和2・3年度調査では、2面（第4-2a層・第4-1a層）の水田遺構の他に、微高地上で

は、五角形に見える大型竪穴建物（直径約11m）が、標高9.5m付近で検出され、遺物（弥生時代後期後半古段階～中段階）が出土している。

古墳時代前期～古墳時代中期

この時期の越谷遺跡の遺構・遺物は、前回調査においても今回調査でも確認できず、尾山遺跡の令和2・3年度調査で、わずかに遺物が出土している以外、集落の動態については不明である。

古墳時代後期～奈良時代前期

この時期の遺構・遺物は、決して多くはない。越谷遺跡や尾山遺跡では古墳時代後期の埴輪破片が包含層等から出土しているが、遺構は検出していない。

越谷遺跡の周辺に所在していたと考えられる古墳については、その所在ははっきりしないが、尾山遺跡の令和2・3年度調査でも円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪が出土し、今回調査も157朝顔形埴輪と158円筒埴輪が出土している。古墳時代後期の川西編年V期にあたる遺物と考えられる⁵⁾。埴輪の出土範囲は、当然ながら段丘面上の越谷遺跡や尾山遺跡西側低位段丘上の11・12区での出土量が多く、土砂流によって流されたか、中世以降の土地開発で削平された可能性が高い。

尾山遺跡西側の低位段丘上で発見された御所池瓦窯跡1号窯は、飛鳥寺東南禅院・飛鳥池瓦窯跡と同範瓦を出す窯で、梶原寺・梶原瓦窯跡、郡家今城遺跡とも同範瓦が存在する。飛鳥寺東南禅院に住まいした道昭の教化作善活動を行った淀川西岸地域で、同範瓦の出土することが知られる⁶⁾。窯構造は、ロストル式平窯に通じる過渡的な窯である。1号窯の操業期間は、飛鳥III・IV型式から平城II～III型式頃で、7世紀後葉～8世紀前葉と考えられる。

奈良時代後期～鎌倉時代前期

長岡京期頃から平安時代前期については、この時期の遺構は確認できていないが、今回調査の東区第2-6層で、8世紀末～9世紀初めの011土師器丸底甕や須恵器杯身が、西区第11-1層で、9世紀前半～10世紀前半の260摂津型土師器甕が出土している。

平安時代中期から後期については、今回調査では、東区第11-1層の208土器溜りで、10世紀後半の摂津型148土師器甕、11世紀末～12世紀前半の149東播系須恵器甕、10世紀後半～11世紀中頃の150越州窯系青磁鉢、12世紀中頃～後半の151・152福建省系白磁碗が、西区第8層舌状地形堆積物で、10世紀後半のII-2型式213三河型甕、12世紀後葉の楠葉型II-3型式214・215瓦器碗が、東区第2-6層で、12世紀中頃～後半の012龍泉窯系青磁皿が、西区第2-1～9層で、11世紀後半～12世紀前半の178広東省・福建省系白磁碗が、西区第2-10層で、12世紀中葉の楠葉型II-2型式180瓦器碗が出土している。

平安時代末～鎌倉時代前期については、今回調査では、東区第11-1層の208土器溜りで、13世紀前葉の楠葉型III-2型式137・138瓦器碗と、13世紀初～前半の153龍泉窯系青磁碗が出土している。この時期の遺構は検出されておらず、この時期の尾山遺跡でも確実な遺構は無く、両遺跡ともに出土遺物量も極めて少ない。

鎌倉時代中期～南北朝時代

鎌倉時代中期から南北朝時代になると、これまでのような遺物のみの出土ではなく、遺構・遺物とともに増加する。

今回調査においては、東区第2遺構面では101溝、102・105土坑、103・104耕作穴、106畦等が、東区第3遺構面では201溝、202土坑、203・204耕作穴、207谷状地、208土器溜り等の遺構が、西区の舌状地形堆積物（第8層）、西区第2遺構面では201・202窪、203～206柱穴、第10-2客土層が、西区第3遺構面では第11-1層包含層がある。東区第3遺構面208土器溜りは、最終時期が6C段階の13世紀中葉頃に、西区舌状地形堆積物（第8層）は最終時期が6C段階に近い7A段階の13世紀後葉頃と考えられた。

前回調査では、第2地区第1遺構面の包含層と土坑1・2・19・20・23～25が、第2遺構面の井戸1がある。包含層では多くの土師器皿とともに、13世紀前半～中頃の福建省系白磁四耳壺（III-2類）、13世紀後半の備後系吉備型土師器椀⁷が出土している。比較的出土土器の量が多かった土坑2では、多くの13世紀後葉の7A段階の土師器皿と、13世紀中頃の備後系吉備型土師器椀、13世紀後半～14世紀初頭の東播系須恵器口鉢（III-3類）、13世紀中葉の楕葉型III-3型式の瓦器椀、丸瓦が出土している。第2遺構面の井戸1では、13世紀後葉の7A段階の土師器皿と、13世紀初～前半の龍泉窯系片彫り蓮華文青磁碗（IIa類）等が出土している。他の遺構についても、出土土器の時期は7A段階で大きく変わらない。

尾山遺跡の令和2・3年度調査では、2区の中央部が近世には削平されていたため、深い遺構以外は残存していない。このため、遺構が残るのは1・2区の東側水田畔と西側の山側のみである。1区・2区の遺構には、167池泉と一連の装置である211平坦面、131・132井戸、それに掘立柱建物1と掘立柱建物3とされた2棟がある。3区の271土坑がある。大部分の遺構の時期は、図8の平尾編年の6C～7A～7C段階（1230～1350年頃）の鎌倉時代中期～南北朝時代の範囲で、一部、8A段階（1350～1380年頃）の南北朝合体の頃までの土器を含む。

図34は、昭和62年測量島本町全図を原図に、この図の等高線と主要な道路・鉄道に、昭和5年測量図の河道と池を追加し、空中写真判読による埋没旧河道（暗色網掛）と沖積リッジ（明色網掛）⁸を重ねた図である。図35は、昭和62年測量島本町全図を原図に、名神高速道路建設以前の昭和34年測量奈良文化財研究所測図⁹を重ね、調査地が所在する越谷周辺の棚田、水路・池、小字名、調査区、水路名等を加えた図である。

図35より、越谷川の源流部を見てみる。小字「越谷」の谷を流れる越谷川の水は、竜王石山東麓に源をもち、東側に約600m流れ、現在は一旦、溜池である御所池に貯水される。この間、谷が大きく開けた標高40m付近から標高15m付近までの、延長約350m、谷口で幅約120mに広がる範囲に、谷水田がみられた。谷が大きく開けた標高40m付近の北側には、谷水田にとって大切な、水温調節の機能をもつ越谷池がある。稻は水が必要な時期に不足すると、障害を受けやすい植物であるとともに、日中の水温が25°Cを下ると、出穗の遅れや不稔の発生が生じるといわれる¹⁰。谷水田にとって溜池は、重要な施設である。この越谷池に流入する水路は、他にも図34からは、小字「仙人裾」北西の中谷からも越谷池に流入している。御所池に貯水された水は、水量を調整して、東進していた越谷川を90°南に折れ曲がり、越谷を横断して小字「馬ケ背」から小字「バンド山」へと続く細尾根を横断する。



図 34. 島本町内等高線図



© 島本町都市計画図 2 (1:5000) および島本町全図その7 (1:2500) を源図に
奈良国立文化財研究所「水無瀬殿」『奈良国立文化財研究所年報』(1960年) 添付図を加筆作成した。

図 35. 小字「越谷」周辺詳細図

この間の延長約130m、基底幅16～20m、上幅5～7m、高さは西側が1～2mで東側は4～5mの人工堤防を造り、この上を灌漑水路と道としている。御所池が作られる以前の越谷川は、真っすぐ東側に流れていたようで、その旧河道痕跡が水田区画として残っている。尾山遺跡の令和2・3年度調査の11・12区で確認された埋没旧流路は、越谷川の旧流路痕跡であって、土砂流堆積物の高まり（AR；沖積リッジ）や谷地形（AC；旧流路）として痕跡を残す。図34の沖積リッジAR（A）は、越谷川が造った大規模な沖積リッジである。人工堤防を南に過ぎ、小字「バンド山」の尾根を越えたところで、竜王石山と丸岡山の間に源流とする越谷川支流が合流する。流路はさらに御所池から約270m南に延びた小字「柳原」、丸岡山と妙見山の間に桜井谷を源流とする既存の八幡川に合流して東に流れ、さらに柳川が分離して、高浜方面に流れる。この溜池や水路網による灌漑範囲は、図2の北から小字の「六条殿」「御所内」「越谷」「御所内」「バンド山」「御所ノ前」「平井垣内」「南山田」「五反田」「ミドロ」で、「尾山」は南側傾斜の地形であることから、微高地を含む丘陵側の一部と考えられる。

この開発は、今回の東区第3遺構面の207谷状地（開析谷）を埋めているのが、第11-1層堆積後であることから、208土器溜り以降の時期であることは確実である。さらに、西区第2遺構面の客土層第10-2層に含まれる遺物の時期以降である。その時期とは、6C段階の13世紀中葉以降で、開発領主¹¹⁾による開発であったと考えられる。

しかし、14世紀後半には遺物量も減り、尾山遺跡の微高地上の遺構群も消滅する。

室町時代以降

室町時代になると、越谷遺跡では、出土遺物も土師器の小皿が少量出土する程度で、殆ど出土しなくなる。その後の越谷遺跡の景観は、畑や水田などの耕作地となったようで、洪水による堆積は時折みられるが、近世以降大きく変わらなかったようである。

<註・引用文献>

- 1) 大塚 隆・川端博明ほか『越谷遺跡他発掘調査報告書-伝持宵待從墓・源吾山古墳群-』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2集、1997年
- 2) 後川恵太郎『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第43集・(公財)大阪府文化財センター調査報告書第316集、2022年
- 3) 木村友紀・辻 広志・日暮喜勝重ほか『島本町文化財調査報告書-尾山遺跡発掘調査報告書-』島本町文化財調査報告書第48集、2022年
- 4) 久保直子・木村友紀・大西晃靖『大藪浄水場送水施設整備(土木・建築)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-広瀬遺跡発掘調査報告書-』島本町文化財調査報告書第24集、2013年
- 5) 川西宏幸『円筒埴輪論義』『考古学雑誌』64-2、1978年
- 6) 綱 伸也『畿内の古代寺院と道昭』『古代山崎の架橋と造寺』2019年
奈良文化財研究所編『飛鳥池遺跡発掘調査報告書』奈良文化財研究所学報第71冊、2021年
- 7) 鈴木康之『土師質土器の編年』『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書V』広島県教育委員会、1996年
- 8) 辻 康男『広瀬遺跡の自然科学分析』島本町文化財調査報告書第24集、21-26p、2013年
- 9) 森 薫『水無瀬離宮跡並に伝桜井御所跡の調査』『奈良国立文化財研究所年報』1960年
- 10) 角田公正『水温と稻の生育・収量との関係に関する実験的研究』『農業技術研究所報告』11号、農林省農業技術研究所、75-

174p、1964年

11) 戸田芳美『日本領主制成立史の研究』岩波書店、1967年

大山喬平『日本中世農村史の研究』岩波書店、1978年

第2節 舌状地形堆積物の堆積時期

1. 放射性炭素年代測定による堆積年代

舌状地形堆積物が堆積した時期については、堆積物である第8層より出土した3点の炭化物について加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施し、調査成果を第6章に報告した。

この結果、西区西壁第8層上位層より採取したNo.3は、 2σ の較正年代が1223～1273 cal AD、西区西壁第8層上位層より採取したNo.4は、 2σ の較正年代が1154～1220 cal AD、西区東壁第8層下位層より採取したNo.5は、 2σ の較正年代が1157～1230 cal ADであった。つまり、第8層で採取した炭化物試料は、No.4・5が12世紀後半～13世紀前葉の2点、No.3が13世紀中葉の1点であったということである。ここでは、最も新しい13世紀中葉が、第8層の堆積年代に近いことが考えられる。

深掘り調査最下層の土石流・土砂流堆積物である第13層は、東区西壁第13-5層より採取したNo.2は、 2σ の較正年代が934～830 cal BC、西区東壁第13-9層より採取したNo.11は、 2σ の較正年代が1465～1385 cal BC、西区東壁第13-13層より採取したNo.12は、 2σ の較正年代が1438～1369 cal BC、西区東壁第3-18層より採取したNo.13は、 2σ の較正年代が1407～1260 cal BCであった。この様に、第13層で採取した炭化物試料は、No.11～13が縄文時代後期後葉～晚期前葉、No.2が縄文時代晚期中葉～後葉に相当し、前回調査¹⁾の成果とも一致する。

第8層の下層で第13層までの第9～11層については、西区東壁第9-3層より採取したNo.6は、 2σ の較正年代が1225～1279 cal AD、西区東壁第10-1層より採取したNo.7は、 2σ の較正年代が1167～1261 cal AD、西区東壁第10-2層（客土層）より採取したNo.8は、 2σ の較正年代が1164～1233 cal AD、西区東壁第11-1層より採取したNo.9は、 2σ の較正年代が46 cal BC～71 cal AD、西区東壁第11-2層より採取したNo.10は、 2σ の較正年代が1210～1269 cal ADであった。この内、No.9は弥生時代後期に相当し、前回調査第2遺構面の炭化物が混入したと考えられる。No.7とNo.8は、12世紀後半～13世紀前半に相当し、No.6とNo.10は、13世紀前葉～13世紀中葉に相当する。ここでも、新しい13世紀中葉が、第9～11層の堆積年代に近いことが考えられる。

2. 出土土器による堆積年代

次に舌状地形堆積物の第8層より出土した遺物、特に消耗の早い土師器皿・椀について、図8の平尾編年²⁾を用いてその位置付けを行う。

図36は、土師器皿法量分布図である。縦2段の内の左段は、平尾編年の6A～8A段階（1170～1380年頃）の標識資料の法量分布図である。器種については、凡例に記した。縦2段の内の右段は、越谷遺跡の前回調査（土坑1・2）と今回調査（東区208土器溜り、西区舌状地形堆積物）、尾山遺跡の令和2・3年度調査³⁾で検出した主要な遺構（167池泉、211平坦面、271土坑）において出土した、土師器皿に瓦器椀・瓦器皿も含めて法量分布図を作成した。対象個体数は、各右下に記載した。

①～③は尾山遺跡の令和2・3年度調査の遺構で、①は167池泉、②は211平坦面、③は271土坑である。⑤・⑥は越谷遺跡の前回調査の遺構で、第1遺構面の土器集積土坑である⑤は土坑1、⑥は土坑2である。④・⑦は越谷遺跡の今回調査の遺構で、④は東区208土器溜り、⑦は西区舌状地形堆積物である。

⑦舌状地形堆積物出土遺物は、N系列の口径が6～13cmで、6cm、7.5～9cm、10cm、11～13cm

平尾編年 6A～8A段階の土師器皿法量分布図

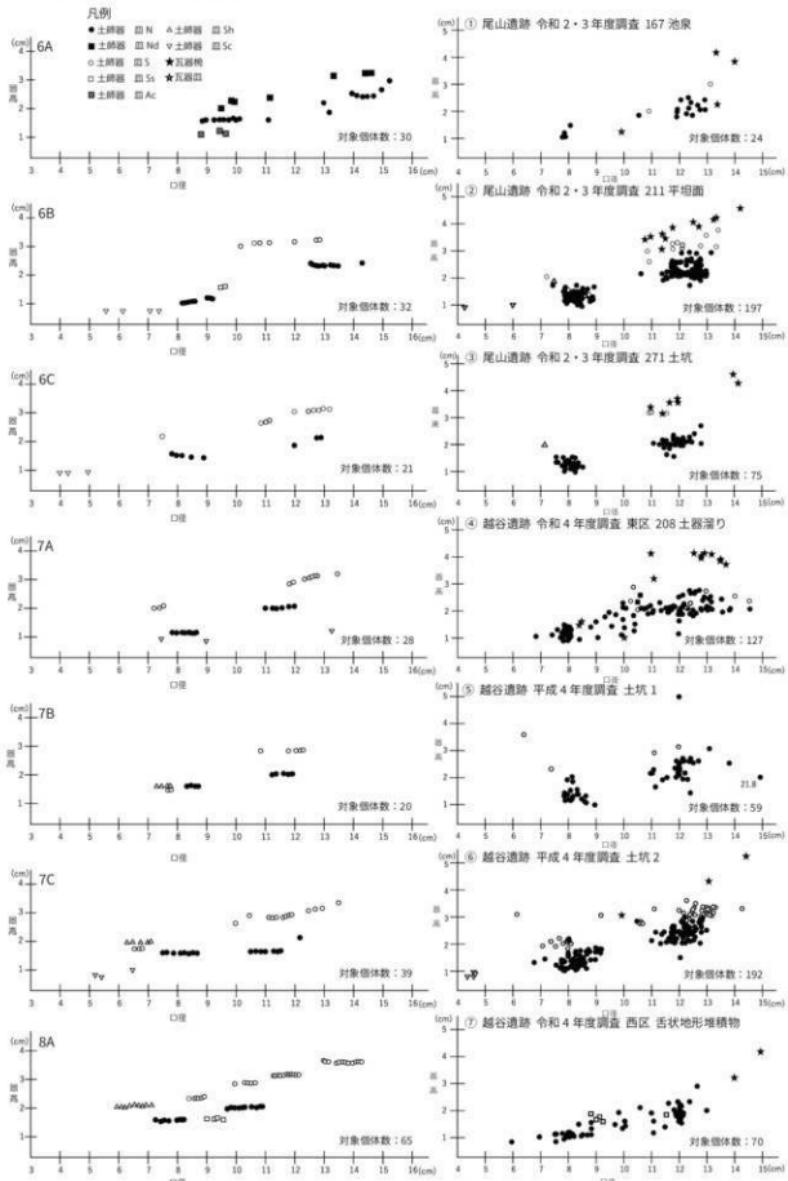


図 36. 土師器皿法量分布図

に集積がみられ、11～12 cmと 7.5～9 cm にピークがみられる。これを平尾編年と見比べると、今回出土品にへそ皿 (Sh) が無いこと、ピークと口径の範囲が、平尾編年の 7A 段階とほぼ一致することが明らかである。

前回調査第 1 遺構面の⑤土坑 1、⑥土坑 2 とも、ほぼ重なっていることが見て取れる。⑦舌状地形堆積物の器高がやや低いのは、前回調査の土坑 1・土坑 2 に皿 S が多く含まれるためであるが、舌状地形堆積物にはこれほどの皿 S は含まれていない。土坑 1・土坑 2 が、土器集積土坑という性格に関わる現象であろうか。第 2 遺構面の井戸 1 については、個体数が少なく、法量分布図を作成していないが、口径が 12～13 cm にあり、6C 段階に近い古い様相を持つ。

次に今回調査の④東区 208 土器溜りを見てみると、N 系列の口径が 6.8～14.5 cm と横に長く延びるが、6.8～8.4 cm、8.5～10.4 cm、10.5～14.5 cm に集積がみられ、出土数が多い部分は 7.6～8.4 cm と 12～13 cm にピークがみられる。これを平尾編年と見比べると、今回出土品にへそ皿 (Sh) が無いこと、ピークと口径の範囲が、平尾編年の 6C 段階とほぼ一致する。これを⑦舌状地形堆積物と比べると、④東区 208 土器溜りの方が、口径 12 cm を超えるものが多く、7A 段階とは様相を異にしている。

尾山遺跡の令和 2・3 年度調査の 3 遺構と比較してみると、これらの遺構は、いずれも時間幅をもつ遺構であるが、その傾向を窺うことはできる。① 167 池泉では N 系列の 7.8～8.1 cm、12～13 cm に集積が、② 211 平坦面では N 系列の 7.8～9 cm、11.2～13 cm に集積が見られ、6C 段階に始まる遺構であることを示す。③ 271 土坑は、① 167 池泉や② 211 平坦面と見比べても、ピークの範囲が 0.5 cm ほど小さくなっているのが分かる。これらは 7A 段階に始まる遺構と判断される。この③ 271 土坑は、へそ皿 (Sh) を含むもので、その点が⑦舌状地形堆積物とは異なるが、ほぼ同時期と考えられる。へそ皿 (Sh) は、この 7A 段階に始まると思われる器種である。この差が 7A 段階内での時間差なのか、遺構の性格によるものかは、不明である。

これまで述べてきたように、舌状地形堆積物は、越谷遺跡の今回調査東区 208 土器溜りの 6C 段階よりも新しく、前回調査第 1 遺構面と同じ 7A 段階の遺物群であること、尾山遺跡の令和 2・3 年度調査の微高地上遺構では、167 池泉や 211 平坦面よりも、やや遅れる 271 土坑に近い時期の遺構であると指摘することができた。これを略年代でいうと、13 世紀後葉の 1260～1290 年頃となる。

3. 舌状地形堆積物（第 8 層）の堆積年代

この様に舌状地形堆積物（第 8 層）の堆積年代を、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定による、No.3 試料の 2σ の較正年代値 1223～1273 cal AD か、平尾編年の 7A 段階の 1260～1290 年頃と絞ることができた。いずれにしても土石流・土砂流が発生したのは、鎌倉時代中期の 13 世紀後葉以降での出来事であったと結論できそうである。

<註・引用文献>

- 1) 大塚 隆・川端博明ほか『越谷遺跡他発掘調査報告書－伝宵小侍從墓・源吾山古墳群－』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第 2 集、1997 年
- 2) 平尾政幸「土師器再考」『史洛 研究紀要』第 12 号、(公財) 京都市埋蔵文化財研究所、2019 年
- 3) 後川恵太郎『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第 43 集・(公財) 大阪府文化財センター調査報告書第 316 集、2022 年

第3節 舌状地形堆積物（第8層）と土石流・土砂流堆積物の成因

1. 土石流・土砂流の成因

今回の調査において、東区と西区の壁面に残されていた土石流・土砂流堆積物の痕跡は、舌状地形堆積物である第8層ばかりではない。括弧書きの土壤化層（a'）も含めると、西区では、下層から第13層、第11-2層、第9-4層、（第9-3層）、第9-1層、第8層、（第3層）、第2-10層、第2-8層、第2-5層が少なくとも該当する。この内、第13層は繩文時代後期後葉～晩期前葉、繩文時代晩期中葉～後葉に相当する。第11-2層・第9-4層・（第9-3層）・第9-1層は、6C段階の鎌倉時代中期の13世紀中葉に相当する。第8層は前節で検討したように、7A段階の鎌倉時代中期の13世紀後葉に相当する。（第3層）は土壤化（a'）が進む土砂流堆積物で、中世と考えられる。第2-10層は、戦国期の16世紀末頃の堆積と考えられる。第2-8層と第2-5層については、江戸時代の土砂流と考えられる。

これまでの研究による土石流・土砂流の成因は、大雨や地震時などによって、渓流や山腹斜面等の堆積物が不安定化し、渦流として流れ下る現象とされる。流下過程では、基盤岩の一部、樹木、さらに堆積物（岩屑、作土層、包含層）などを、根こそぎ巻き込むといわれる。以下には、本町に係る特徴的な地質、地震調査研究の成果、関連する文献史料を掲げ、舌状地形堆積物の堆積時期を考古学以外の分野からも探ってみる。

なお、土石流・土砂流の成因となった、大雨や地震の記録は、主に貴族や僧侶の日記であり、京都での記載を中心としていて、他国の記載はほぼ無いのが実状であるが、摂津に係るものを中心に分析してみた。

2. 周辺の地質構造と堆積物^{1,2)}

本町を含む西南日本内帯の東部は、大きく見て三つの地質構造区に分かれている。北から飛騨変成岩類の分布する飛騨帯、その南には非変成の古生層を主とした花崗岩に貫かれていた丹波帯、さらにその南に花崗岩と古生層の変成岩が分布する領家帯の3構造区が帶状に分布している。

本町は南東部の市街地の低地部、桜井一山崎の丘陵部、水無瀬川上流尺代一大沢の山地部からなっている。丹波層群の古生層からなる基盤岩類が山地部に分布し、丘陵部には大阪層群および崖錐が見られる。水無瀬川両岸には、小規模な河岸段丘が分布する。低地部は小河川が作る扇状地と沖積層からなり、淀川河岸では淀川の堆積物が厚く堆積する。

丹波層群（古生層）には、出灰層と高槻層とが分布し、この二つの地層の境界は出灰層の輝緑凝灰岩が上限と考えられる。出灰層は积迦岳一尺代一大山崎間に分布し、神内断層によって東西に二分される。岩相は主として頁岩、砂岩、およびそれらの互層からなり、数枚のチャート、輝緑凝灰岩を伴っている。高槻層は神内断層以西では水無瀬川の南北約1.7kmにわたり分布し、その南限は天王山断層によりたたれています。神内断層以西の本層は桜井一原をとおる向斜構造をなしているが、その南翼部は狭い。本町に分布する高槻層は砂岩および砂岩の互層からなり頁岩の発達は少ない。またチャート・輝緑凝灰岩の発達は認められない。これらの古生層は一般に東西性ないし北北西一南南東の走向を示すが、傾斜は中角度の北傾斜を示す。しかしこれもすぐ南の背斜構造により南傾斜に戻る。神内断層により西侧の古生層は東側の古生層に対し高角度で衝上する。神内断層東部は山崎、東大寺の北で天王山断層によって中角度で大阪層群の上に衝上する。

大阪層群は、山崎、桜井北の丘陵地域に分布する。岩相は粘土、シルト、砂、礫層で、僅かに炭化物を含むシルト層や非連続な火山灰層がある。砂層は一般に中粒で、小礫を含むことがある。砂層の底面にはしばしば流痕や偽層が観察される。粘土層は淡水～汽水性で、その中から淡水性の二枚貝やヒシの化石が発見されることがある。天王山トンネルの崖の粘土層中には5～7cmの厚さの非連続の白っぽい火山灰層が見られる。基底部の礫層は水無瀬採石場および神内西に見られ、ここでは海拔120～130mの山頂部に分布し、古生層を不整合に被覆している。礫種は砂岩、チャートが多い。

河岸段丘堆積物は、水無瀬川に沿って小分布する。厚さは4m以下で、礫種は古生層の砂岩、チャートの亜角礫である。

崖錐堆積物は山地部と丘陵部の接する部分に分布し、古生層、大阪層群を被覆し、さらにそれは神内断層、天王山断層をも被覆している。崖錐の基質の団結度は高く、砂岩、チャートの角礫が含まれる。

岩脈は小規模の貫入として見られる。糸迦岳頂上、尺代の南西、川久保に分布している。厚さは一般に1m前後である。角閃石玢岩からなり暗灰色で細粒緻密な岩石である。風化すると灰白色ないし淡褐色を呈する。

近畿の地形は、北西区、中央区、南区の三つに区分できる。本町は北西区の東南端が中央区に接する境に位置するので、北側の山地（西山山地を構成するポンポン山山地と天王山山地）、南部の淀川低地、さらに両者の間に幅狭く介在する丘陵台地の三つに分けることができる。こうした地形の配列は、隆起と沈降が大きな褶曲運動とそれに伴う断層の結果生じたものとされている。北西区は中国高原の延長として一般に山であるが、準平原状地形であるため平均高度は標高600m前後で、とくに高峻な山地はない。

北摂山地の東を占めるポンポン山山地は、東側を西山丘陵に臨む急傾斜面によって限られ、西側は安威川とその支流の仁科川に及ぶ。周りの天王山山地等に比べ、明瞭な線で一段高くなっている。山地の大部分は、古生層の砂岩・頁岩やチャートからなるが、中央を北から南へ流れる芥川の谷で東西に分かれれる。

本町北部はこのポンポン山山地の東部にあたるが、小塩山（標高641m）、ポンポン山（標高678.9m）から糸迦岳（標高631.4m）にかけて、定高性のある山陵が南北に連なり、本町域における最高所となっている。糸迦岳南方の谷底平野は、勾配が緩やかで水田に利用されている。

天王山山地はポンポン山山地の東南側に、一段低く階段状に突き出した山地で、高度が標高250～300mの定高性が極めて著しい。淀川低地と京都盆地に対して、直線的な比高200～250mの急斜面で臨んでいる。構成する地質は、古生層の砂岩、頁岩である。

天王山山地の西側と南側の山麓には、丘陵地形が分布する。天王山西側では善峰川の南、小畠川を東の分布限界として、洪積段丘中位面と下位面が広く分布している。これらは西山丘陵と呼ばれ、角礫・円礫が上にのり、下部に大阪層群の砂・粘土・シルトの互層が見られ、低地との間は明瞭な段丘崖が認められる。この西山丘陵に対比して、天王山山地南側の島本町域では丘陵・台地は局的にしか見られず、発達は極めて幅狭い範囲に限定される。

3. 調査地周辺の断層と被害地震

次に本町周辺の断層を、図37により見てみる。

神内断層³³は、神内から尺代を通るほぼ南北性の断層で、地形的にもよく現れている。地蔵山宅地

造成地の西端崖の露頭では古生層が著しく破碎され、数本の N20°～40°W、50°～80°W を示す断層と数帯の断層粘土が見られる。とくに頁岩、輝緑凝灰岩の破碎は著しく頁岩は黒色粘土化し、凝灰岩は緑色粘土化している。ここでは砂岩、頁岩、凝灰岩層が露岩し、各岩層の境界部は断層による滑り面を持っている。

天王山断層は、名神高速道路沿に観察される。水無瀬川東方では、名神高速道路北側の採石場跡で観察される。ここでは断層の北側にある高槻層が N50°～60°E の走向で、南に 60°～70° の急傾斜をもつ断層によって大阪層群の上に衝上している。古生層の砂岩は約 4m の幅で著しく破碎され、黒色粘土化、角礫化されている。これと接する大阪層群は、背斜構造をなし、背斜の南翼が西側の崖で急傾斜しているのが観察される。この断層の西の延長部は、水無瀬川西方のイロコケ山の中学校用地（現在の町立第二中学校）で観察される。

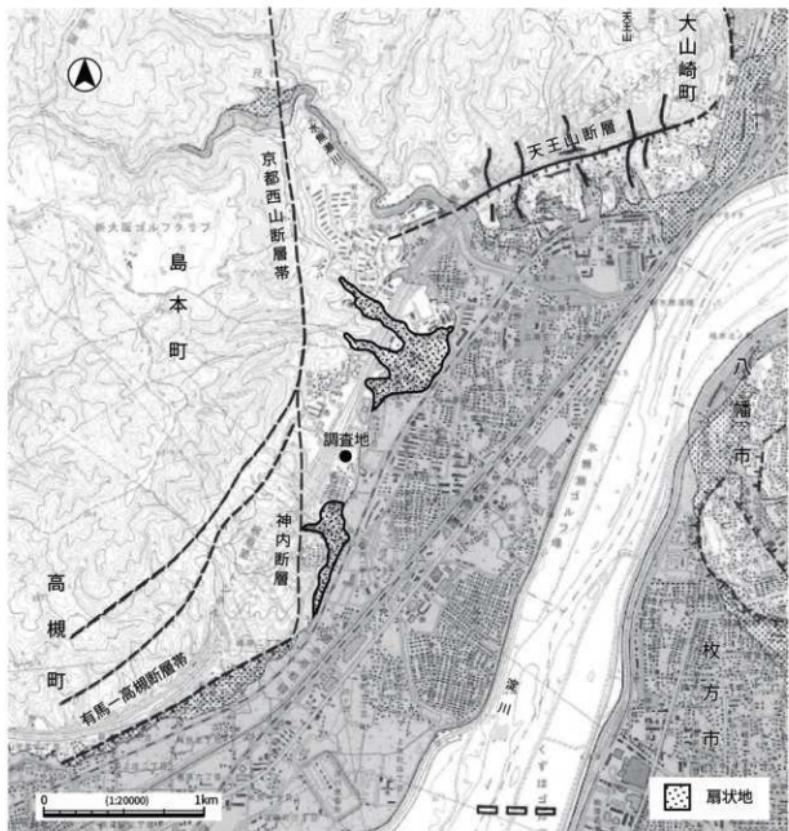


図 37. 島本町周辺の断層図

有馬-高槻断層帯⁴⁾は、北摂山地と大阪平野・六甲山地の境界部にほぼ東北東から西南西に延びる長さ約55kmの活断層帯である。この断層帯は、中・古生代の地層（丹波層群、有馬層群）と白亜紀の花崗岩との境界を、部分的に並走、分岐しながら断続する大小多数の断層からなるが、東部では2つの断層が並走して地溝帯を形成していることが多い。活動度の高い（A～B級）右ずれ北側隆起の逆断層であり、少なくとも東部（宝塚-高槻）では過去3千年間に3回活動しているといわれる。最新の活動は、文禄5年（1596）の文禄伏見地震（慶長伏見地震）であり、そのそれは3m程度であったと推定される。

以下には、山城・摂津地域に被害のあった縄文時代晚期以降の大きな地震を、文献⁵⁾と断層試掘調査の¹⁴C年代試料が整合するものについて、以下に記す。

- ・縄文時代晚期の紀元前1,000年頃の地震※
- ・天長4年（827）【山城】※
- ・天延4年（976）【山城・近江】
- ・元暦2年（1185）【山城・大和・近江・美濃・伯耆】
- ・文安6年（1449）【山城・大和】
- ・天正7年（1579）【摂津】※
- ・文禄5年（1596）「文禄伏見地震」（慶長伏見地震）【畿内全域】※
- ・寛文2年（1662）「寛文地震」【近江・若狭・山城・摂津・大和・河内・和泉・丹後ほか】

※は、有馬-高槻断層による地震。

縄文時代晚期の地震については、放射性炭素年代測定試料No.2（較正年代934～830calBC）の東区西壁第13-5層が、この地震により堆積した可能性がある。第13層の中では第13-4層とともに水平方向に堆積し、最も上層の土石流・土砂流堆積物である。おそらく、東区西壁第13-1～5層が縄文時代晚期の堆積物と考えられる。

天長4年（976）と元暦2年（1185）の地震に該当する堆積層は、今回調査の範囲内では確認できていない。

舌状地形堆積物（第8層）は、前節による西区西壁第8層の放射性炭素年代測定試料No.3（較正年代1223～1273calAD）の結果から、13世紀中葉が堆積年代と考えた。また出土土器からは、平尾編年7A段階の13世紀後葉の1260～1290年頃と考えられた。この時期の京都で記された地震には、寛元2年（1244）、正嘉元年（1257）、正元元年（1259）、文永5年（1268）、弘安11年（1288）、正応5年（1292）、承仁元年（1293）、正安5年（1302）がある。また鴨川の洪水記録には、正嘉2年（1258）、弘安9・10年（1286・1287）、正安5年（1302）等がある。これらの中から堆積時期を決定することはできないが、この内の地震と大雨・洪水のどれかが関わって、舌状地形堆積物（第8層）が堆積したものと推測される。

文安6年（1449）と天正7年（1579）の地震に該当する堆積層は、今回調査の範囲内では確認できていない。なお、天正7年（1579）の地震は、摂津を中心としたものであり、大きな被害が予想されるが、地震に対応する堆積層は確認できなかった。

豊臣秀吉の伏見指月城天守が倒壊したことで知られる、文禄5年（1596）の「文禄伏見地震」（慶長伏見地震）により、西区第3層・東区第3-1層が、堆積した可能性がある。これについては、第3層堆積後の第2-6層出土遺物の年代観から、推測することが可能である。また、この時期は前年の文禄4年

から慶長 20 年（1615）頃まで、毎年のように大雨による洪水が起きており、蓋然性が高い。

寛文 2 年（1662）の「寛文地震」は、近畿全域から三河・駿河・信濃にまで被害が及んだもので、西区第 2-8 層・東区第 2-5 層が、この地震により堆積した可能性がある。この寛文の前の萬治 3 年（1660）から寛文 3 年（1663）頃においても、大雨や洪水が頻発している。

このように、地震と大雨は、土石流・土砂流堆積物にとって大きな成因となっているといえる。

<註・引用参考文献>

- 1) 島本町史編さん委員会編『島本町史』本文篇・史料篇、島本町役場、1975・1976 年
- 2) 宮地良典・楠 利夫・武藏野實・田結庄良昭・井本伸広『京都西南部地域の地質』地域地質研究報告京都（11）第 39 号、独立行政法人産業技術総合研究所・地質調査総合センター、2005 年
- 3) 植村善博『京都盆地西縁の変動地形と第四紀テクトニクス』『立命館地理学』第 2 号、37-56p、1990 年
- 4) 地震調査研究推進本部・地震調査委員会編『有馬-高槻断層帯の評価』2001 年
谷美由起・小松原琢・岡田篤正・野原社「有馬-高槻断層帯・坊島断層の断層露頭」『活断層研究』24、167-173p、2004 年
岡田篤正「天正地震とこれを引き起こした活断層」『活断層研究』35 号、1-13p、2011 年
- 5) 西山昭仁・原田智也「1596 年文禄伏見地震に関する地震像の検討」『京都歴史災害研究』第 23 号、15-28p、2022 年
小松原琢「寛文二年（1662）近江・若狭地震の地震像と被災地区的歴史地理的考察」『京都歴史災害研究』第 5 号、21-38p、2006 年
- 5) 立命館大学歴史都市防災研究所編『京都歴史災害年表』『京都歴史災害研究』第 6 号、2006 年

第4節 調査成果の意義

今回の発掘調査は、東区と西区に分けての小面積の調査であったが、主に中世の遺構と遺物を検出した。今回調査の成果について、簡単にまとめておく。

- ・越谷遺跡では、開析谷の埋積が弥生時代後期後半には収束を見せ始め、その後も土石流・土砂流による埋積を受けていたが、古墳時代後期から古代末には次第に土砂の堆積も静穩化し、中世前期には大規模な土地開発が始まった。
- ・鎌倉時代中期の13世紀中葉以降に始まる土地開発は、客土により開析谷を埋め、棚田を造り、天井川や溜池を造るなどの大規模なものであったと考えられる。開発間もない時期には、今日まで残る舌状地形を残す土石流・土砂流が発生するなど、土砂流災害を何度も受けながらも、耕作は今日まで継続して営まれてきた。

表 6-1. 遺物観察表

地 點 番 号	開 拓 區	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	透徑 台柱 cm	残 存 率	成形調整の特徴	III(内)は復元値	
											胎土 焼成	備考
001	東	表採	軒丸瓦			瓦当径 (15.0)	瓦当厚 3.0	瓦当部 1/3	中扇窓子1+8 複弁8葉蓮華文 模文残存25(復元56)	10YR7/2 灰白	粗	平安時代
002	東	1面 包含層 2-4・5層	土師器	皿	ⅢN 6C-7A	(9.1)	1.3	6.0	口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/5 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	5YR7/6 灰	密	良
003	東	1面 包含層 2-4・5層	土師器	皿	ⅢS 6C	(9.0)			口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/7 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/2 灰白	密	良
004	東	1面 包含層 2-4・5層	土師器	皿	ⅢS 6C	(11.8)			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1/5 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部下部未調整	7.5YR8/3 浅黄橙	密	良
005	東	1面 包含層 2-6層	土師器	皿	ⅢN 11A-B	(6.0)			口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 部体部1/8 頭部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密	良
006	東	1面 包含層 2-6層	土師器	皿	ⅢN 7A	(7.4)	1.1	(6.0)	口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/4 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR7/4 にぶい・橙	密	良
007	東	1面 包含層 2-6層	土師器	皿	ⅢN 7A	(9.9)	1.1		口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1/8 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 以下	7.5YR8/4 浅黄橙	密	良
008	東	1面 包含層 2-6層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.8)	1.8		口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 部体部1/6 頭部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR7/6 橙	密	良
009	東	1面 包含層 2-6層	土師器	皿	ⅢN 7A	(12.9)			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1/8 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 以下	7.5YR7/4 にぶい・橙	密	良
010	東	1面 包含層 2-6層	土師器	皿	ⅢN 7A	(15.5)			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1/9 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密	良
011	東	1面 包含層 2-6層	土師器	甕	丸底甕				口縁部 内面口縁部ヨコナデ、口縁部～ 1/8以下 頭部板ナデ 外面口縁部ヨコナデ、頭部ナデ	10YR7/4 にぶい・黄橙	密	末
012	東	1面 包含層 2-6層	青磁	皿	龍泉窯系 D期 I-1C	(10.1)			口縁部～ 内面クロ成形→彫目文・刻劃 体部1/4 文→施釉 外面クロ成形→施釉	2.5GY6/1 オーラブ灰	密	12e中葉～後半
013	東	1面 包含層 2-6層	平瓦			厚 1.3～ 1.9			凹面布目 凸面網目タタキ→ハナレ砂 端面へラ切	N4/0 灰	良	摩城
014	東	1面 包含層 2-6層	平瓦			厚 2.3	極小		凹面タテ板ナデ 凸面コビキB→ヨコナデ 側面へラ切。凹面端面部トリ	N5/0 灰	良	
015	東	1面 包含層 2-6層	平瓦			厚 1.4～ 1.8	極小		凹面コビキB 凸面タテ網目タタキ→ヨコナデ 端面へラ切	10YR1/6 褐灰	良	
016	東	1面 包含層 2-6層	丸瓦			厚 1～1.2			凹面コビキAB→彫目痕 凸面コビキAB→タテ網目タタキ →ヨコナデ 側面へラ切。凹面端面部トリ	5Y7/1 灰白	良	
017	東	1面 包含層 2-6層	平瓦			厚 2.0			凹面コビキAB→タテナデ→ハナ レ砂 凸面タテ網目タタキ→ハナレ砂	N6/0 灰	良	
018	東	1面 包含層 2-6層	丸瓦			厚 1.05			凹面布压痕→ヨコナデ 凸面タテ網目タタキ→ヨコナデ 側面2面へラ切	10YR1/6 褐灰	良	摩城
019	東	1面 包含層 2-6層	鉄製品	釘カ		厚 0.5						先端を丸く
020	東	004 耕作溝 2-6層	平瓦			厚 1.85	極小		凹面コビキAB 凸面コビキAB→タテ網目タタキ	N5/0 灰	良	16c末以降

表 6-2. 遺物観察表

地 點 番 号	開 拓 區	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	透徑 台柱 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	※()内は復元値		
021	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(7.6)	1.3			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、 体部1/4、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエ	7.5YR7/4 にぶい根	密 良		
022	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(6.8)	1.1			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい根	密 良		
023	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(7.0)	1.1			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい根	密 良		
024	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(7.7)	1.1			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエ～ナデ	7.5YR7/4 にぶい根	相 良		
025	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(7.4)	1.1	(4.4)		口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい根	密 良		
026	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(7.8)	0.9			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい根	密 良		
027	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(7.8)	1.5			口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部3/8、底部ヨビオサエ～ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエ～ナデ	7.5YR7/6 根	相 良		
028	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(7.8)	1.0	(6.0)		口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部3/8、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ヨビオサエ～ナデ	7.5YR7/6 根	相 良		
029	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(7.8)	1.2			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/3 にぶい根	密 良		
030	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(7.9)	1.3			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR6/4 にぶい根	相 不良		
031	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(7.9)	1.4			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい根	密 良		
032	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.0)	1.3			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR6/4 にぶい根	相 不良		
033	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.0)	1.2			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい根	密 良		
034	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.0)	1.1			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR6/4 にぶい根	密 良		
035	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.0)	0.9			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい根	密 良		
036	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.0)	1.1			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい根	密 良		

表 6-3. 遺物観察表

地番 番号	調査 番号	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	※()内は度元値	
													西	東
037	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.0)	1.2	(7.2)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナダ 底部1/8 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ナダ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
038	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.0)	1.4		口縁部～内面口縁部～体部ヨコナダ、底 部1/4 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ナダ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
039	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.0)	1.4		口縁部～内面口縁部ヨコナダ、体部～底 部1/2 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ナダ	5YR6/6 橙	密 良			
040	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.0)	1.2		口縁部～内面口縁部ヨコナダ、体部～底 部1/4 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ナダ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
041	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.0)	1.4		口縁部～内面口縁部ヨコナダ、体部～底 部1/4 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ナダ	5YR6/6 橙	密 良			
042	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.0)	1.4	(5.2)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナダ 底部1/8 底部工具によるゴマ 外面口縁部ヨコナダ、体部～底 部ユビオサエーナダ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
043	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.1)	1.1	(6.1)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナダ 底部1/4 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ユビオサエーナダ	7.5YR7/4 にぶい橙	相 良			
044	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.2)	1.3		口縁部～内面口縁部ヨコナダ、体部～底 部1/4 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ナダ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
045	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.4)	0.9	(7.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナダ 底部1/4 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ナダ	7.5YR8/4 淡黄橙	相 良			
046	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.8)	1.4	(4.7)	口縁部～内面口縁部ヨコナダ、体部～底 部3/8 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ユビオサエーナダ	5YR6/4 にぶい橙	密 良			
047	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(9.0)	1.6	(5.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナダ 底部1/5 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ナダ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
048	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(9.1)	1.0	(8.1)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナダ 底部1/4 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ユビオサエーナダ	5YR7/6 橙	相 良			
049	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(9.6)	1.4		口縁部～内面口縁部～体部ヨコナダ、底 部1/4 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ナダ	5YR7/4 にぶい橙	密 良			
050	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(9.9)	1.1		口縁部～内面口縁部ヨコナダ、体部～底 部1/8 以下 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ナダ	5YR6/7 橙	相 良			
051	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(10.1)	1.3		口縁部～内面口縁部ヨコナダ、体部～底 部1/4 底部ナダ 外面口縁部～体部ヨコナダ、底 部ナダ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
052	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(10.4)	1.5		口縁部～内面口縁部ヨコナダ、体部工具 体部1/4 上にナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			

表 6-4. 遺物観察表

地番 番号	調査 区	遺構名 地名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	※()内は度元値	
													西	東
053	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(9.3)	1.7	(6.6)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.6 、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい程	密 良			
054	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(9.5)	1.9	(7.3)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.7 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい程	密 良			
055	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(9.7)	1.8	(7.2)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.5 、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい程	密 良			
056	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(10.0)	1.7	(7.4)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ、底 底部1.6 、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/3 浅黄程	密 良			
057	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(10.0)	2.1	(7.6)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.6 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR8/3 浅黄程	密 良			
058	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(10.0)	2.3	(8.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.4 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄程	密 良			
059	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(10.1)	2.1	(8.5)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.8 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ユビオサエーナデ	7.5YR7/6 程	密 良			
060	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(10.4)	1.2	(7.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.6 、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR6/6 程	密 良			
061	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢNd 6C	(10.5)	2.3	(6.7)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.4 、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ユビオサエーナデ	7.5YR8/4 浅黄程	密 良			
062	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢNd 6C	(10.6)	2.6	(8.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.4 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ユビオサエーナデ	7.5YR8/4 浅黄程	密 良			
063	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(10.7)	2.1	(9.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.6 、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい程	密 良			
064	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢNd 6C	(10.7)	2.1	(7.6)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.4 、底部ユビオサエーナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ユビオサエーナデ	10YR8/3 浅黄程	密 良			
065	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(10.9)	1.9	(6.8)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1.4 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/6 程	密 良			
066	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.0)	2.2	(8.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.6 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	10YR7/3 にぶい、黄程	密 良			
067	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.1)	2.0	(7.2)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1.8 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ユビオ サエーナデ	7.5YR7/4 にぶい程	相 良			
068	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.1)	1.9	(7.5)	口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1.4 、底部ユビオサエーナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ユビオサエーナデ	7.5YR7/6 程	密 良			

表 6-5. 遺物観察表

地番 番号	調査 番号	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	※()内は度元値	
069	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.3)	2.0	(8.1)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/4	7.5YR8/6 淡黄橙	密 良			
070	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.3)	2.3		口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/6、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/4 淡黄橙	密 良			
071	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.4)		(8.4)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/6、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
072	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.5)			口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1/5	7.5YR8/3 淡黄橙	密 良			
073	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.6)	2.1	(9.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/6、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	10YR7/3 にぶい、黃橙	粗 良			
074	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.6)	1.9		口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/6	7.5YR7/6 橙	密 良			
075	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.7)			口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8	7.5YR7/6 橙	粗 良			
076	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.7)	2.2		口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 以下	7.5YR7/6 橙	密 良			
077	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.8)	2.2		口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/4、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	10YR8/4 淡黄橙	密 良			
078	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.8)		(8.5)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/5	7.5YR8/4 淡黄橙	密 良			
079	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.8)		(9.9)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8、底部ナデ 以下	10YR7/4 にぶい、橙	粗 良			
080	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(11.8)	2.2	(9.2)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/8、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/6 淡黄橙	密 良			
081	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.0)			口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1/6	10YR8/3 淡黄橙	密 良			
082	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.0)	2.0	(8.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/4、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	10YR8/3 淡黄橙	密 良			
083	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.0)	1.2	(10.4)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/3、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/3 淡黄橙	密 良			
084	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.0)	2.0	(9.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/5、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
085	東	208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.0)	2.1	(9.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/5、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/4 淡黄橙	密 良			

表 6-6. 遺物観察表

地番 番号	調査 番号	遺構名 地図名	器種	形状	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	※()内は度元値	
086	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.0)	2.5	(8.1)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/4 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	5YR7/6 橙	密 良			
087	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.0)	1.9	(9.0)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/4 外面口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエーナデ	7.5YR8/4 淡黄橙	密 良			
088	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.1)	1.9	(8.8)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/4 外面口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、底 部ナデ	10YR8/3 淡黄橙	密 良			
089	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.1)	1.9	(9.1)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/6 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR7/6 橙	密 良			
090	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.2)	2.3	(9.0)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/4 外面口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエーナデ	7.5YR8/6 淡黄橙	密 良			
091	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.2)	2.1	(9.6)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/6 外面口縁部ヨコナデ、体部ヨビオ サエーナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	粗 良			
092	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢS 6C	(12.2)	2.2	(7.3)	口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ底部ナデ、 底部1/8 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ヨビオサエーナデ	5YR7/6 橙	粗 良			
093	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.2)	2.6	(6.2)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/4 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 底部未調整	5YR7/6 橙	密 良			
094	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.3)	2.0		口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/4 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
095	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.3)	2.1	(9.2)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/5 外面口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエーナデ	7.5YR8/4 淡黄橙	密 良			
096	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.4)	2.4	(9.4)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部3/4 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/3 淡黄橙	密 良			
097	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.4)			口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/4 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
098	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.4)	2.7	(8.5)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/3 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエーナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
099	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢS 6C	(12.4)	2.7	(7.5)	口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ底部ナデ、 底部1/4 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	5YR6/6 橙	密 良			
100	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.4)	2.3	(9.0)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/5 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ヨビオサエーナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 良			
101	東	208土器調り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.5)	2.0	(8.5)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/6 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR8/6 淡黄橙	密 良			

表 6-7. 遺物観察表

地番 番号	調査 区分	遺構名 地番名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	※()内は度元値	
													7.5YR8/6 橙	7.5YR8/6 浅黄橙
102 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.5)	1.9	(9.5)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.8 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ヨビオサエ～ナデ						7.5YR8/6 橙	密 良
103 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.7)	2.0	(8.8)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ、底 部1.6 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ヨビオサエ～ナデ					7.5YR8/6 浅黄橙	密 良	
104 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.8)	2.1	(6.8)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1.8 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 底部ヨビオサエ～ナデ					7.5YR8/4 浅黄橙	密 良	
105 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.8)	2.8		口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1.4 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ヨビオサエ～ナデ					7.5YR7/4 に54°橙	密 良	
106 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.9)	2.5		口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.8 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ヨビオサエ～ナデ					7.5YR8/6 橙	密 良	
107 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.9)			口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.8 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ					7.5YR8/6 浅黄橙	密 良	
108 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.9)	2.4	(6.2)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.6 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ヨビオサエ～ナデ					7.5YR8/6 浅黄橙	密 良	
109 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(13.0)	2.1	(8.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部6.5 、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエ～ナデ					10YR8/3 浅黄橙	密 良	
110 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(13.0)	2.1	(9.6)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.4 、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエ～ナデ					7.5YR7/4 に54°橙	粗 良	
111 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(13.0)	2.1	(8.9)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.2 、底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエ～ナデ					7.5YR7/4 に54°橙	密 良	
112 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(13.0)			口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1.6 外面口縁部ヨコナデ、体部ヨビオ サエ～ナデ					7.5YR7/4 に54°橙	密 良	
113 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(13.0)			口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1.8 以下 外面口縁部ヨコナデ、体部ヨビオ サエ～ナデ					7.5YR8/4 浅黄橙	密 良	
114 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(13.0)	2.1	(10.4)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.8 、底部ナデ 以下 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ヨビオサエ～ナデ					SYR7/6 橙	密 良	
115 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(13.1)	2.1	(8.7)	口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ					7.5YR7/4 に54°橙	粗 良	
116 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(13.2)	2.1	(8.2)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.3 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ					10YR8/3 浅黄橙	粗 良	
117 東 208土器韌り 第11-1層	土師器	皿	ⅢN 6C	(13.2)	2.3	(8.0)	口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.6 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、底 部ナデ					7.5YR8/4 浅黄橙	密 良	

表 6-8. 遺物観察表

地番 番号	調査 番号	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	※()内は度元値	
118 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢN 6C	(13.2)	2.5				口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.8 、底部ナデ 外面白口縁部ヨコナデ、体部～底 部ユビオサエーナデ	7.5YR7/4 に54°橙	密 良		
119 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢN 6C	(13.6)	1.9				口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.5 、底部ナデ 外面白口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 に54°橙	密 良		
120 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢN 6C	(13.8)	2.2	(11.1)			口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.8 、底部ナデ 外面白口縁部～体部ヨコナデ、底 部工具によるナデ	7.5YR7/6 橙	密 良		
121 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢN 6C	(13.8)	2.0	(10.2)			口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.8 、底部ナデ 以下 外面白口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密 良		
122 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢN 6C	(14.0)	2.0	(11.0)			口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.6 、底部ナデ 外面白口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR7/4 に54°橙	密 良		
123 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢN 6C	(14.6)	2.1	(11.2)			口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.8 、底部ナデ 外面白口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR7/6 橙	密 良		
124 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢN 6C	(12.6)	2.7	(8.0)			口縁部～内面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1/3 外面白口縁部ヨコナデ、体部ユビオ サエ～底部ナデ	10YR8/2 灰白	密 良		
125 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢN 6C	(13.0)	2.7	(8.7)			口縁部～内面白口縁部ヨコナデ、体部～底 部1.8 、底部ナデ 以下 外面白口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	10YR8/2 灰白	密 良		
126 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢN 6C	(14.0)					口縁部～内面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1.8 外面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ 以下	10YR8/2 灰白	密 良		
127 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢN 6C	(14.7)					口縁部～内面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1.8 外面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ 以下	2.5Y8/2 灰白	密 良		
128 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢS 6C	(8.0)	1.3	(6.0)			口縁部～内面白口縁部ヨコナデ、底 部1.6 、底部ナデ 外面白口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	10YR8/2 灰白	密 良		
129 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢS 6C	(9.2)					口縁部～内面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1.8 外面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/2 灰白	密 良		
130 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢS 6C	(10.3)					口縁部～内面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1.8 外面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/3 浅黄橙	密 良		
131 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢS 6C	(10.3)	2.8	(4.7)			口縁部～内面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1.6 外面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/2 灰白	密 良		
132 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢS 6C	(10.6)					口縁部～内面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1.8 外面白口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/2 灰白	密 良		
133 東 208土器調り 第11-1層		土師器	皿	ⅢS 6C	(11.0)					口縁部～内面白口縁部ヨコナデ、体部～底 部1.8 、底部ナデ 外面白口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	2.5Y8/2 灰白	密 良		
134 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	皿		(8.4)	1.5				口縁部～内面白ナデ 底部1.8 外面白口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5Y3/1 オリーブ黒	密 良		

表 6-9. 遺物観察表

地番 番号	調査 番号	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残存 率	成形調整の特徴	外色調	※()内は度元値		
												偏重		
135 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	皿		(8.5)	1.6		口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底部3.8 底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ		10Y4/1 灰		密不良		
136 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	皿		(10.0)	1.0		口縁部～ 内面ナデ 底部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底部以下 底部ナデ		N3.0 暗灰		密良		
137 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	楕	椭葉型 Ⅲ-2	(11.0)	4.1	(3.6)	口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底部1.4 底部ナデ、厚底 外面口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ		2.5Y8/2 灰白		密厚底 不良		
138 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	楕	椭葉型 Ⅲ-2	(13.2)	4.1	(4.1)	口縁部～ 内面ナデ 底部1.8 外面口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ		N5/0 灰		密厚底 不良		
139 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	楕	椭葉型 Ⅲ-3	(13.3)			口縁部～ 内面ミガキ 体部1.4 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ		N6/0 灰		密不良		
140 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	楕	椭葉型 Ⅲ-3	(13.4)			口縁部～ 内面ヨコナデ 体部1.8 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ		7.5Y4/1 灰		密良		
141 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	楕	椭葉型 Ⅲ-3	(13.4)			口縁部～ 内面ミガキ 体部1.8 外面口縁部ヨコナデ、体部ユビオ エリーナデ		5Y4/1 灰		密厚底 不良		
142 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	楕	椭葉型 Ⅲ-3	(13.5)	3.9	(4.5)	口縁部～ 内面ミガキ 底部2.0 底部堅耳付け高台		2.5Y8/2 灰白		密不良		
143 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	楕	椭葉型 Ⅲ-3	(13.8)			口縁部～ 内面摩滅 底部3.8 外面口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ		7.5Y5/1 灰		密不良		
144 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	楕	椭葉型 IV-1	(11.1)	3.2	(4.6)	口縁部～ 内面ナデ～ミガキ 底部1.8 外面 堅耳付け高台		7.5Y5/1 灰		密良		
145 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	楕	椭葉型 IV-1	(12.6)	4.1	(4.8)	口縁部～ 内面口縁部～底部ミガキ 底部1.4 外面 堅耳付け高台		10YR7/2 にぶい・黄根		密厚底 不良		
146 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	楕	椭葉型 IV-1	(12.8)	4.0	4.3	口縁部～ 内面ミガキ 底部4.3 外面ナデ 堅耳付け高台		N6/0 灰		密厚底 不良		
147 東 208土器調り 第11-1層		瓦器	楕	椭葉型 IV-1	(12.8)	4.0	(3.3)	口縁部～ 内面口縁部～底部ミガキ 底部1.4 外面 堅耳付け高台		7.5YR7/2 明褐色		密厚底 不良		
148 東 208土器調り 土器系 第11-1層		土器系	鍋		(20.0)			脚部1/8 内面ナデ 外面ヨコナデ		10YR6/3 にぶい根		相良 10c後半 折疊型、摩滅		
149 東 208土器調り 東播系 濃赤器		東播系 濃赤器	甕		(27.3)			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 肩部1/4 外面口縁部ヨコナデ、頸部～肩 部タキ		10YR8/1 灰白		相良 11c末～12c前半		
150 東 208土器調り 第11-1層		青磁	甕	越州窑系 B期 1-2.2			(7.6)	脚部～底 内面底面部ヨコ形成～施釉(真人 部1/8 あり) 外面部ヨコ形成～施釉(真人 あり)、底面部 ケズり出、高台、高台内側施釉		10YR6/3 にぶい・黄根		密良 10c後半～11c中		
151 東 208土器調り 第11-1層		白磁	甕	福建省系 D期 Ⅳ-3	(16.0)			口縁部～ 内面ヨコ形成～施釉1条～施釉 体部1/8 外面ヨコ形成～施釉 以下		5Y7/1灰白		密 12c中葉～後半 良		

表 6-10. 遺物観察表

地番 番号	調査 番号	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 cm	残存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	※()内は度元値	
													偏重	
152 東 208土器調り 第11-1層	白磁	碗	福建省系 D期 V-4b		(6.8)	体部～底 内面ロクロ成形→施釉、蛇の目釉 部7.8 ハギ、砂付着 外面ロクロ成形、体部施釉、ケズ り出し高台、露胎	10YR7/3 にぶい黄橙		密 良	12e中頃～後半				
153 東 208土器調り 第11-1層	青磁	碗	龍泉窯系 E期 IIb	(14.8)		口縁部～ 内面底部ロクロ成形→施釉 体部1.8 外面体部ロクロ成形→進歩化→ 以下 施釉	2.5GY6/1 オーリーブ灰		密 良	13c初頭～前半				
154 東 208土器調り 第11-1層	平瓦			長さ 7.4	幅 5.1	厚み 1.5		凹面布目痕、ハナレ砂 側面ヘラ切り、凸面ナデ 凸面ナデ	N5/0 灰		不良	摩滅		
155 東 208土器調り 第11-1層	丸瓦			長さ 7.9	幅 3.7	厚み 1.7		凹面布目痕 側面ヘラ切り、内面面ナデ 凸面タテ繩目タキ→ヨコナデ	N7/0 灰白		良			
156 東 208土器調り 第11-1層	丸瓦			長さ 4.9	幅 4.1	厚み 1.2		凹面布目痕→継ヒビ痕 凸面タテ繩目タキ→ヨコナデ→ ハナレ砂	N4/0 灰		良	摩滅		
157 東 208土器調り 第11-1層	埴輪	朝顔形 埴輪					口縁部 内面ナデ 1/8以下 外面ハケ		7.5YR7/4 にぶい緑	粗 不良	摩滅			
158 東 208土器調り 第11-1層	埴輪	(円筒) 埴輪			(19.6)	体部1.8	内面ハケ5本/cm 以下 外面ヒコナデ		7.5YR7/4 にぶい緑	粗 良	摩滅			
159 東 208土器調り 第11-1層	金属性	鉄滓		長さ 3.6	幅 3.6	厚み 1.5								
160 西 1面 包含層 (表土剥削) 2-1～9層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.0)	1.1	(6.2)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 底部1.8 部ナデ 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙		密 良				
161 西 1面 包含層 (表土剥削) 2-1～9層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.4)	1.3		口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 底部1.8 部ナデ 外表面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/3 にぶい緑		密 良				
162 西 1面 包含層 (表土剥削) 2-1～9層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.5)	1.2	(5.9)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 底部1.8 部ナデ 以下 外表面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙		密 良				
163 西 1面 包含層 (表土剥削) 2-1～9層	土師器	皿	ⅢN 6C	(9.4)	1.5		口縁部～ 内面体部～底部ナデ 底部1.8 外面体部～底部ナデ 以下	7.5YR8/3 浅黄橙		密 良				
164 西 1面 包含層 (表土剥削) 2-1～9層	土師器	皿	ⅢN 7A	(9.8)	13.5		口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 底部1.4 部ナデ 外表面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	SYR7/4 にぶい緑		密 良				
165 西 1面 包含層 (表土剥削) 2-1～9層	土師器	皿	ⅢN 7A	(9.9)	1.4		口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 底部1.8 部ナデ 以下 外表面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙		密 不良				
166 西 1面 包含層 (表土剥削) 2-1～9層	土師器	皿	ⅢN 7A	(12.1)	1.3		口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 底部1.8 部ナデ 外表面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙		密 良				
167 西 1面 包含層 (表土剥削) 2-1～9層	土師器	皿	ⅢN 7A	(9.7)	1.6		口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1.8 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ 以下	SYR7/4 にぶい緑		密 良				
168 西 1面 包含層 (表土剥削) 2-1～9層	土師器	皿	ⅢN 7A	(9.9)	1.9		口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 底部1.8 部ナデ 以下 外表面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨコナデ	7.5YR7/2 明褐色		密 良				

表 6-11. 遺物観察表

地 點 番 号	遺 物 名	形 種	器 形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	透 徑 台 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	焼 成	備 考	(内) 内は復元値
169	西 1面 包含層 (表土削除) 2-1~9層	土師器	皿	Ⅲ ⅥN 6C	(11.0)	1.7			口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ、底 部1/8 底ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密 良	摩城	
170	西 1面 包含層 (表土削除) 2-1~9層	土師器	皿	Ⅲ ⅥN 6C	(11.0)	2.2			口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 底ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密 良		
171	西 1面 包含層 (表土削除) 2-1~9層	土師器	皿	Ⅲ ⅥN 7A	(12.0)	1.6			口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ、底 部1/8 底ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密 良		
172	西 1面 包含層 (表土削除) 2-1~9層	土師器	皿	Ⅲ ⅥN 7A	(12.0)	1.7			口縁部～内面口縁部～底部工具によるナ ダ 底部1/8 外面口縁部～底部工具によるナ ダ	7.5YR8/3 浅黄橙	密 良		
173	西 1面 包含層 (表土削除) 2-1~9層	土師器	皿	Ⅲ ⅥN 7A	(12.0)	2.0			口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 底ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR7/3 に5V-橙	密 良		
174	西 1面 包含層 (表土削除) 2-1~9層	土師器	皿	Ⅲ ⅥN 7A	(13.4)	2.2			口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ、底 部1/8 底ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	密 良		
175	西 1面 包含層 (表土削除) 2-1~9層	土師器	皿	Ⅲ ⅥN 7A	(14.0)	2.1			口縁部～内面口縁部～体部ヨコナデ、底 部1/8 底ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/3 浅黄	密 良		
176	西 1面 包含層 (表土削除) 2-1~9層	瓦器	椀	橢葉型 IV-1	(12.0)				口縁部～内面口縁部ケズリ、体部ナデ→ 底部1/8 ガキ 以下 外面口縁部ヨコナデ、体部コビオ エリ→ナデ	N6-0灰 に5V-灰	密 良	13e後集	
177	西 1面 包含層 (表土削除) 2-1~9層	弥生土器	壺	弥生後期 後豪カ		3.7	底部1/5	内面底部ハケ目(11mm)08 外面ハケ目(6mm)09	疊付に植物 灰、高台内側ナデ	SYR6/4 に5V-橙	密 良		
178	西 1面 包含層 (表土削除) 2-1~9層	白磁	碗	広東省 福建省共 C期 IV-1a	(15.0)				口縁部～内面口縁部～体部ロクロ成形→ 体部1/8 施釉、口縁部輪二度掛け 外面口縁部～体部ロクロ成形→ 口縁部ドヘケズリ、体部ヘラに 上る面取り、口縁部～体部施釉、 体部下部露胎	SY7/2 灰白	密 良	11e後半～12c前 半	
179	西 1面 包含層 2-2層	陶器	蓋物鉢	信楽 5期	(11.6)		1/8以下	内面ロクロ成形 外面ロクロ成形 焼き締め		7.5YR4/1 褐灰	密 良	19c中頃～後半	
180	西 1面 包含層 2-10層	瓦器	皿	橢葉型 II-2	(8.3)	1.3			口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 底ヨコナデ～ミガキ 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、体 部～底部ナデ～むらこミガキ あり	7.5Y5/1 灰	密 良	12c中集	
181	西 8層 上位層	土師器	皿	Ⅲ ⅥN 7A	(7.0)	1.0			口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 底ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	SYR7/4に5 レバ	密 不良		
182	西 8層 上位層	土師器	皿	Ⅲ ⅥN 7A	(7.1)	0.8	(4.0)	口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 底ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密 良			
183	西 8層 上位層	土師器	皿	Ⅲ ⅥN 7A	(7.5)	1.1	(6.8)	口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4 底ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	SYR7/3 に5V-橙	密 良			

表 6-12. 遺物観察表

() 内は復元値

地 點 番 号	開 拓 面 積	遺 構 名	器 種	器 形	分 類 段 階 分 区	口 徑 cm	器 高 cm	透 徑 台 径 cm	残 存 率	成 形 調 整 の 特 徴	外 色 調	胎 土 燒 成	備 考
184	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(7.6)	1.1	(6.4)	口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR6/4 にぶい程	密 良		
185	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(7.8)	1.2		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密 良		
186	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(7.9)	1.0		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密 良		
187	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(8.0)	1.1		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密 良	摩 滅	
188	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(8.0)	1.0		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密 良		
189	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(8.7)	1.1		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密 良	摩 滅	
190	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(9.7)	1.5		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ 底ヨビオサエーナデ	7.5YR7/4 にぶい程	密 良		
191	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.5)	1.4	(8.6)	口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密 良	摩 滅	
192	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(8.0)			口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/3 にぶい程	密 良		
193	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(8.8)	1.3		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい程	密 良		
194	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(8.8)	1.6	(5.5)	口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/6 橙	密 良		
195	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(10.6)	2.1		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密 不良		
196	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.2)	1.6		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密 良		
197	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.8)	2.0		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR7/4 にぶい程	密 良		
198	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(9.8)	1.9		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR7/4 にぶい程	密 良		
199	西	8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(12.3)	1.9		口縁部～内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 部ナデ 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR7/6 程	密 不良	摩 滅	

表 6-13. 遺物観察表

地 點 番 号	層 面 名	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	透徑 台溝 cm	残存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 燒成	備考	
													※()内は復元値	
200	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(9.0)					口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	7.5YR8/2 灰白	密 良		
201	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(9.3)	1.6				口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、体 部1/8 下部ナデ 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR7/6 程	密 良		
202	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(10.0)					口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ 以下	5YR7/6 程	密 良		
203	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.6)					口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ 以下	10YR8/2 灰白	密 良		
204	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.8)					口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、体 部1/8 下部ナデ 以下 外面口縁部～体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	7.5YR7/6 程	密 良		
205	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(13.7)					口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1/8 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 以下	7.5YR7/4 にぶい程	密 良	摩 滅	
206	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(9.2)					口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	5YR7/6 程	密 良		
207	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.7)	2.3				口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ 以下 外面口縁部ナデ	7.5YR8/4 淡黄程	密 良		
208	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(12.0)	2.1				口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 壁ナデ 以下 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい程	密 良		
209	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(13.0)					口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 壁ナデ 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/3 にぶい程	密 良		
210	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(13.0)	2.0				口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	5YR6/6 程	密 良		
211	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(13.0)					口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	5YR7/4 程	密 良		
212	西 8層 上位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(12.7)	2.9				口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	5YR6/6 程	密 良		
213	西 8層 上位層	土師器	甕	三河型甕 II-2 (1類)	(23.2)					口縁部、 内面口縁部ヨコナデ、 縫部板ナ 1/8以下 デ、スヌ着 外面口縁部ヨコナデ、 縫部板ナ デ	2.5YR4/3 にぶい赤褐	粗 良	10c後半 清野型錫	
214	西 8層 上位層	瓦器	椀	楠葉型 II-3	(14.9)					口縁部～ 内面口縁部～体部ナデ→ミガキ 体部1/8 外面口縁部～体部ナデ→ミガキ 以下	N4.0 灰	密 良		
215	西 8層 上位層	瓦器	椀	楠葉型 B-3			(4.0)	底部1/8	内面底部ナデ 外面底部ナデ 見り付け高台		2.5Y8/2 灰白	密 不 良	摩 滅	

表 6-14. 遺物観察表

() 内は復元値

地 點 番 号	開 拓 面 積	遺 物 名	器 種	形 形	分 類 段 階 分 区	口 徑 cm	器 高 cm	透 徑 台 径 cm	残 存 率	成 形 調 整 の 特 徴	外 色 調	胎 土 燒 成	備 考
216	西	8層 上位層	瓦器	楕	椭圓型 皿-3	(14.0)				口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ミカキ 底部1/8 外面口縁部～体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	N6-0 灰		密 良
217	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(6.0)	0.8			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/8 各面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 に54・根		密 良
218	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(7.8)	0.9			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙		密 良
219	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.0)	1.1			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 に54・根		密 良
220	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.1)	1.1			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙		密 良
221	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.2)	1.2			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/3 に54・根		密 不良
222	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.2)	1.1			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/4 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 に54・根		密 不良
223	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.5)	1.1			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	SYR7/4 に54・根		密 良
224	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.6)	1.1	(6.6)		口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/4 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	SYR7/4 に54・根		密 良
225	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.8)	1.1			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/4 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙		密 不良
226	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.9)	1.2			口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 部1/8 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ 内外口縁部にスス付着	SYR7/6 根		密 良
227	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(11.1)	1.2			口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 部1/8 以下 外面口縁部ヨコナデ、体部～底 部ナデ	7.5YR7/4 に54・根		密 良
228	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.8)	1.8			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部3/8 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、体 部下部～底部ナデ	7.5YR7/6 根		密 良
229	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(12.0)	2.3			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/4 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙		密 良
230	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(8.4)	1.5			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙		密 良
231	西	8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(10.0)	1.4			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 部1/8 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 に54・根		密 不良

表 6-15. 遺物観察表

※()内は度元値

地番 番号	調査 番号	遺構名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	備考
232	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(10.1)	1.6		口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/8 部ナデ	以下	7.5YR8/4 浅黄橙	密 良		
233	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.9)			口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 体部1/8 部ナデ	以下	7.5YR7/4 に54°傾	密 摩滅 不良		
234	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(12.0)	1.9		口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 底部1/8 部ナデ	以下	7.5YR7/4 に54°傾	密 良	摩滅	
235	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(12.0)	1.6		口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 底部1/8 部ナデ	以下	7.5YR8/4 浅黄橙	密 不良		
236	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(12.1)	1.9	(10.2)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 底部1/8 部ナデ		7.5YR8/4 浅黄橙	密 良		
237	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.0)	1.9		口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 底部1/8 部ナデ	以下	10YR7/3 に54°傾	密 不良		
238	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(12.0)	1.9		口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 底部1/8 部ナデ	以下	7.5YR7/3 に54°傾	密 不良		
239	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(12.4)	2.3		口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 底部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、体 部下部ナデ	以下	7.5YR7/3 に54°傾	密 良		
240	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.9)	1.8		口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、体 部下部ナデ		5YR7/4 に54°傾	密 良		
241	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(12.0)			口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ		7.5YR7/4 に54°傾	密 良		
242	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(12.0)	1.6		口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、体 部1/8 部ナデ	以下	5YR7/4 に54°傾	密 良		
243	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(12.0)	1.7	(9.4)	口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 体部1/8 部ナデ	以下	5YR7/4 に54°傾	相 良		
244	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(10.6)			口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	以下	7.5YR7/3 に54°傾	密 良	内外口縁部に スズ付着	
245	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.9)			口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 体部1/8 部ナデ	以下	5YR7/4 に54°傾	密 良		
246	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.9)			口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	以下	5YR6/6 傾	密 良		
247	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢEN 7A	(11.9)			口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1/8 外面口縁部～体部ヨコナデ、体 部下部ナデ	以下	5YR7/6 傾	密 良		

表 6-16. 遺物観察表

地番 番号	調査 区分	遺構名 地層名	器種	形形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残存 率	成形調整の特徴	外色調	※()内は度元値	
												地質 構成	備考
248	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(12.0)					口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ 体部1.8 以下 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	粗 良	
249	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(12.0)					口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1.8 外面口縁部～体部ヨコナデ、体 以下 底ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密 良	
250	西 8層 下位層	土師器	皿	ⅢN 7A	(12.0)					口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ 体部1.8 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 以下 部ナデ	5YR6/4 にぶい橙	密 不良	
251	西 2面 盛土層 10-2層	土師器	皿	ⅢN 6C	8.9	1.3				口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 底部3.8 底ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 淡黄橙	密 良	厚壁
252	西 2面 盛土層 10-2層	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.1)	1.3				口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 底部3.8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密 良	
253	西 2面 盛土層 10-2層	土師器	皿	ⅢN 6C	(9.2)	1.9				口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 底部3.8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密 良	
254	西 2面 盛土層 10-2層	土師器	皿	ⅢN 6C	(12.6)	1.9				口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 底部1.8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエーナデ	5YR7/4 にぶい橙	密 良	
255	西 2面 盛土層 10-2層	土師器	皿	ⅢN 6C	13.9	2.7				充形 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエーナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエーナデ	7.5YR8/6 淡黄橙	密 良	
256	西 10-2層 盛土層 西壁	土師器	皿	ⅢN 6C	8.9	1.6				口縁部～ 内面口縁部～体部ヨコナデ、底 底部7.8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 淡黄橙	密 不良	
257	西 10-2層 盛土層 西壁	土師器	皿	ⅢN 6C	(9.3)	1.5				口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部～底 底部3.8 部ナデ 外面口縁部～体部ヨコナデ、底 部ヨビオサエーナデ	7.5YR8/3 淡黄橙	密 良	
258	西 10-2層 盛土層 西壁	土師器	皿	ⅢN 6C	(8.9)	1.5				口縁部～ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 体部1.8 以下 部ナデ	7.5YR8/4 淡黄橙	密 良	
259	西 10-2層 盛土層 西壁	瓦器	椀	椭葉型 Ⅲ-3			(4.0)	体部～底 内面体部～底部ミガキ 部1.8以下 外面部体部～底部ナデ 貼り付け高台		2.5Y6/1 黄灰	密 良	13e中葉	
260	西 3面 包含層 11-1層	土師器	鍋		(22.2)				口縁部～ 内面ナデ 頸部1.8 外面部体部～底部ナデ 以下 全	5YR7/4 にぶい橙	粗 良	9e前半～10e前半 折腰型	

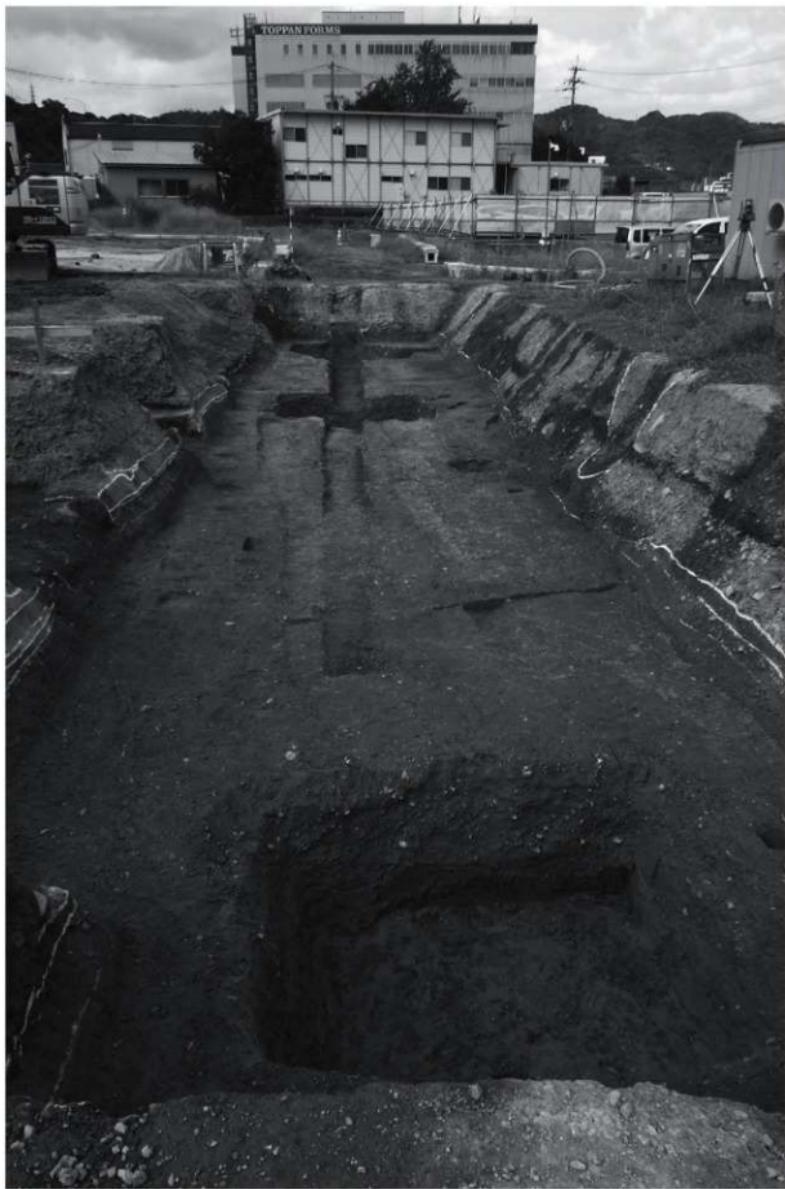
写 真 図 版



調査前の調査地全景<左上が天王山丘陵、右上が男山丘陵、中央奥が醍醐山地>(南西から)



1-1. 調査地周辺航空写真（昭和 30 年撮影）



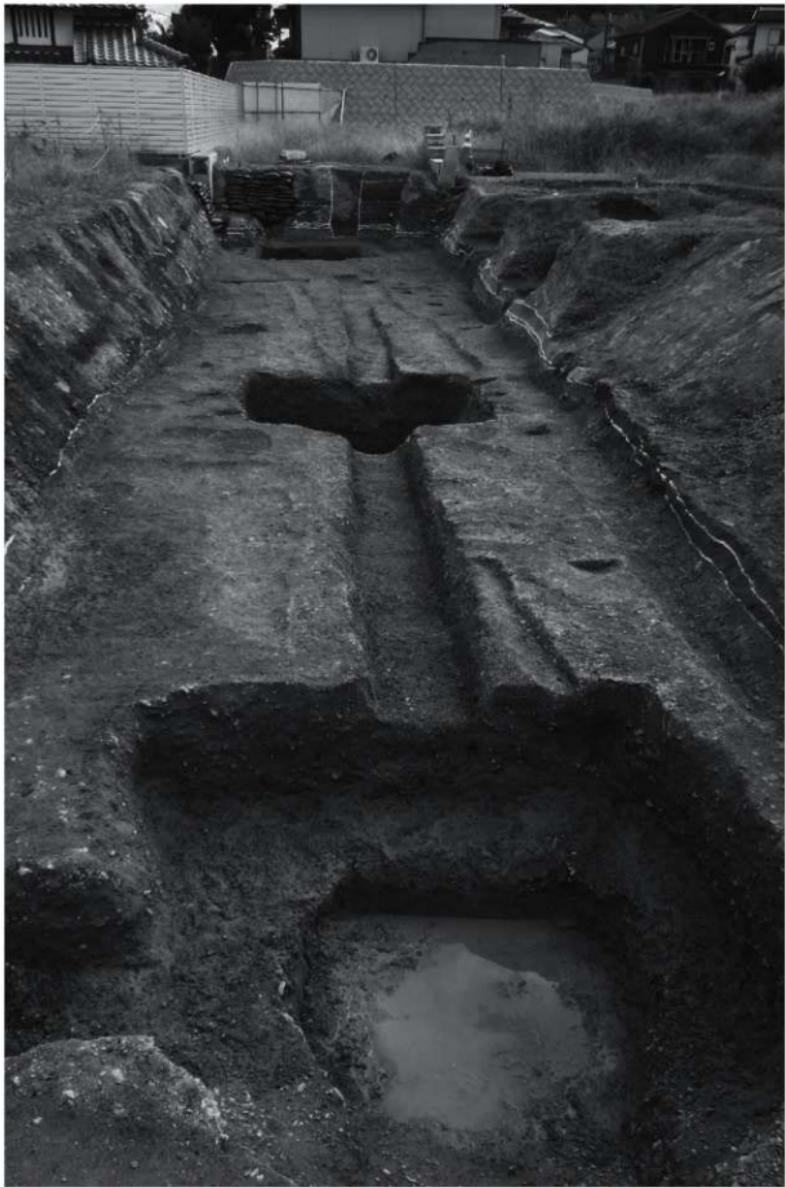
2-1. 東区 第1遺構面 完掘全景（南から）



3-1. 東区 第1遺構面 遺構検出状況（南から）



3-2. 東区 第1遺構面 耕作溝、耕作穴等（南から）



4-1. 東区 第Ⅰ遺構面 完掘全景（北から）



5-1. 東区 第1遺構面 遺構検出状況（北から）



5-2. 東区 第1遺構面 耕作溝、耕作穴等（北から）



6-1. 東区 第2遺構面 完掘全景（北から）



7-1. 東区 第2遺構面 遺構完掘状況（北から）



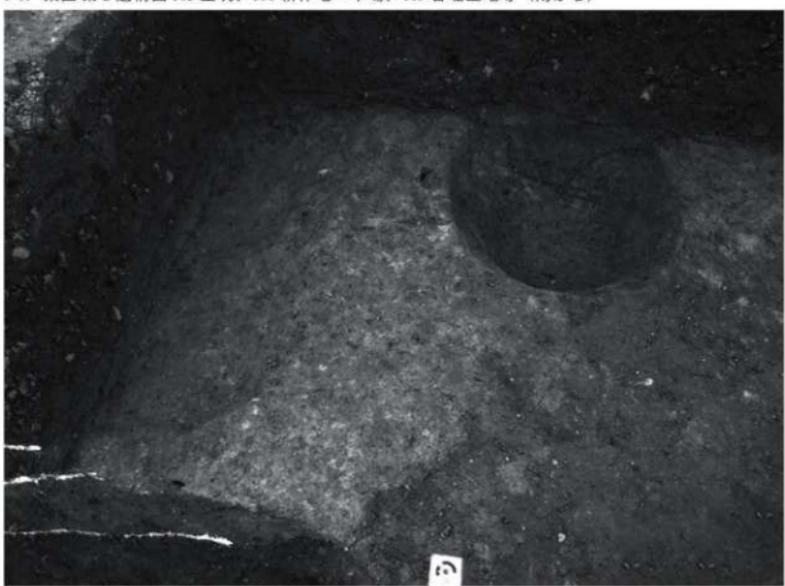
7-2. 東区 第2遺構面 101溝、102土坑、103・104耕作穴等（北から）



8-1. 東区 第2遺構面 完掘全景（南から）



9-1. 東区 第2遺構面 105 土坑、108 耕作地・平場、109 谷埋立地等（南から）



9-2. 東区 第2遺構面 105 土坑（東から）



10-1. 東区 第3遺構面 完掘全景（北から）



11-1. 東区 第3遺構面 遺構検出状況（南から）



11-2. 東区 深掘り調査全景（北東から）



12-1. 西区 第1遺構面 完掘全景（南から）



12-2. 西区 第1遺構面 完掘全景（北から）



13-1. 西区 第1遺構面 耕作溝（北東から）



13-2. 西区 第1遺構面 耕作溝（東から）



13-3. 西区 第1遺構面 耕作溝（東から）



13-4. 西区 第1遺構面 耕作溝（東から）



13-5. 西区 第1遺構面 耕作溝（東から）



14-1. 西区 第2遺構面 遺構検出状況（南から）



14-2. 西区 第2遺構面 204・205柱穴（西から）



14-3. 西区 第2遺構面 202土坑、203・206柱穴（西から）



14-4. 西区 第2遺構面 検出壁面（西から）



14-5. 西区 第2遺構面 10-2層遺物出土状況（西から）



15-1. 西区 第3遺構面 301～305 土砂流下部抉込痕（北東から）



15-2. 西区 第3遺構面 301～305 土砂流下部抉込痕（北西から）



16-1. 西区 第3遺構面 東壁壁面 306 後流の流路（北西から）



16-2. 西区 第3遺構面 北壁壁面 306 後流の流路（南から）



17-1. 西区 深掘り調査（南西から）



17-2. 西区 深掘り調査（北から）



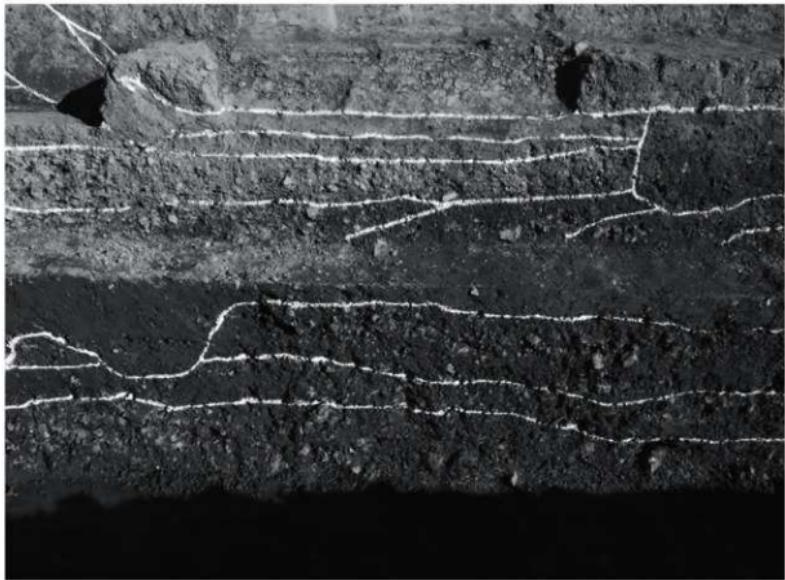
17-3. 西区 深掘り調査（北西から）



17-4. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物全景（西から）



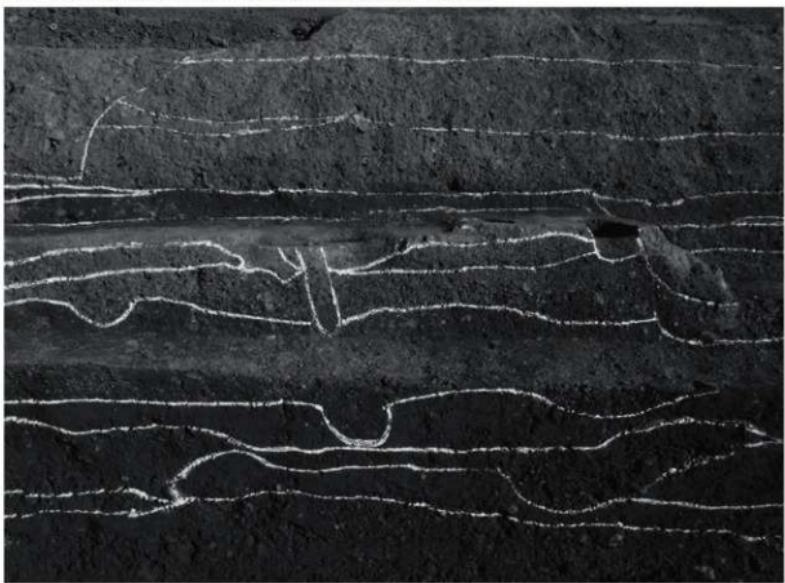
18-1. 西区深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物南半（西から）



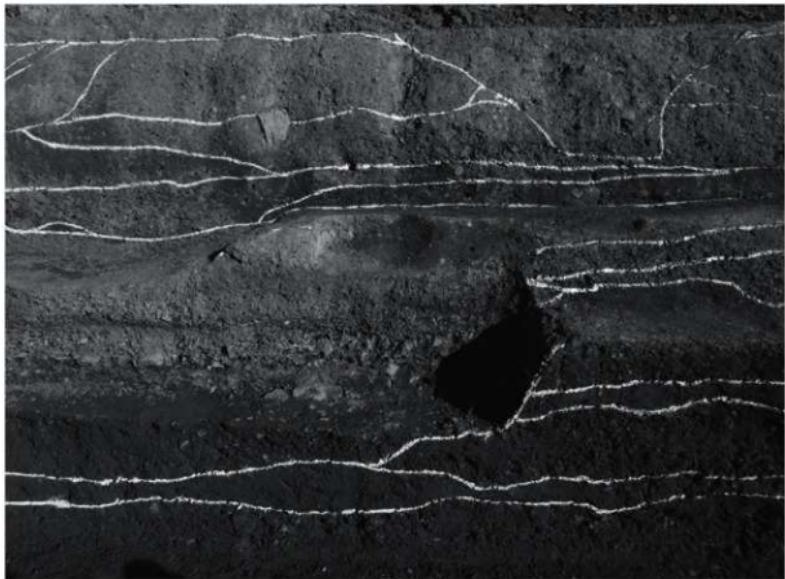
18-2. 西区深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分①（西から）



19-1. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分②（西から）



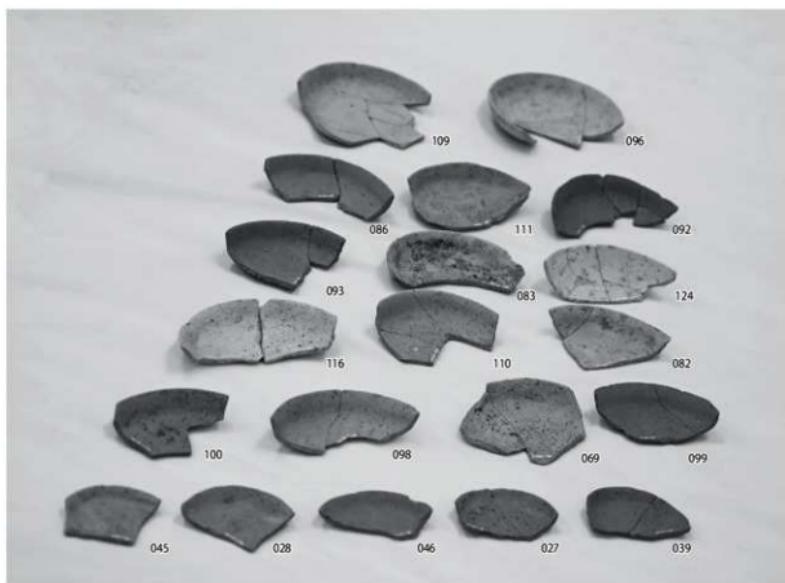
19-2. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分③（西から）



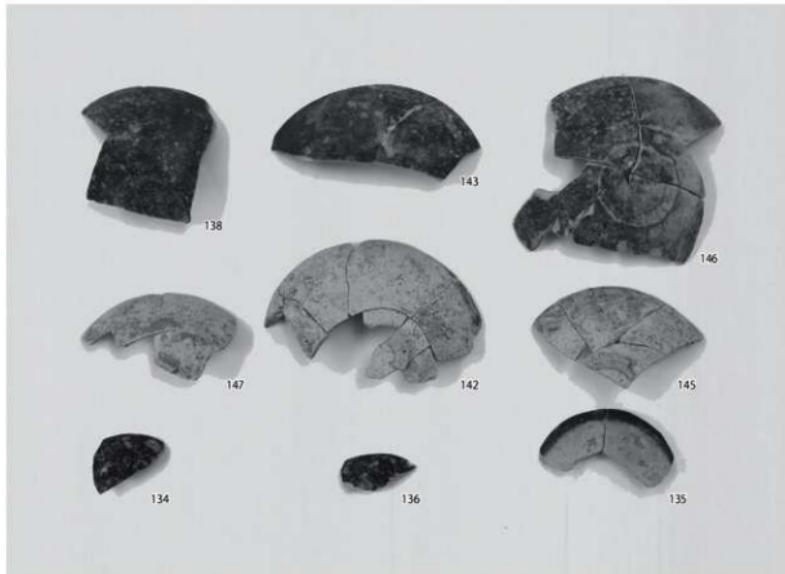
20-1. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分④（西から）



20-2. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分⑤（西から）



21-1. 東区 208 土器溜り出土遺物 1 (土師器皿集合写真)



21-2. 東区 208 土器溜り出土遺物 2 (瓦器梶)



22-1. 東区表採遺物（複弁8葉蓮華文軒丸瓦）



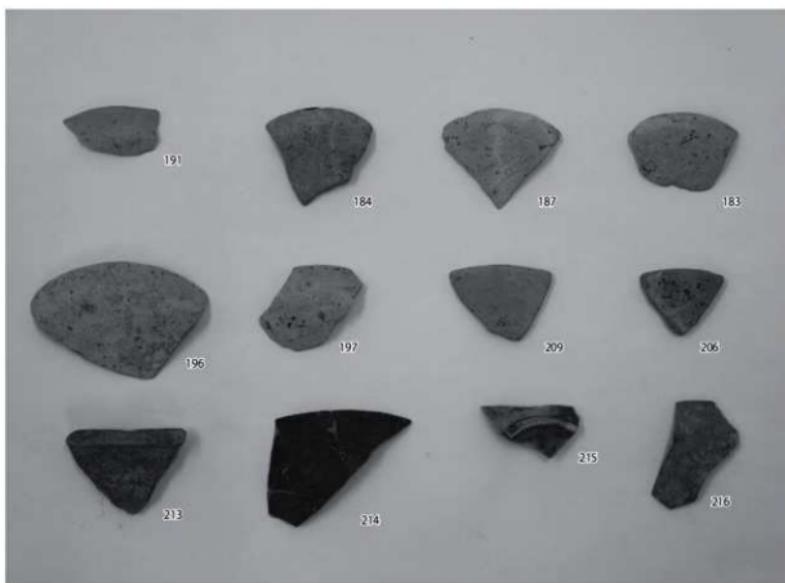
22-2. 東区208土器溜り出土遺物3（土師器裏、鉄滓、埴輪）



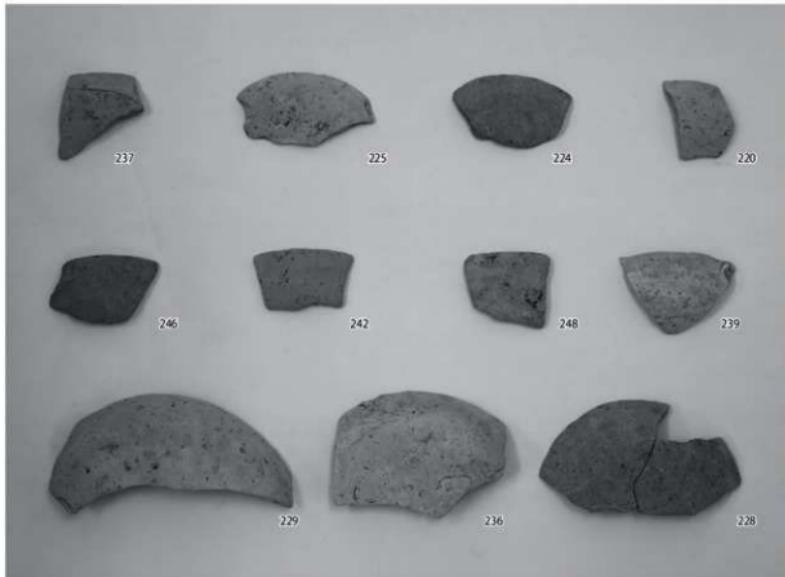
22-3. 東区208土器溜り出土遺物4（須恵器甕）



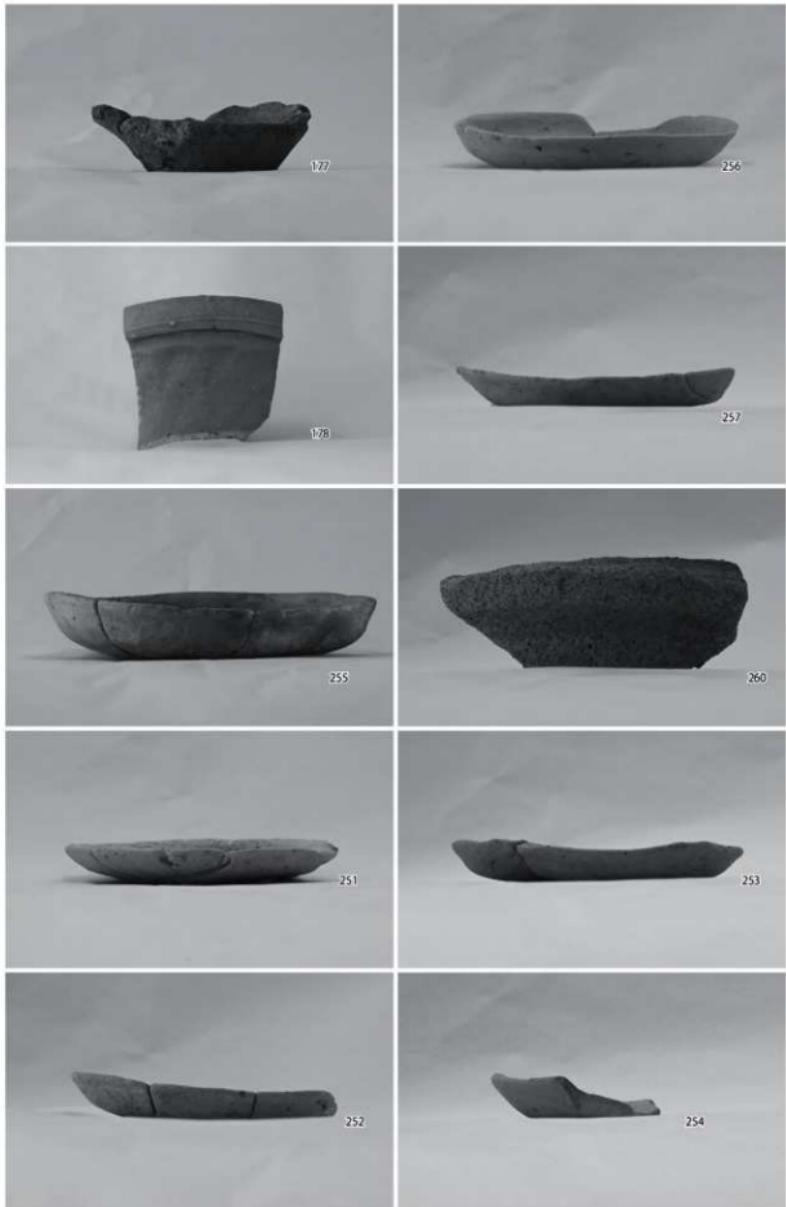
22-4. 東区208土器溜り出土遺物5（貿易陶磁器）



23-1. 西区舌状地形堆積物第8層上位層出土遺物（土師器皿・甕、瓦器椀）



23-2. 西区舌状地形堆積物第8層下位層出土遺物（土師器皿）



24-1. 西区第2-1~10層・第10-2層・第11-1層出土遺物

報 告 書 抄 錄

島本町文化財調査報告書 第49集

越谷遺跡(KT22-1 バンド山)発掘調査報告書

発行年月日 2023年5月31日

編 集 島本町教育委員会
大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号
株式会社 島田組
大阪府八尾市弓削町南3丁目20番地2

発 行 島本町教育委員会
大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号

印刷・製本 三星商事印刷株式会社
京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番